

名 残 III

— 福岡県宗像市所在遺跡の発掘調査報告 —

宗像市文化財調査報告書

第 25 集

1990

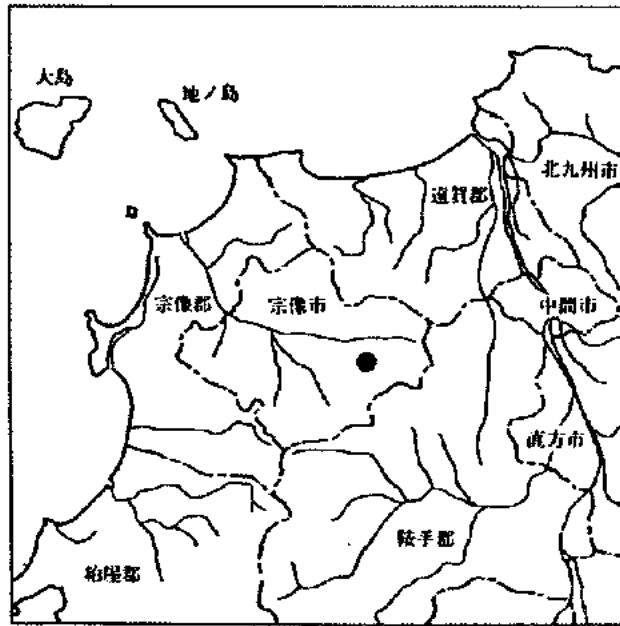
宗像市教育委員会

NA GORI
名 残 III

FU JI WARA UMEKI
— 富地原梅木遺跡の発掘調査報告 —

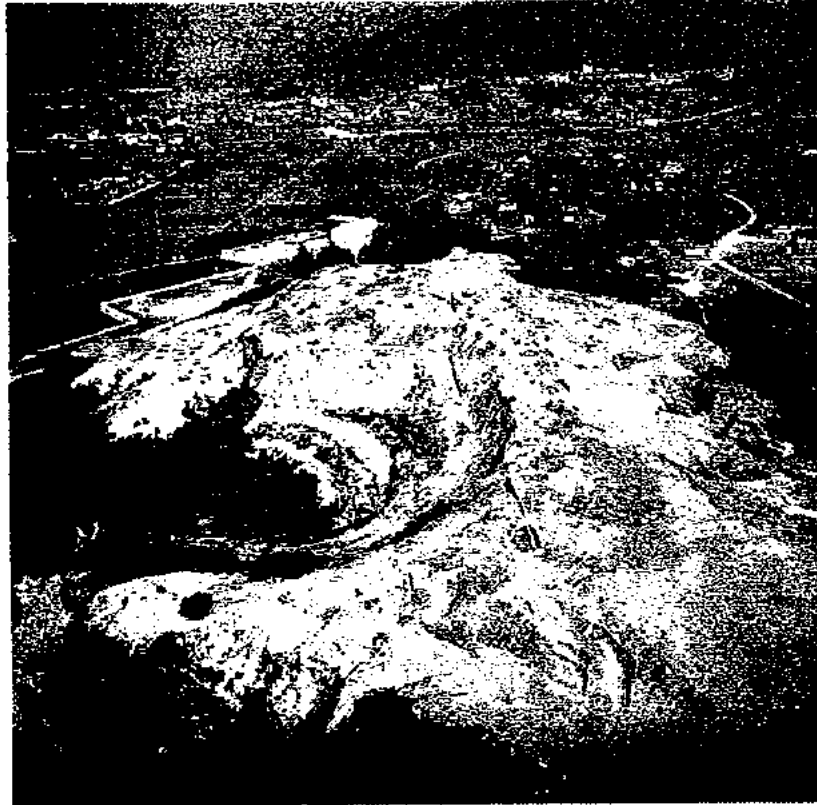
宗像市文化財調査報告書

第 25 集



1990

宗像市教育委員会



1. 富地原梅木遺跡全景（南上空より）



2. 同上（北上空より）



3. 富地原梅木遺跡15号墳周辺



4. 同上

序 文

宗像市は福岡市・北九州市の中間に位置し、両大都市の通勤圏となっており、両大都市間のベッドタウンとしての様相を日々濃くしています。

本市はこのような状況のなかで、「学術・文化都市」としての将来構想実現のために官・民一体となって活動しております。

名残遺跡群は市東南部の大型住宅開発に先行して発掘調査を実施した遺跡です。発掘調査では弥生時代から中世にかけての集落と墳墓が検出され、数多くの重要な遺物が出土しています。前方後円墳の新たな発見や弥生時代の大型土壌墓群の確認、あるいは鏡や鉄戈の出土に見られるように非常に多岐にわたっており、古代むなかたの一端を垣間見ることができます。

本書は遺跡群のうち、富地原梅木遺跡の弥生時代から中世にかけての発掘調査の中から古墳時代以降の調査成果を先行して収めています。とくに、4世紀から6世紀にかけての円墳が群集しており、主体部と出土遺物の組合せは、この時期の墓制を考えるうえで貴重な調査であったといえます。

本書が広く文化財の保護および学術研究の一資料として貢献することを念願するとともに、発掘調査全般にわたってご協力いただいた多くの方々に心から感謝の意を表する次第であります。

平成2年3月31日

宗像市教育委員会

教育長 森下 照清

例 言

1. 本書は、宅地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査を行った名残遺跡群のうち、1983年度、1984年度に実施した富地原梅木遺跡の調査報告である。
2. 発掘調査は、福岡県住宅供給公社の委託を受けて、宗像市教育委員会が実施した。
3. 梅木遺跡で調査した遺構・遺物は多量にのぼるため、本書では古墳時代以降の遺構・遺物を取り上げた。弥生時代の遺構・遺物に関しては次年度報告の予定である。
4. 遺物の復原作業は宗像市文化財整理室で大部分を行ったが、一部を九州歴史資料館において、福岡県文化課 岩瀬正信氏の指導の下に実施した。
5. 遺構の実測は、主に飛野・原・福田裕士・寺島克史が行い、遺物の実測は飛野・鬼木つや子・佐藤みゆき（九州歴史資料館）が行った。他に、福岡教育大学・福岡大学の学生諸氏の協力を得た。また、製図は清家直子・徳永映子・広橋久美・豊福弥生の手を煩わせた。
6. 使用した写真は、遺構を飛野が、遺物を九州歴史資料館技術主査 石丸洋氏が撮影した。
なお、空中写真は「稲富」に依頼した。
7. 本書の執筆は1～3章を原が行い、他の執筆と編集を飛野が行った。

本文目次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	3
3. 調査の概要	4
4. 調査の記録	5
i) 古墳	
1) はじめに	5
2) 1号墳	5
3) 2号墳	6
4) 3号墳	9
5) 4号墳	9
6) 5号墳	9
7) 6号墳	13
8) 7号墳	14
9) 8号墳	20
10) 9号墳	24
11) 10号墳	25
12) 11号墳	25
13) 12号墳	29
14) 13号墳	30
15) 14号墳	30
16) 15号墳	32
17) 16号墳	37
18) 17号墳	39
19) 18号墳	43
20) 19号墳	43
21) 20号墳	48
22) 21号墳	48
23) 22号墳	50
24) 23号墳	50
25) 24号墳	51
26) 25号墳	52
27) 26号墳	54
28) 1号壺棺墓	54
29) 2号壺棺墓	55
30) 小結	57
ii) その他の遺構	
1) 溝状遺構SD 1	60
2) 溝状遺構SD 2	60
3) 溝状遺構SD 7	60
4) 溝状遺構SD 8	60
5) 溝状遺構SD 9	60
6) 道路状遺構SF 1	61
7) 小結	62

図版目次

巻頭図版

1. 富地原梅木遺跡全景（南上空より）
2. 富地原梅木遺跡全景（北上空より）
3. 富地原梅木遺跡15号墳周辺
4. 富地原梅木遺跡15号墳周辺

図版1.	1;調査区全景（南上空より）	2;調査区全景（北上空より）
図版2.	1;調査区遠景（南より）	2;調査区遠景（西より）
図版3.	1;2号墳主体部（北より）	2;3号墳主体部（南より）
図版4.	1;5号墳主体部一次床面（南より）	2;5号墳主体部二次床面と閉塞石（北より）
図版5.	1;3～8号墳（北上空より）	2;3～8号（南上空より）
図版6.	1;6号墳全景（南より）	2;6号墳主体部閉塞状態（東より）
図版7.	1;6号墳主体部（西より）	2;6号墳主体部遺物出土状態（南より）
図版8.	1;7号墳主体部と周溝（西より）	2;7号墳主体部（南より）
図版9.	1;7号墳周溝遺物出土状態（西より）	2;7号墳周溝遺物出土状態（東より）
図版10.	1;7号墳主体部遺物出土状態（北より）	2;7号墳主体部遺物出土状態（西より）
図版11.	1;8号墳全景（南より）	2;8号墳主体部（南より）
図版12.	1;8号墳主体部閉塞状態（北より）	2;8号墳主体部玄門左側壁（東より）
図版13.	1;9号墳主体部（北より）	2;10号墳全景（東より）
図版14.	1;11号墳周辺遠景（南東より）	2;11・10号墳全景（南より）
図版15.	1;11号墳主体部（西より）	2;11号墳主体部閉塞状態（南より）
図版16.	1;11号墳周溝遺物出土状態（南より）	2;11号墳周溝遺物出土状態（西より）
図版17.	1;11号墳主体部内（南より）	2;11号墳主体部内人骨細部（南より）
図版18.	1;12号墳全景（東より）	2;13号墳主体部（東より）
図版19.	1;14～18・24号墳現況（北西より）	2;14・24号墳現況（南上空より）
図版20.	1;14号墳全景（西より）	2;14号墳全景（西より）
図版21.	1;14号墳主体部（西より）	2;14号墳主体部（西より）
図版22.	1;15号墳周辺現況（南上空より）	2;15号墳周辺（北上空より）
図版23.	1;15～18号墳周辺現況（北より）	2;15～18号墳周辺（北より）
図版24.	1;15号墳主体部検出状態（東より）	2;15号墳主体部（東より）
図版25.	1;15号墳主体部土層（西より）	2;15号墳地山上遺物出土状態（東より）
図版26.	1;16号墳主体部（北より）	2;16号墳全景（北より）
図版27.	1;17号墳遠景（東より）	2;17号墳全景（南より）
図版28.	1;17号墳主体部検出状態（南より）	2;17号墳主体部（南より）

図版29.	1;17号墳主体部掘形(南より)	2;17号墳主体部北小口遺物出土状態(南より)
図版30.	1;17号墳主体部竪構出土状態(西より)	2;17号墳主体部竪構出土状態(北より)
図版31.	1;18号墳主体部検出状態(西より)	2;18号墳主体部(北より)
図版32.	1;18号墳主体部(西より)	2;18号墳主体部石材(西より)
図版33.	1;18号墳主体部鉄剣出土状態(北より)	2;1号壺棺墓(西より)
	3;1号壺棺墓(北より)	
図版34.	1;19号墳主体部検出状態(東より)	2;19号墳主体部(東より)
図版35.	1;20号墳主体部(南より)	2;20・26号墳と貯蔵穴群(東より)
図版36.	1;21号墳主体部(東より)	2;23号墳主体部(東より)
図版37.	1;24号墳周辺(上空より)	2;24号墳主体部(西より)
図版38.	1;2号壺棺墓(南より)	2;25号墳全景(北より)
図版39.	1;25号墳主体部(北より)	2;溝SD9鉄鎌出土状態(北より)
図版40.	出土遺物1	
図版41.	出土遺物2	
図版42.	出土遺物3	
図版43.	出土遺物4	
図版44.	出土遺物5	
図版45.	出土遺物6	
図版46.	出土遺物7	

挿 図 目 次

第1図	富地原梅木遺跡周辺古墳配置図(1/3,000)	2
第2図	名残遺跡群位置図(1/50,000)	3
第3図	1号墳周辺出土遺物実測図(1/3)	5
第4図	2号墳主体部実測図(1/40)	6
第5図	2号墳出土遺物実測図(1/3)	6
第6図	3~7号墳地形測量図(1/400)	7
第7図	3号墳主体部実測図(1/40)	8
第8図	4号墳出土遺物実測図(1/3)	9
第9図	5号墳主体部実測図:一次床面(1/40)	10
第10図	5号墳主体部二次床面と閉塞状態(1/40)	11
第11図	5号墳出土遺物実測図1(1/2)	11
第12図	5号墳出土遺物実測図2(1/3)	11
第13図	6号墳主体部実測図(1/40)	12
第14図	6号墳出土遺物実測図1(1/2)	13

第15图	6号墳出土遺物実測図2 (1/3)	13
第16图	7号墳出土遺物実測図1 (1/3)	14
第17图	7号墳主体部実測図 (1/40)	15
第18图	7号墳周溝内遺物出土状態実測図 (1/20)	16
第19图	7号墳出土遺物実測図2 (1/3)	17
第20图	7号墳出土遺物実測図3 (1/3)	18
第21图	7号墳出土遺物実測図4 (1/3)	19
第22图	7号墳出土遺物実測図5 (1/3)	20
第23图	8-13・21・25号墳地形測量図 (1/400)	21
第24图	8号墳主体部実測図 (1/40)	22
第25图	8号墳出土遺物実測図 (1/3)	23
第26图	9号墳主体部実測図 (1/40)	24
第27图	9号墳周辺出土遺物実測図 (1/3)	24
第28图	10号墳主体部実測図 (1/40)	25
第29图	11号墳出土遺物実測図1 (1/3)	26
第30图	11号墳出土遺物実測図2 (1/6)	26
第31图	11号墳主体部実測図 (1/40)	折込
第32图	12号墳出土遺物実測図 (1/3)	29
第33图	12号墳主体部実測図 (1/40)	29
第34图	13号墳主体部実測図 (1/40)	30
第35图	14号墳主体部実測図 (1/40)	31
第36图	14号墳地形測量図 (1/400)	32
第37图	15-18・22・24号墳地形測量図 (1/400)	折込
第38图	15号墳主体部実測図 (1/40)	35
第39图	15号墳出土遺物実測図1 (1/3)	36
第40图	15号墳地山上遺物出土状態実測図 (1/30)	36
第41图	15号墳出土遺物実測図2 (1/3)	37
第42图	16号墳主体部実測図 (1/40)	38
第43图	16号墳出土遺物実測図 (1/3)	39
第44图	17号墳遺物出土状態実測図 (1/20)	39
第45图	17号墳主体部実測図 (1/40)	40
第46图	17号墳出土遺物実測図 (1/3)	42
第47图	18号墳出土遺物実測図 (1/3)	43
第48图	18号墳主体部実測図 (1/40)	44
第49图	19・20・26号墳地形測量図 (1/400)	45

第50图	19号墳主体部実測図 (1/40)	46
第51图	20号墳主体部実測図 (1/40)	47
第52图	20号墳出土遺物実測図 (1/3)	48
第53图	21号墳出土遺物実測図 (1/3・1/6)	48
第54图	21号墳主体部実測図 (1/40)	49
第55图	22号墳出土遺物実測図 (1/3)	50
第56图	23号墳主体部実測図 (1/40)	50
第57图	24号墳主体部実測図 (1/40)	51
第58图	24号墳出土遺物実測図 (1/3)	52
第59图	25号墳出土遺物実測図 (1/3)	52
第60图	25号墳主体部実測図 (1/40)	53
第61图	26号墳出土遺物実測図 (1/3)	54
第62图	1号壺棺墓検出状況実測図 (1/20)	54
第63图	1号壺棺実測図 (1/6)	55
第64图	2号壺棺墓検出状況実測図 (1/20)	56
第65图	2号壺棺実測図 (1/6)	56
第66图	溝状遺構 S D 9 出土遺物実測図 (1/3)	61
第67图	道路状遺構 S F 1 出土遺物実測図 (1/3)	62
第68图	富地原梅木遺跡古墳配置図 (1/900)	折込
第69图	2・5～8号墳土層図 (1/80)	65
第70图	9～11・14号墳土層図 (1/80)	66
第71图	15～18・20・21号墳土層図 (1/80)	折込
第72图	19・23～26号墳・S D 1・S F 1土層図 (1/80)	69
第73图	富地原梅木遺跡主要古墳主体部一覧 (1/80)	70
第74图	名残遺跡群事業計画図 (1/3,000)	折込

表 目 次

第1表	富地原梅木遺跡調査古墳一覧	vi
-----	---------------	----

古墳番号	墳形	規模 (m)	主体部		副葬品	備考
			形式	規模(幅×長:m)		
1号墳	円形	14	—	—	(土師器)	周溝のみ残存
2号墳	円形	9	(壜穴系横口式石室)	0.6×1.8(+e)	鉄釵・刀子・須恵器	主体部半壊
3号墳	—	—	横穴式石室	1.2~1.4×2.5	—	腰石の一部のみ残存 中世に再利用
4号墳	円形	—	—	—	土師器	周溝のみ残存
5号墳	円形	8	横穴式石室	1.2×2.3	玉類・須恵器・土師器	2段の敷石
6号墳	円形	4~6	(壜穴系横口式石室)	0.9~1.05×2.15	玉類・中世遺物	中世に再利用
7号墳	円形	6~8	横穴式石室	1.45×2.55	須恵器・土師器・中世遺物	中世に再利用
8号墳	円形	4~6	壜穴系横口式石室	0.6~0.7×1.8	須恵器・土師器	
9号墳	円形	3~5	(壜穴系横口式石室)	0.6×1.5	(土師器)	
10号墳	円形	3	(壜穴系横口式石室)	—	—	全壊に近い
11号墳	円形	4	壜穴系横口式石室	0.61~1.16×2.0	刀子・須恵器	未盗掘・石室完存
12号墳	円形	6	(壜穴系横口式石室)	0.9×1.9	須恵器	全壊に近い
13号墳	—	—	(壜穴系横口式石室)	(1×1.1)	—	全壊に近い
14号墳	円形	8.5	箱式石棺	0.5×2.2	—	玉石敷きか
15号墳	円形	16	粘土槨	0.6×4.4(+e)	鉄剣(土師器)	未盗掘だが近世墓に 破壊される
16号墳	円形	6	箱式石棺	0.2~0.3×1.7	壜 器	未盗掘
17号墳	円形	6.5	組合式箱形木棺	0.35×2.7	壜器・鉄製農具	未盗掘・壊床
18号墳	円形	8	特異な箱式石棺	0.4×2.0	鉄 剣	小口に木板を使用 未盗掘・周溝内に壜棺
19号墳	—	(10)	粘土槨	0.6×3.3	—	
20号墳	円形	10	横穴式石室	1.3~1.5×2.6	須恵器	
21号墳	円形	5	(壜穴系横口式石室)	—	須恵器	全 壊
22号墳	円形	—	—	—	鉄 剣	周溝のみ残存
23号墳	円形	10~11	壜穴式石室	0.4~0.5×2.0	—	
24号墳	長方形	10×12	簡竹形木棺直葬	1.0×2.6	土師器	古瀬路の最南端旧社殿 下。周溝外に壜棺
25号墳	円形	6	木棺直葬	0.6×2.4	土師器	—
26号墳	円形	10	—	—	土師器	周溝のみ残存

※1 主体部中心一箇所に副葬品を新り添した位置
 ※2 石室の場合は支室、他の場合は内法
 ※3 ()内は周辺出土

第1表 富地原梅木遺跡調査古墳一覧

第1章 はじめに

1978年5月31日付けで、福岡県住宅供給公社（以下「公社」という）から文化財保護法第57条の3項の規定による、宗像市（当時宗像郡宗像町）大字富地原・徳重・名残地区の宅地造成に伴う埋蔵文化財についての発掘についての通知があった。

現地踏査の結果、前方後円墳1基、円墳21基が確認された。

宗像市教育委員会を含めた3者協議の中で、前方後円墳を含む6基の古墳は現状保存して、公園として活用すること、他の古墳については発掘調査を実施して記録保存につとめることで合意した。

公社側の諸手続きをまわって1982年に発掘調査に入ることにしていたが、実質的には1983年4月18日に調査に着手し、工事の進捗に合わせて断続的に事業消化を行ない、現在に至っており、残事業を残すのみとなった。

本書は遺跡群の内、1983年12月1日に着手し、同年12月29日までに1次調査を行い、1984年4月2日に2次調査に入り、同年12月19日に現地調査を終了した富地原梅木遺跡の成果である。

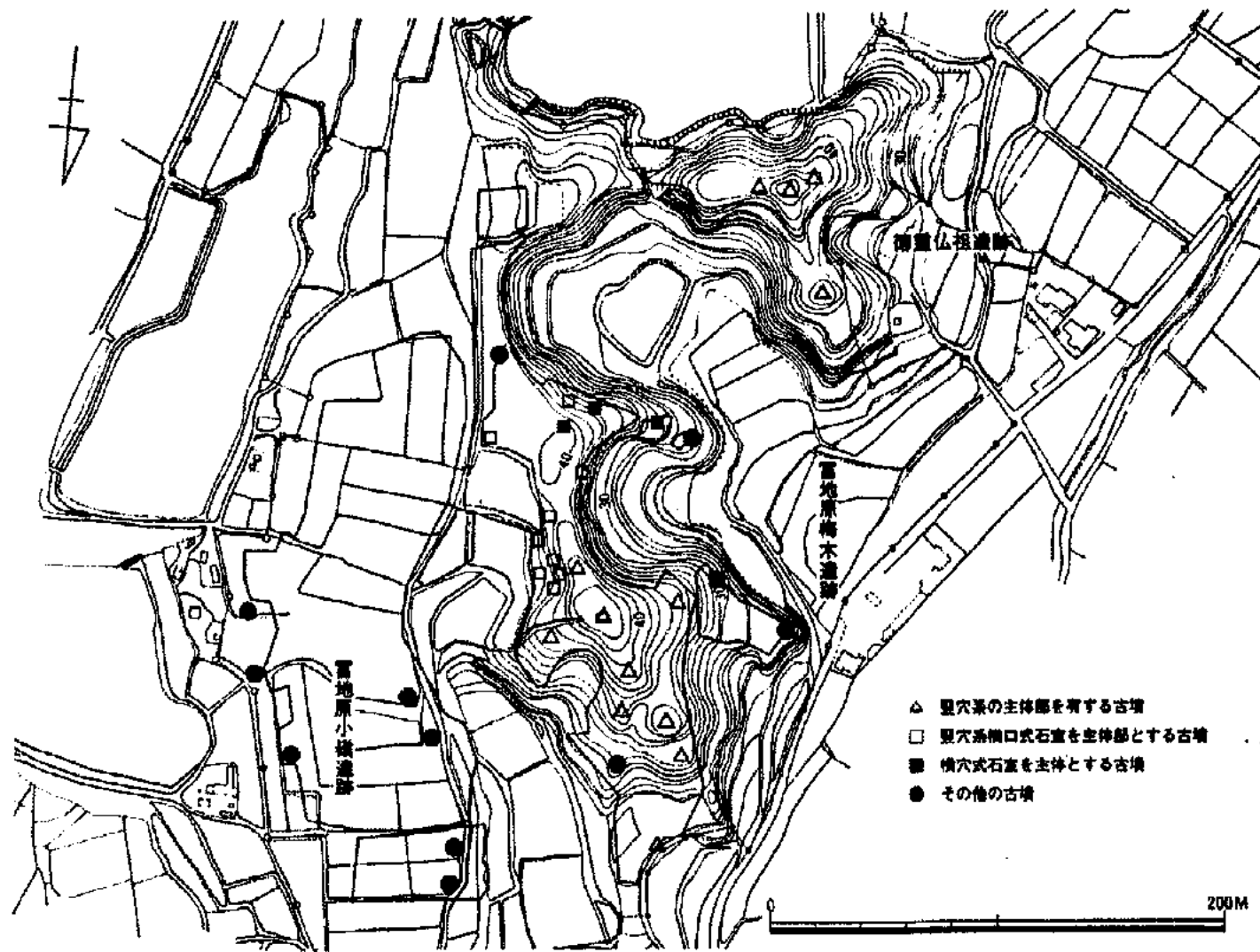
事業は次のとおりの組織で実施した。

総 括	宗像市教育委員会	教 育 長	森下 照清
		教 育 部 長	山田 政信
		社会教育課長	吉田 繁利
		文 化 係 長	尾山 清
庶務・会計		主 事	大賀 由美子（前任） 篠原 絹代（現任）
発掘調査		主 事	原 俊一
		嘱 託	飛野 博文（現福岡県教育委員会）
調査指導	九州大学	助 手	田中 良之（現九州大学助教授）

発掘調査において、多くの方々の御指導・助言・応援をいただいた。また、公社には測量等において便宜を図っていただいた。

とくに、地元の方々や学生諸氏には炎天下で、あるいは雪の降りしきる中での調査に参加いただいた。皆様には心から御礼申し上げます。

なお、報告書作成中の1988年1月11日、調査主任の酒井仁夫氏が急逝し、一同大変な衝撃を受けた。まだ、42歳の若さであり、当市の文化財行政にとっては、なくてはならない大黒柱であり、その損失は多大なものとなった。ここに深く哀悼の意を表します。



第1図 富地原梅木遺跡周辺古墳配図 (1/3000)

第2章 位置と環境

名残遺跡群は宗像市の東南部、鞍手郡宮田町との境にある赤木峠あたりの山塊から北へ派生する丘陵上に位置する。遺跡群は南北に長く延びる丘陵の南北約1km、東西約400mの範囲にあり、標高は30～60mである。遺跡群は南北に延びる丘陵上とこの丘陵から西側へ向けて派生する小支丘上、および低位丘陵平坦面に広がっており、遺跡の密度は非常に濃いと見える。

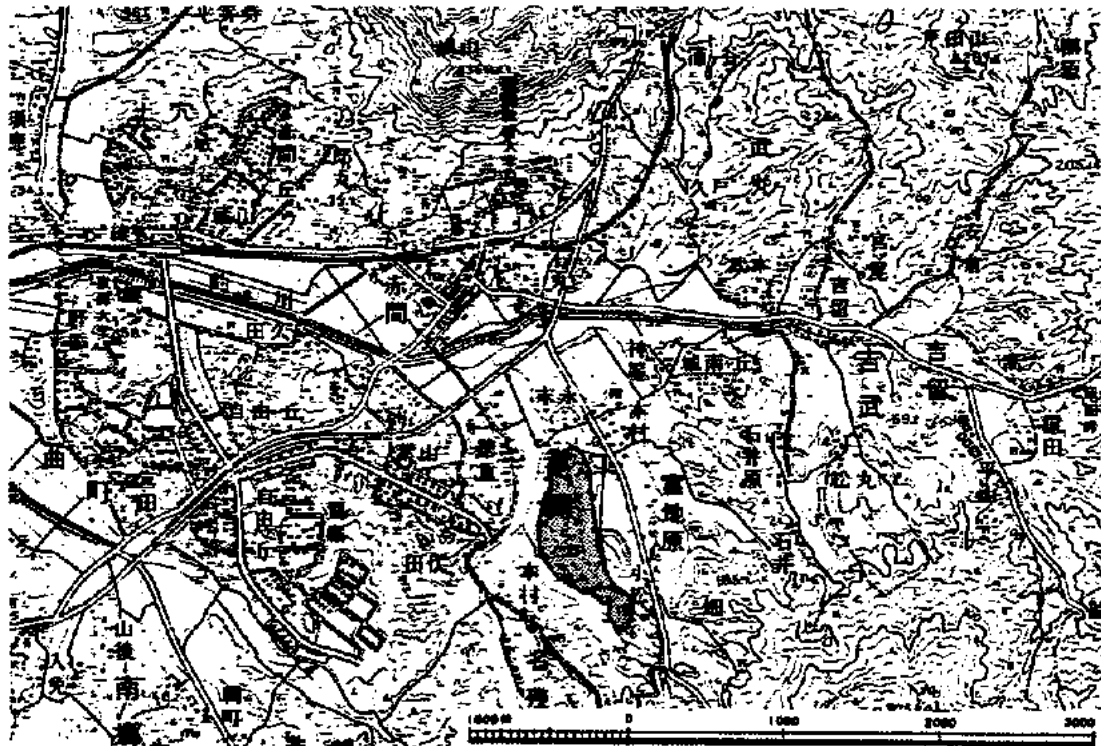
調査対象地は宗像市大字名残、徳重、富地原にまたがっている。大字名残には小字として長浦・藤河内・高田、大字徳重には高田・仏祖、大字富地原には小嶺・梅木・大原・原口の地名がある。

富地原は古くは藤原と書いた。藤原千歳丸という人がこの地に来て、春日社を勧請し、その姓名を地名にしたという(註1)。

江戸時代には福岡藩の所領で、徳重触に属している。村内の社寺は太郎坊社・春日社・紙圍社・浄蓮寺がある。

註

註1 青柳種信編『筑前国続風土記拾遺』



第2図 名残遺跡群位置図(1/50,000)

第3章 調査の概要

本書は1983年に始まった名残遺跡群の調査のうち、1983年・1984年に発掘調査した富地原梅木遺跡の調査成果を収録している。名残遺跡全体を1つの遺跡として考えてもよいが、ここでは自然地形や遺構のまとまりを1単位として遺跡名を与えた。

例えば、名残藤河内遺跡は大字名残字藤河内に分布をもつ遺構群をもって遺跡名としており、名残遺跡の名残藤河内地区としても可能であるが、現状では遺構のまとまりをもって単位とし、遺跡名を大字・小字名をもって遺跡名とした。

調査の概略は次のとおりである。

- 1次調査 1983年12月1日から12月29日まで調査した。古墳時代の住居跡と土坑を検出した。
- 2次調査 1984年4月2日から12月19日まで調査した。1次調査の北側に連続する丘陵の調査を行った。検出遺構は弥生時代の土壌墓・貯蔵穴・古墳時代の円墳・住居跡が主体である。

概 要

本遺跡は弥生時代から中世にいたる長期に営まれた複合遺跡である。以下に概要を記す。

弥生時代

前期～中期前半に属する貯蔵穴が18号墳以北・20号墳周辺に分布し、後者に集中する。同時期の住居跡も近接して若干検出されている。また、成人用甕棺が1基存在する。

中期後半を中心とする時期の土壌墓100基余は8号墳以北の尾根上に分布し、17号墳下層まで、140mの長さに及ぶ。出土遺物には鉄製品（戈・鎌）や墓域内に据えられた供献土器などがある。

後期～古墳時代前期と思われる住居跡は、17号墳以北と1号墳周辺にある。

古墳時代

調査区全体にまんべんなく分布するが、時期によって選地を違えている。本編に譲る。

中 世

道路状遺構と古墳を墓所に再利用したものがある。これも本編参照。

近 世

15号墳上に数十基の近世墓が存在したが、発掘調査を行っていない。甕棺と桶棺とがある。

第4章 調査の記録

i) 古墳

1) はじめに

調査は南側から順次北へ向かって実施した。したがって古墳等の遺構番号もおおむねその順に付しており、本報告も当初の番号を踏襲している。ただ、調査時に土墳墓として登録していた遺構を古墳に改めたものがあり、それには通し番号を続けた。

調査した古墳の総数は26基におよび、中、主体部がすでに破壊されて周溝のみを検出したものが4基あった。また、古墳の一部であるかも知れない溝も数条検出しているが確信が持てないために溝状遺構として区別している。

2) 1号墳 (図版1、第68図)

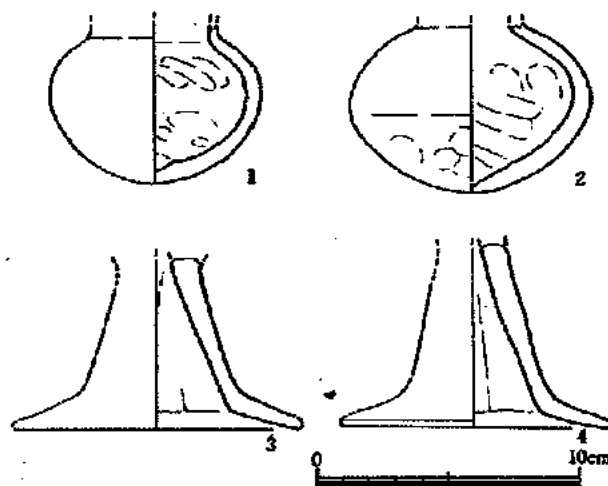
調査区の南端近く、西側が大きく落ちこむ崖の縁に位置する。わずかに残る周溝からそれと判断できるのみで、主体部・盛土はすでに失われていた。

周溝は幅1m、深さ0.3mほどの規模で墳丘の北側を弧状に巡っている。墳丘盛土径は約14mに復原できる。

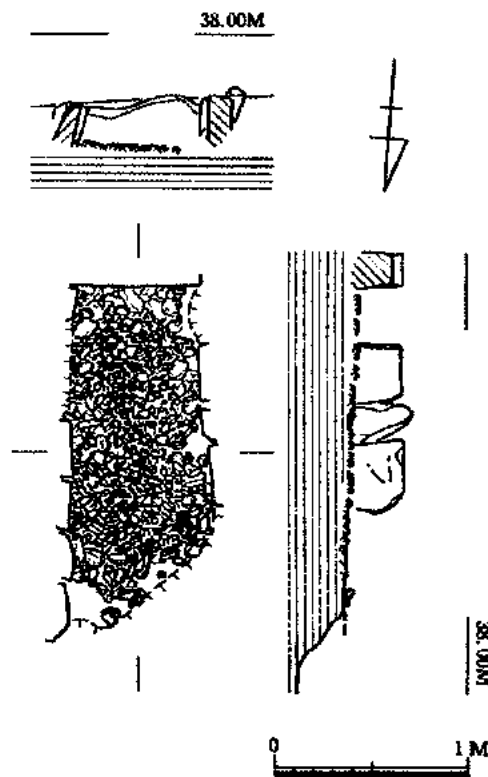
出土遺物 (図版40、第3図)

周辺の表土層より出土したもので必ずしも1号墳に伴う遺物とは言い切れない。1・2は土師器の小型丸底壺。体部が球形で、頸部が強くくびれる。1は図示部分のほぼ1/2が、2はほぼ3/4が残存

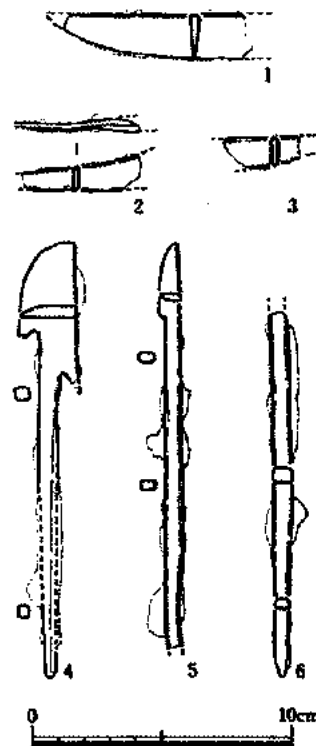
する。3・4は同形同大の土師器の高杯である。脚部内面にシャープな稜を有する。これも約1/2が遺存する。



第3図 1号墳周辺出土土器実測図 (1/3)



第4図 2号墳主体部実測図 (1/40)



第5図 2号墳出土遺物実測図 (1/3)

3) 2号墳 (第69図)

調査区北端中央部に深く入りこむ幅約40m、長さ240mの谷の最深部に所在する。東側を農道でカット、北側も開墾のために削平されており、墳丘の約1/4、石室の大半を破壊されている。また、盛土はまったく遺存していない。残存する周溝は幅2.1m、深さ0.3mの規模で、石室中心部分より反転復原すると内径は約9mほどとなる。

主体部 (図版3、第4図)

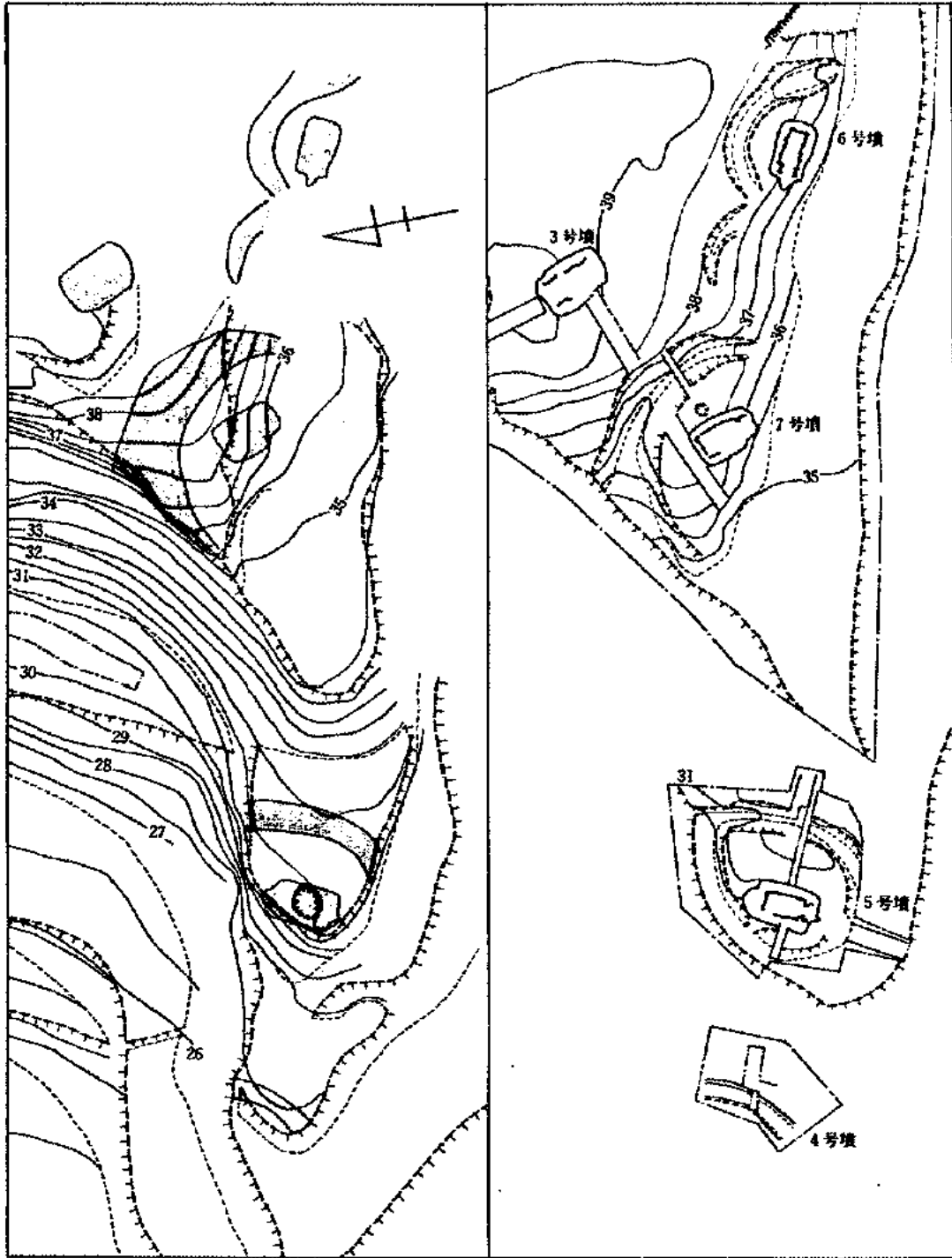
上述したように前面を破壊され、腰石の一部と敷石を残すのみである。

現状の平面プランは0.6×1.8mの長方形を呈する。南小口壁は一枚石、側壁腰石は南小口壁と高さを揃えてそれぞれ偏平石材を立て据えている。以上の石材は1点の礫岩を除いてすべて砂岩で構成されている。敷石は大部分が径数cmの小礫からなり、乱雑に敷き詰めている。

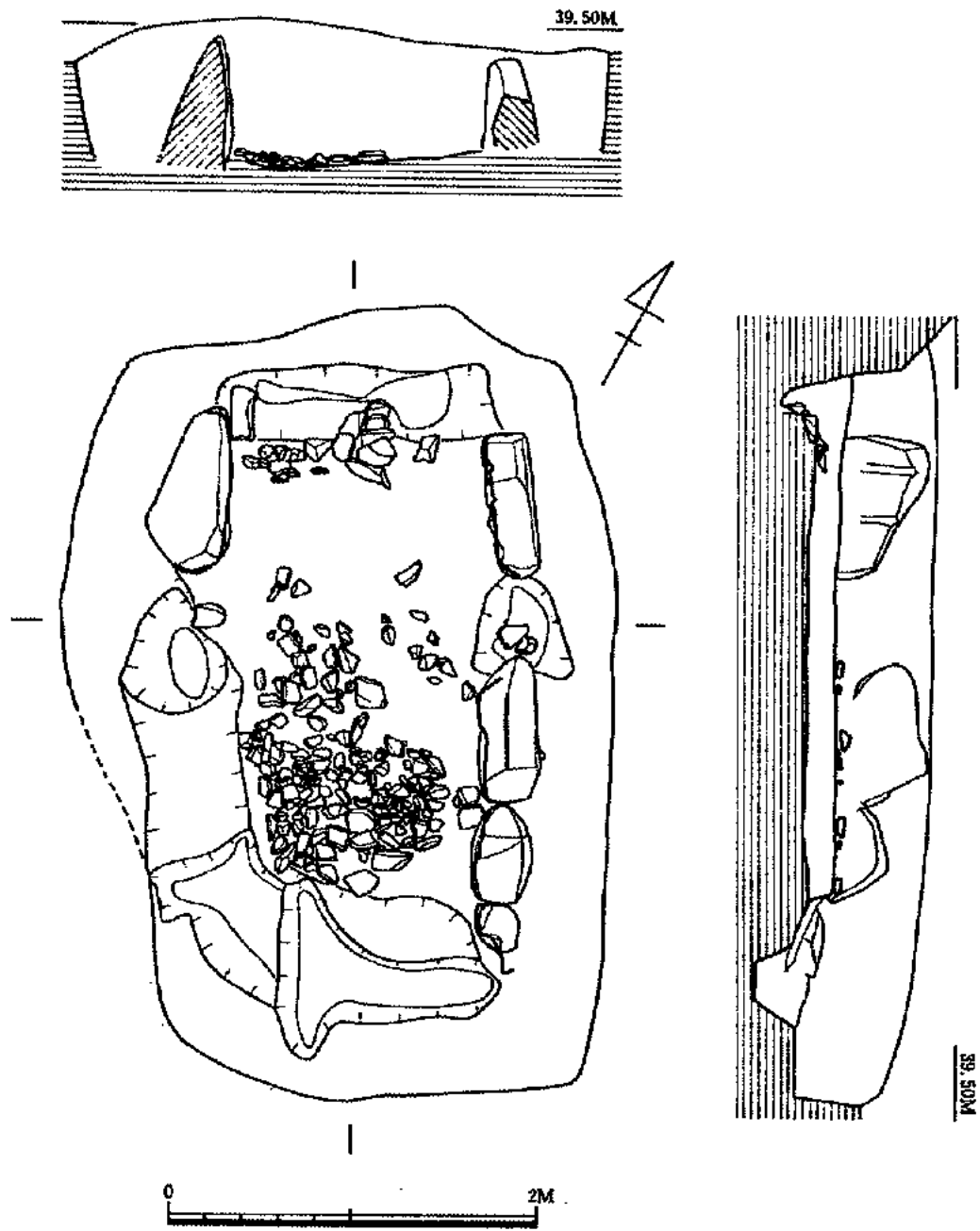
出土遺物 (図版40、第5図)

石室敷石上から若干の鉄器を、周溝から土器小片を出土している。土器にはシャープな叩き痕を残す須恵器の甕や中世の土器があるが小片のために省略する。

刀子 (1) 刃部の一部のみが残る。



第6圖 3-7号墳地形測量図 (1/400)



第7图 3号墳主体部実測図(1/40)

不明鉄器(2・3) 2は厚さ2mmの板状製品で、固右側が幅広となり全体に振れている。3は同3mmの製品で、形は2に似る。この両者に刃部は認められないが、あるいは鑿頭式鉄器の一部であるかも知れない。

鉄鏃(4~6) 4は左右非対称に返りを有する異形の形状を呈する。鏃身は片丸造りで、全体が残る。5は片刃箭形式で基の一部を欠く。これも片丸造り。

4) 3号墳(第6図)

4・5号墳の載る小支丘の付け根となる主尾根上に位置する。盛土・周溝等はまったく遺存せず、全墳に近い石室がかろうじて残っていた。

主体部(図版3、第7図)

4個の腰石と一部の敷石を残すのみである。石材採取穴等から推定される石室プランは幅1.2~1.4m、長さ2.5m前後の単室の横穴式石室である。墓道の方向は腰石の大小・玄室幅の広狭から南東側に求められる。

出土遺物

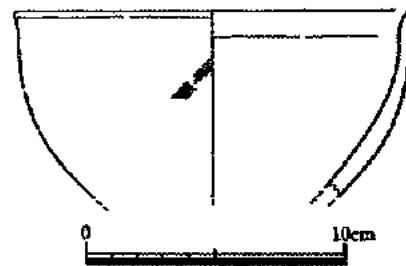
敷石上から中世と思われる土師器皿を出土しているが、細片化しており図示できない。後述する6・7号墳のような石室の再利用を示しているのであろう。

5) 4号墳(巻頭図版1、第6図)

3号墳から西へ延びる支丘の先端近くにある。開墾が著しく、幅1.2m、深さ0.7mの弧状溝を検出したのみで、主体部を想定する場所はすでに大きく削られていた。

出土遺物(第8図)

周溝より出土した土師器碗の小片である。口縁部が小さく外反し、体部は深い。器表が荒れており調整手法は定かでない。

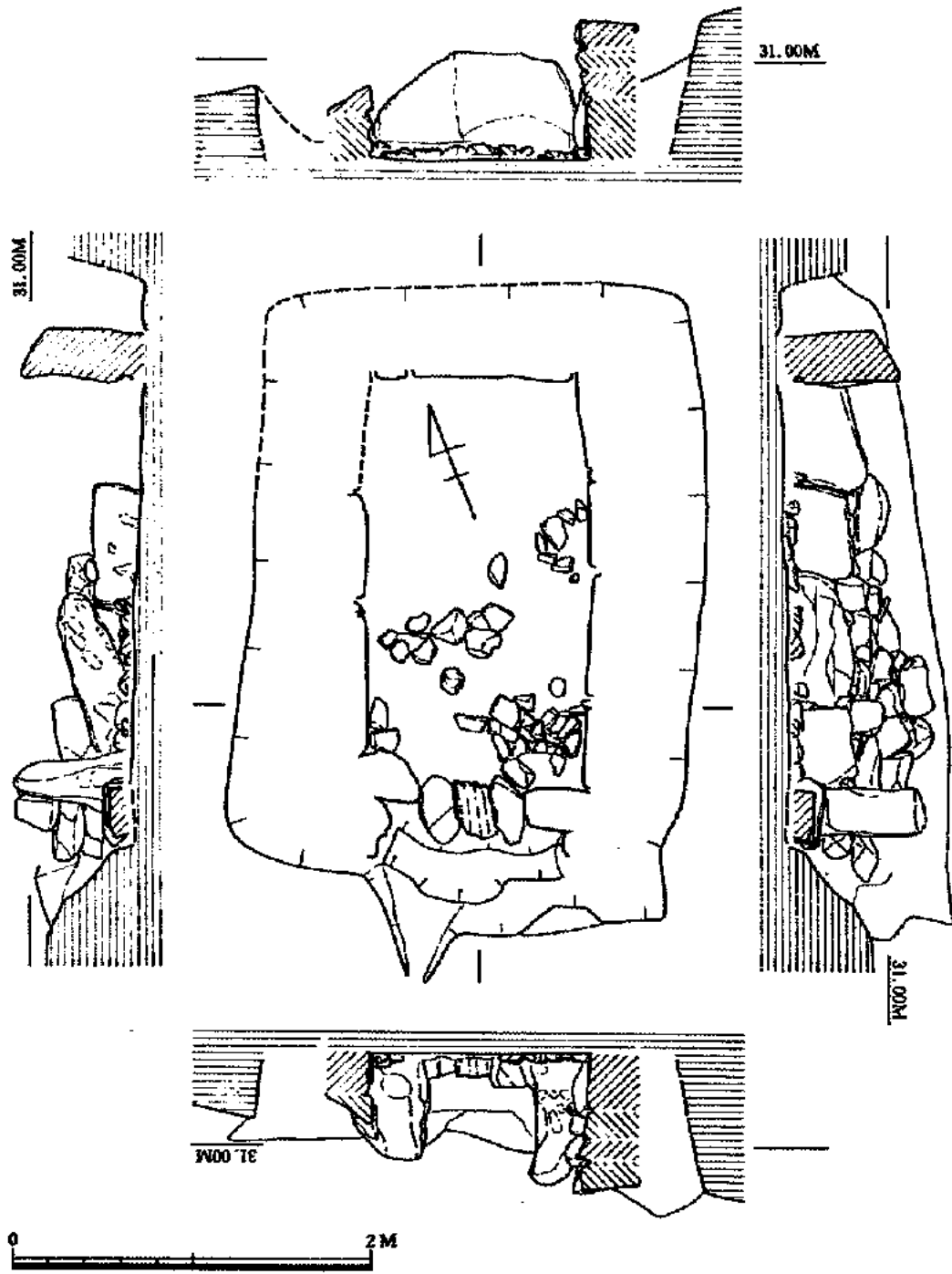


第8図 4号墳出土遺物実測図(1/3)

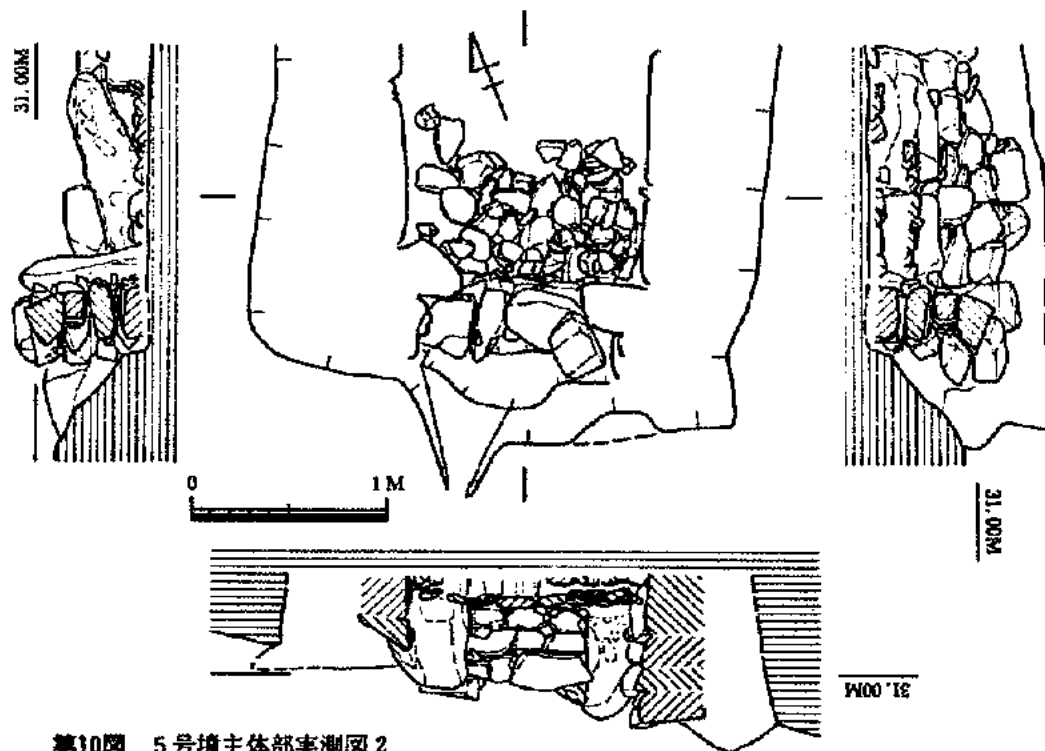
6) 5号墳(図版5、第5・69図)

4号墳のすぐ東方、一段高い位置にある。現状では開墾が進んでおり墳丘は認められないものの、長径2m前後の陥没坑に石材が見えたことから精査、検出した。盛土は残っていないが、主体部中心から4mの地点で幅1.7m、深さ0.7mの周溝を検出している。

主体部(図版4、第9・10図)



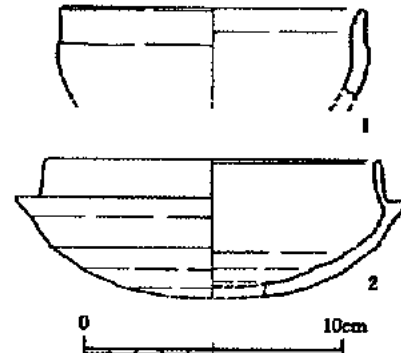
第9图 5号墳主体部実測図1 (第一次床面) (1/40)



第10図 5号墳主体部実測図2
(第二次床面と閉塞) (1/40)



第11図 5号墳出土遺物実測図1 (1/2)



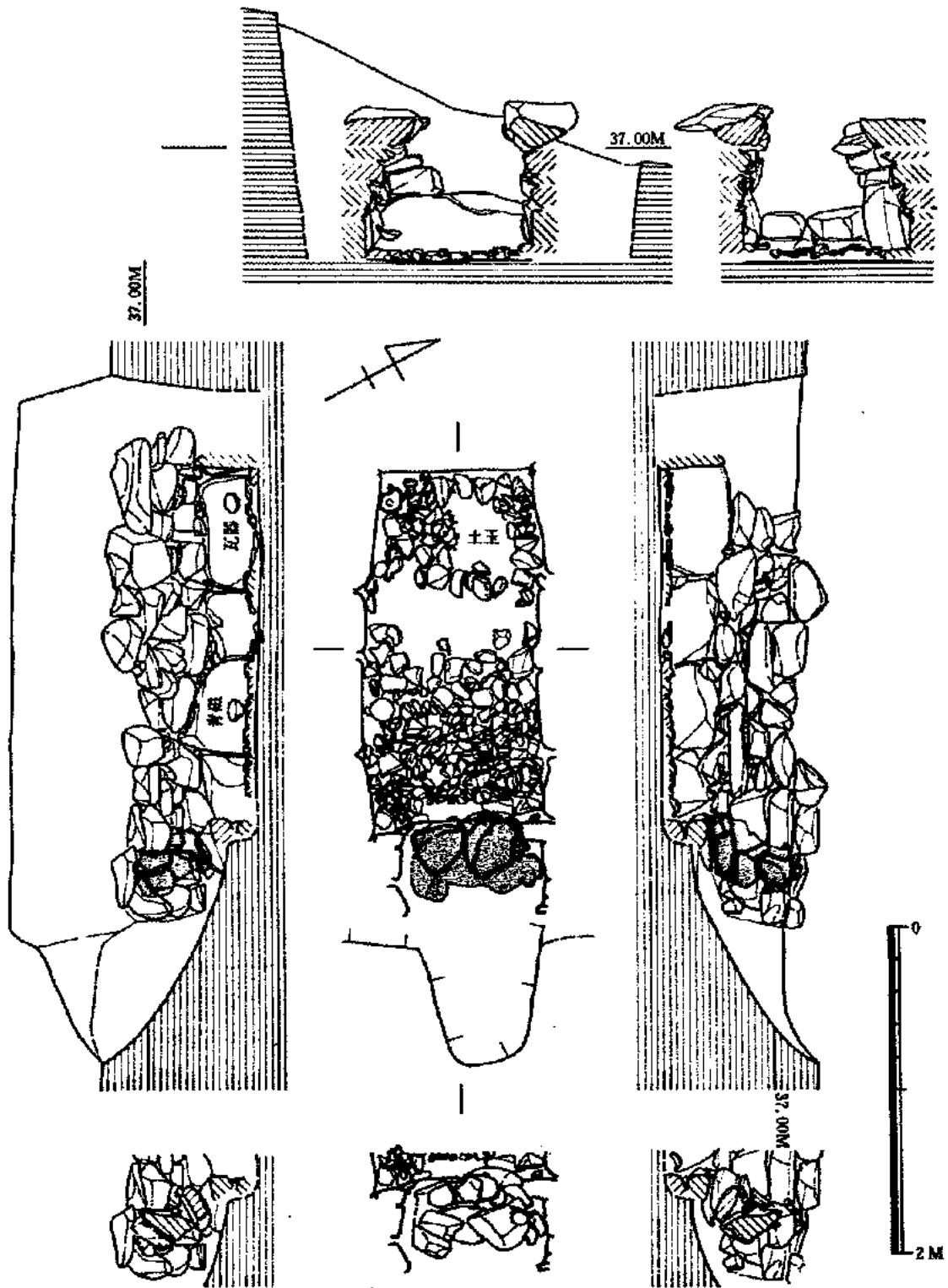
第12図 5号墳出土遺物実測図2 (1/3)

2.3×1.2mの長方形プランの単室横穴式石室を主体部とし、他例に漏れず破壊を被るが、右側壁と丁寧に積み上げられた閉塞石は比較的よく残る。墓道が短く急傾斜する点や、玄門前の貼石が1列と小規模なことなどは古相を呈するといえる。敷石の遺存状態は必ずしもよくないが、10cm弱の間層を挟んで二段の敷石を確認できた。本遺跡で唯一の例である。

出土遺物 (図版40、第11・12図)

主体部内下段敷石上で玉類を、周溝より土器を出土している。

玉類 1は灰味おびる濃青色のガラス勾玉。2・3は碧玉製の管玉で、これも灰味をおび、



第13图 6号墳主体部実測図 (1/40)

石質も風化が進捗している。

土器 1は土師器碗の小片で、頸部のくびれが小さい。2は約1/2が遺存する須恵器の杯身である。口縁部の立ち上がりはまだ垂直に近く、内傾する端面を有し、体部は丸みを持つ。外面底部の施削りはやや粗雑で、内面底部には同心円文の当て具痕らしきが見られる。MT15型式(註1)に比定できよう。

7) 6号墳 (図版5、第6・69回)

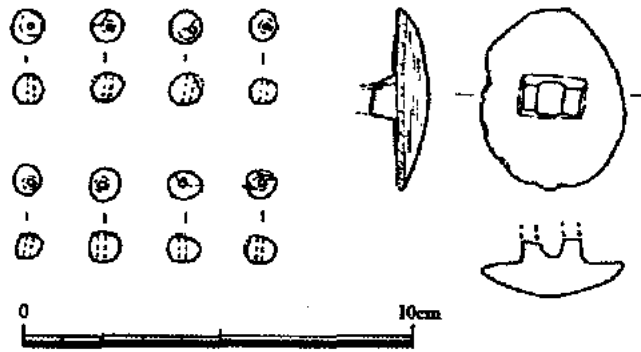
南へ向かって急落する傾斜面の上位にあり、墳丘盛土はまったく遺存していない。

主体部の上位斜面、左側壁と奥壁の背面に幅1.5m、深さ0.7mの弧状を呈する周溝が巡っている。その主体部中心からの距離は2~3mと一定せず、楕円形に近くなる。

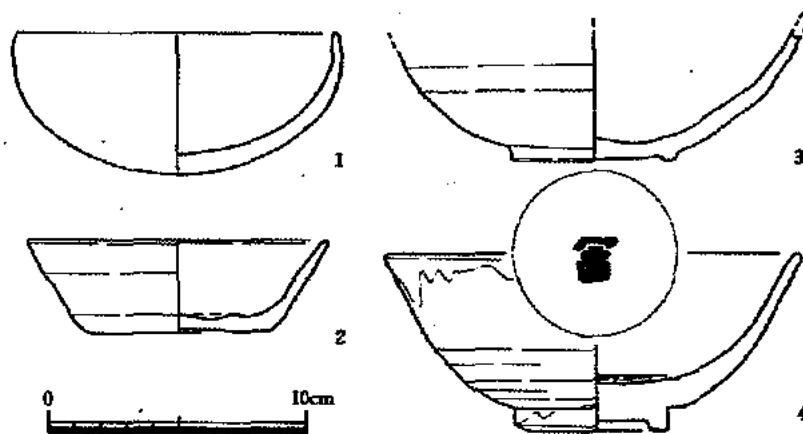
主体部 (図版6・7、第13回)

等高線に並行に構築された単室の石室で、竪穴系横口式石室を想定できる。奥壁右側から盗掘を受けているが石室の遺存状況はかなり良好といえる。

掘形は3.4×2.1mの長方形プランで深さは最高で1.5mに及び、入口部分は舌状に小さく突出する。主体部は内法で0.9~1.05×2.15mを測る



第14図 6号墳出土遺物実測図1 (1/2)



第15図 6号墳出土遺物実測図2 (1/3)

長方形プランの小型の石室である。奥壁及び両側壁の腰石は比較的大型の石材を立て据え、以上の壁体には厚みのある石材を横積みになっている。この壁体の構築状況は8・11号墳のそれと比較すると後出的な様相といえる。袖石は未発達で小石材を立てている。玄門前面の貼石も小規模で、墓道も短い急斜面となる。

左側壁直下にはほぼ完形の瓦器碗・青磁碗が置かれてあり中世に再利用されたことを示す。

出土遺物（図版40・41、第14・15図）

主体部内左奥寄りの敷石上より土玉を出土したが、滑石製品は出土地点を把握できていない。

土玉（1～8） いずれも灰黒色を呈するほぼ同形同大の土製品。

滑石製品（9） 灰白色を呈する上質な滑石を用いている。本体部分は卵形の上面観を呈し、側面観は半球形に近い。平坦部につまみ状の突起が付くが欠損する。

土器 1は土師器碗で、周溝底近くで出土した。約1/2が残るが器表の風化が著しい。2～4はいずれも石室内より出土した。2は土師器皿で約2/3が残る。調整痕は不明。3は口縁部を欠くものの、図示部分はすべて残存する。これも調整痕は不明。4は完存する龍泉窯系青磁碗。見込みに「罽」字のスタンプを付すほかは無文である。淡青灰色釉を被り、体部の下半の篋削り痕が著しい。

8) 7号墳（図版5、第6・69図）

6号墳の西隣りに位置し、これも表土掘削後に判明したものである。4・5号墳の載る支丘を切断するように周溝が掘削されており、もっとも広い部分で幅4m弱、深さ1m強の規模となる。主体部中心からの距離は3～4mで盛土の範囲を示すと考えてよからう。

主体部右側壁背面周溝底に祭祀土器群が整然と置かれていた。

主体部（図版8、第17図）

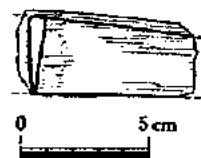
地形に添うように西側、左側壁の破壊が著しく、右側壁及び奥壁はほぼ3段目まで遺存する。2.5×3.9mを測る長方形プランの掘型を有し、中に2.55×1.45mの規模の単室の横穴式石室を置く。使用される石材は他の古墳に比して大振りであるが、墓道及び玄門前面の貼石などは未発達である。砂岩で構成された壁体の多くは火熱を受けて表面が剥落し、特に奥壁で著しい。

敷石の半分は除去されるが、ほぼ床面から龍泉窯系青磁碗4点・白磁口禿げ皿1点・瓦質及び須恵質の摺鉢各1点・土師器皿などが整然と出土し、中世に墓所として再利用されたことを示している。

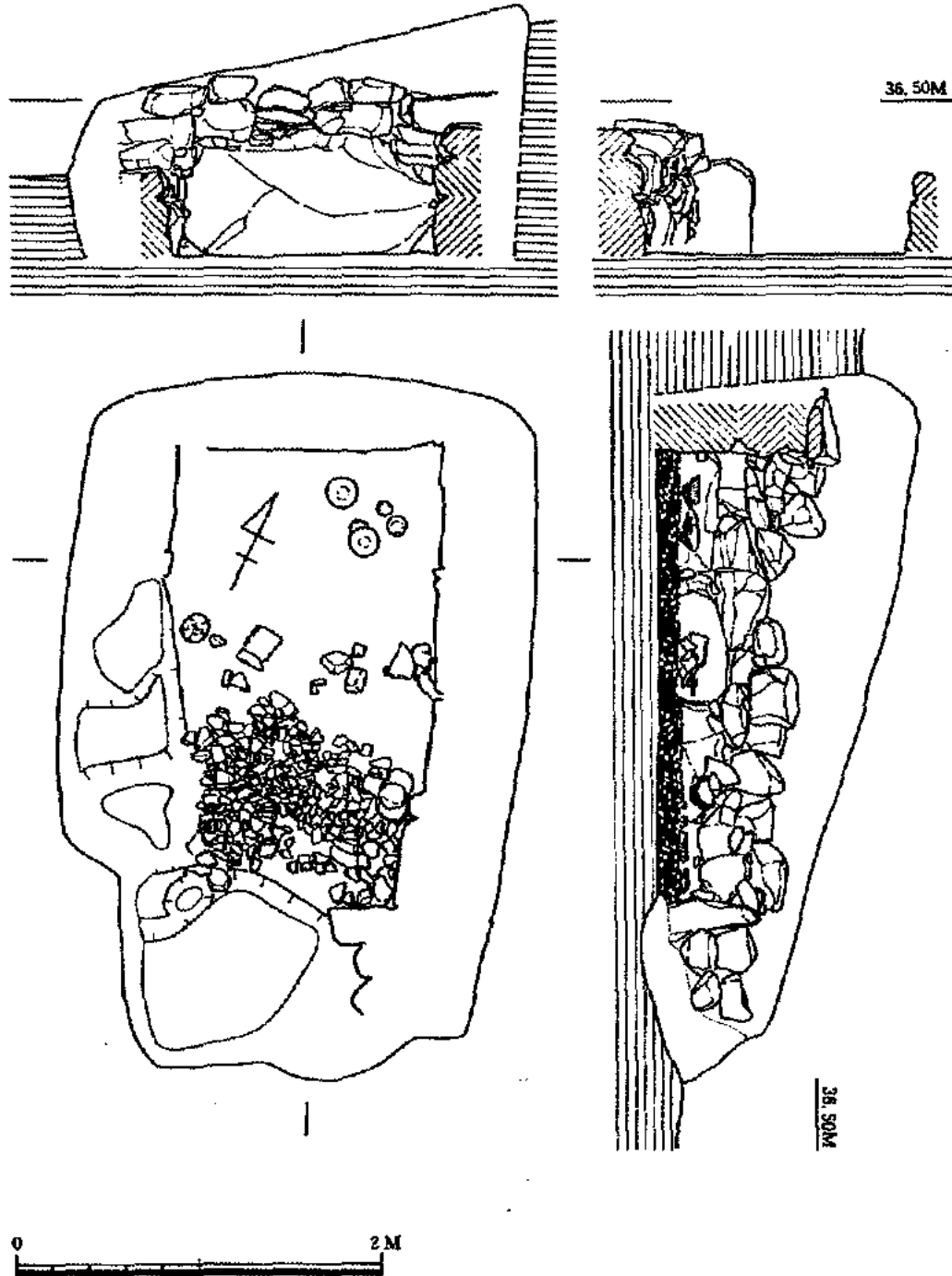
出土遺物（図版9・10・41～44、第16・18～22図）

上記したように多くの土器が出土し、他に石室より鉄器の残片が1点検出された。

大刀 長さ7cmで、全面に鞘の木質が付着する。



第16図 7号墳出土
遺物実測図1 (1/3)



第17图 7号墳主体部実測図 (1/40)

古墳時代の土器

周溝底より出土した。その状態は次のようである。須恵器蓋杯6セットを2×3列に並べ、その上に土師器腕を6点伏せて置きさらに周囲に土師器高杯を5点配置する。高杯の配置が若干乱れるほかは実に整然としている。横で出土した甕は第20図—25に示したものである。

須恵器

蓋杯(1-12) 図で上下に配置したものは出土時のセットを示す。蓋は口縁部・天井部界に沈線を刻んで区別し、口縁端部に面を有する点で共通する。身は受け部から口縁部への移行が滑らかで境界が不明瞭なものが大部分である。口縁端部は丸くおさめる。TK10型式に属するものとしてよからう。

甕(24-25) 24は周溝埋土中より出土し、ほぼ完存する。口縁部直下に小さな断面三角突帯を付すほかは無文である。25は約1/2が残る。これも文様としては口縁部直下の甘い突帯のみである。体部外面の平行叩き痕も粗い。

土師器

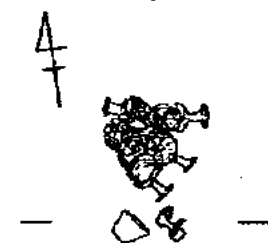
碗(13-18) いずれも細片化していたために一部で復原できなかった箇所がある。ほぼ同形同大で、口縁部は内彎しつつそのまま終わる。調整は底部外面を不定方向の削削りで仕上げるほかは丁寧な磨きを施す。内外面の一部に光沢のある黒色付着物が観察でき、漆を塗布していたのかも知れない。

高杯(19-23) 杯部口縁が屈曲外反するものと、碗状に滑らかに移行するものがある。脚端部はいずれも反り返り、柱状部の半分が中実となる。

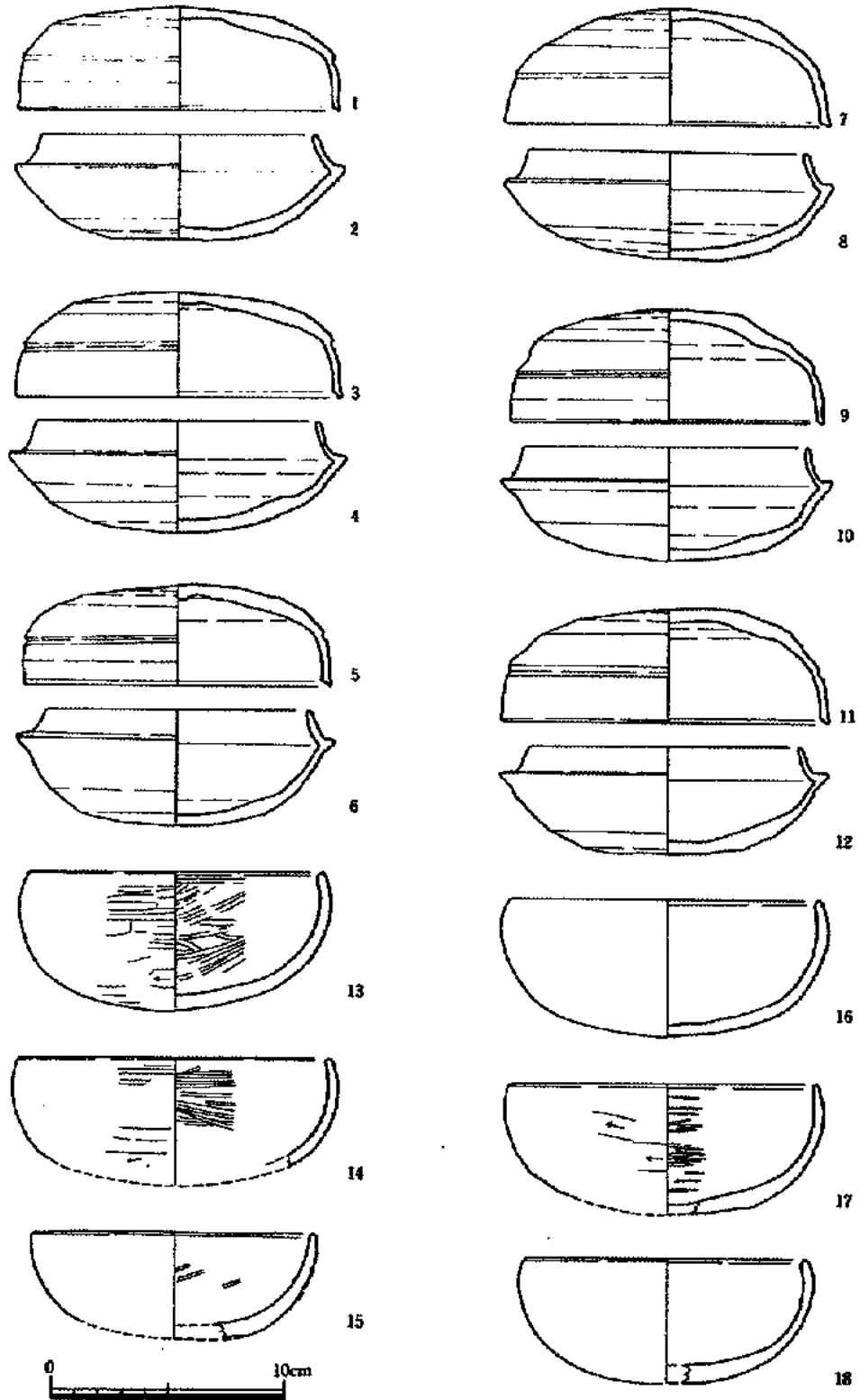
中世の土器

26-40が石室内の床面近くから、41-43が周溝内から出土した。石室内出土遺物の配置に特別な点は看取できないが、把握できた出土状況は以下の通りである。石室右側壁下の玄門近くに瓦質摺鉢・35に示した青磁碗・須恵器摺鉢を重ね、左側壁中程の際に劃花文碗が、そして石室右奥コーナー近くに33・36・37の白磁・青磁がまとまっていた。土師器の皿はすべてを確認できていないが、26・27が右奥の一群に接して出土した。

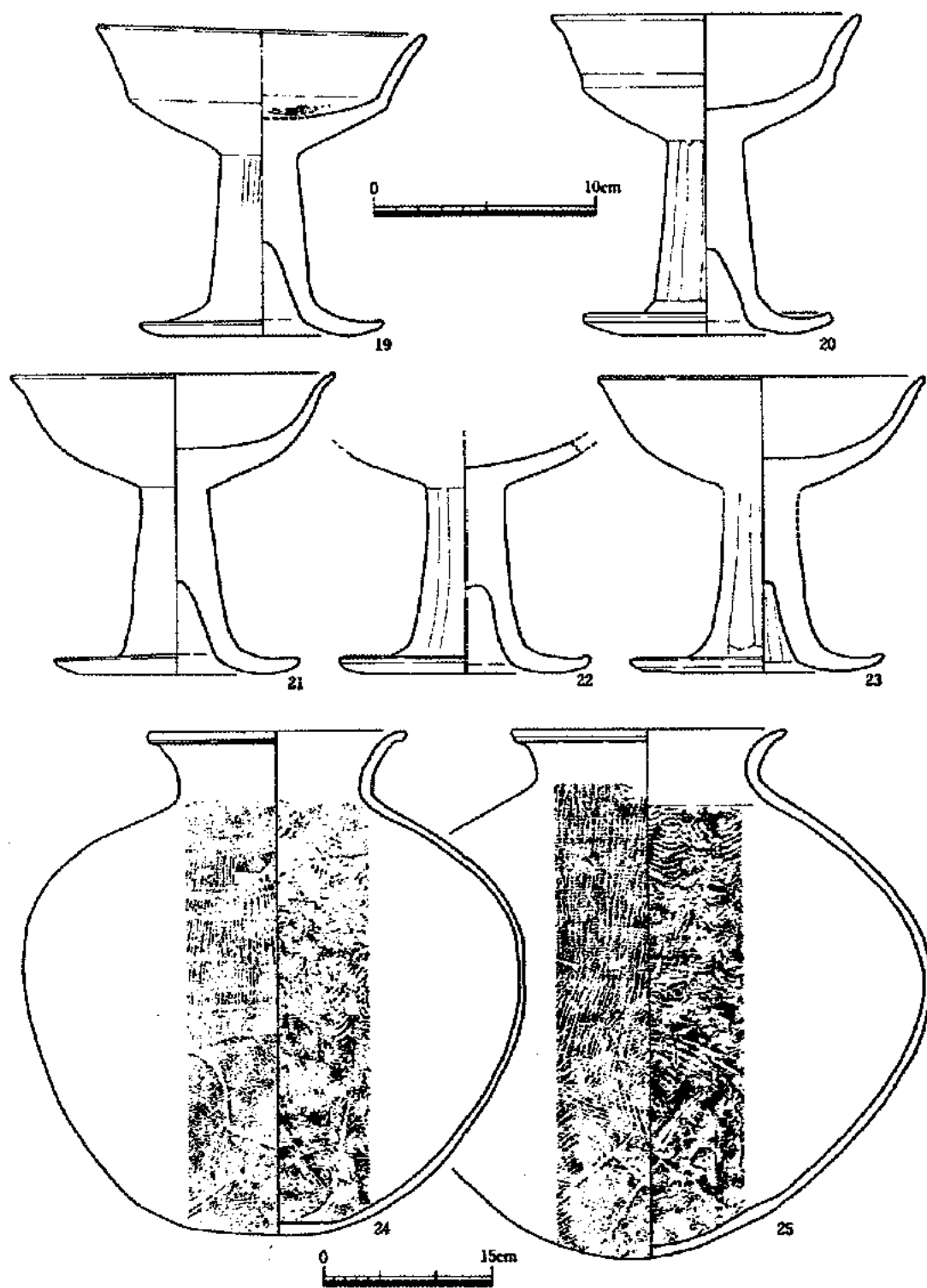
土師器(26-32-41) 皿7点を図示したが、他に数点がある。法量で分類すると口径8.5-9cmの小型品と、同12-14.5cmの大型品に分かれる。確認できるものはいずれも底部外面に回転糸切り痕と板状圧痕を残す。



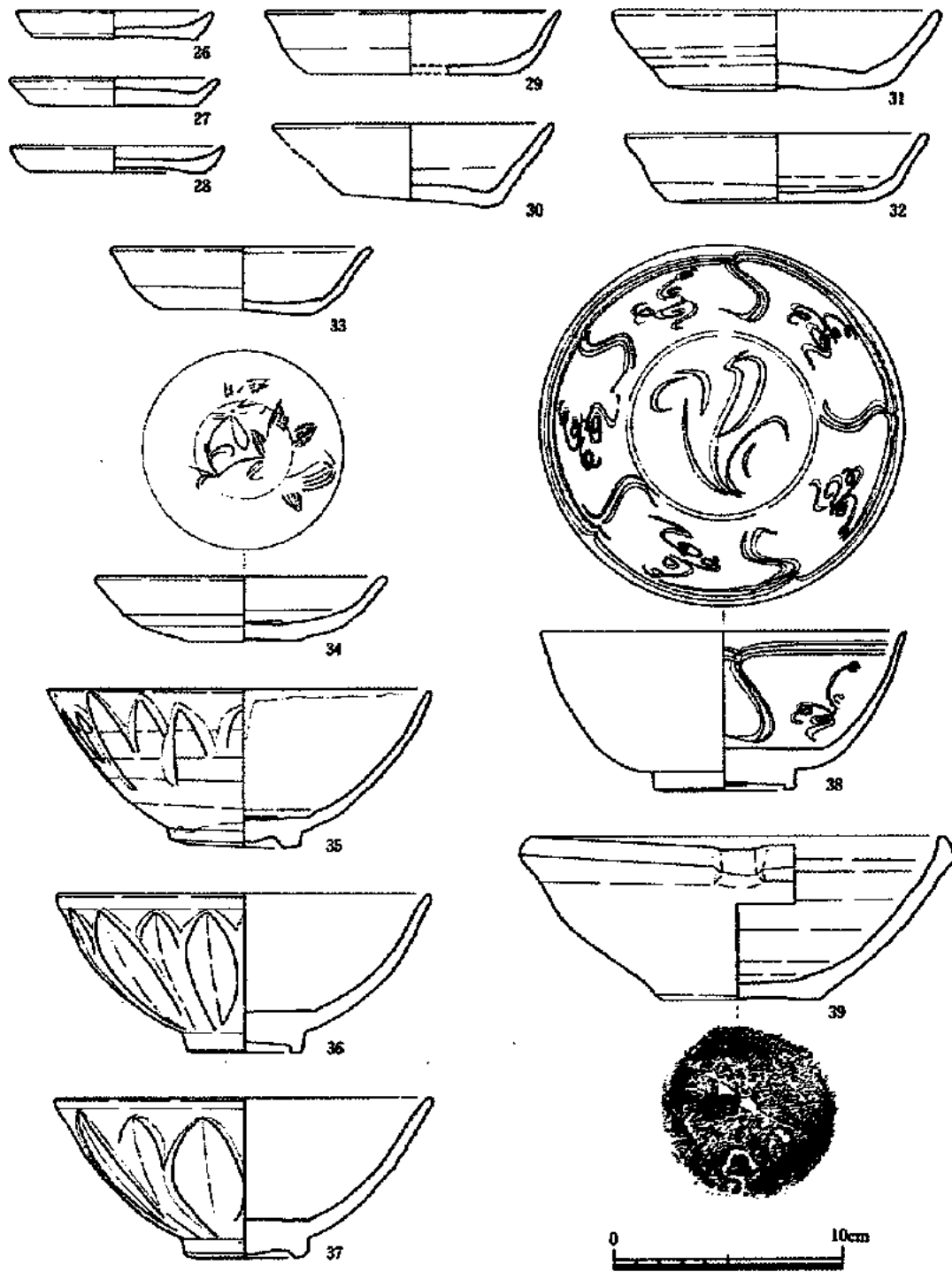
第18図 7号墳周溝内遺物
出土状態実測図(1/20)



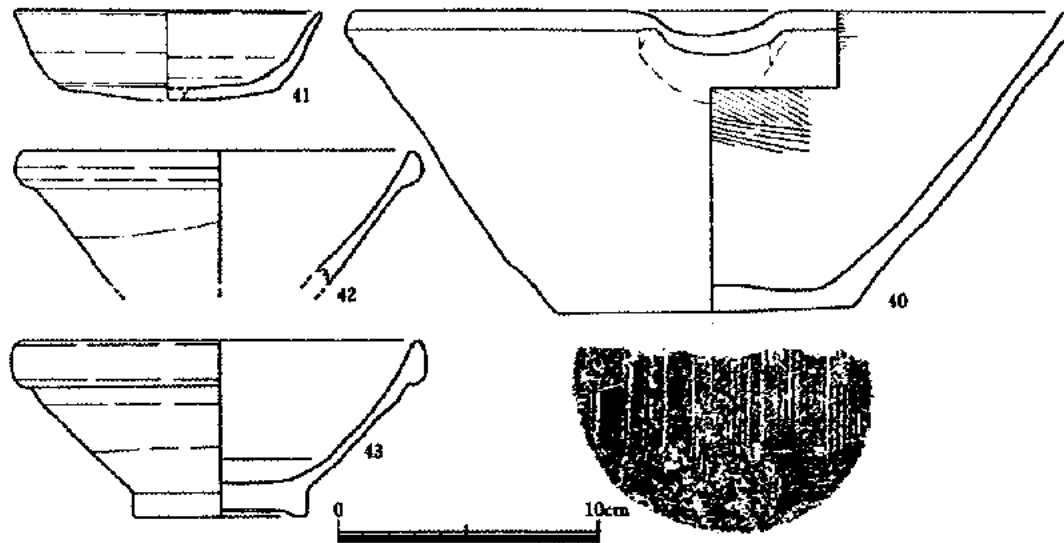
第19图 7号墳出土遺物実測図2 (1/3)



第20图 7号墳出土遺物実測図3 (1/3、1/6)



第21图 7号墳出土遺物実測図4 (1/3)



第22図 7号墳出土遺物実測図5 (1/3)

瓦質土器(40) 片口の摺鉢で口縁部の約1/2を欠く。器表の剥落が著しいが、外面に多くの指頭痕が残り、内面に刷毛目を残す。また、底部外面には板状圧痕を観察できる。

須恵器(39) ほほ完形の片口の摺鉢。口縁部外面のみが黒色化している。底部外面には糸切り痕を留める。

白磁(33・42・43) 33は口禿げの皿で完存する。42・43は玉縁の椀。

青磁(34-38) 34は龍泉窯系の皿で、見込みに釘彫りの草花文を刻む。釉は緑帯びる青白色を呈する。35は体部外面に窪削り痕の明瞭に残る蓮弁文椀で、鎊はない。36・37は鎊蓮弁文椀で、ともに黄緑色を基調とする釉を被る。以上の蓮弁は片切り彫りで刻む。38は文様帯を五分割して雲気文を片切り彫りで刻む。釉は灰緑色に発色する。

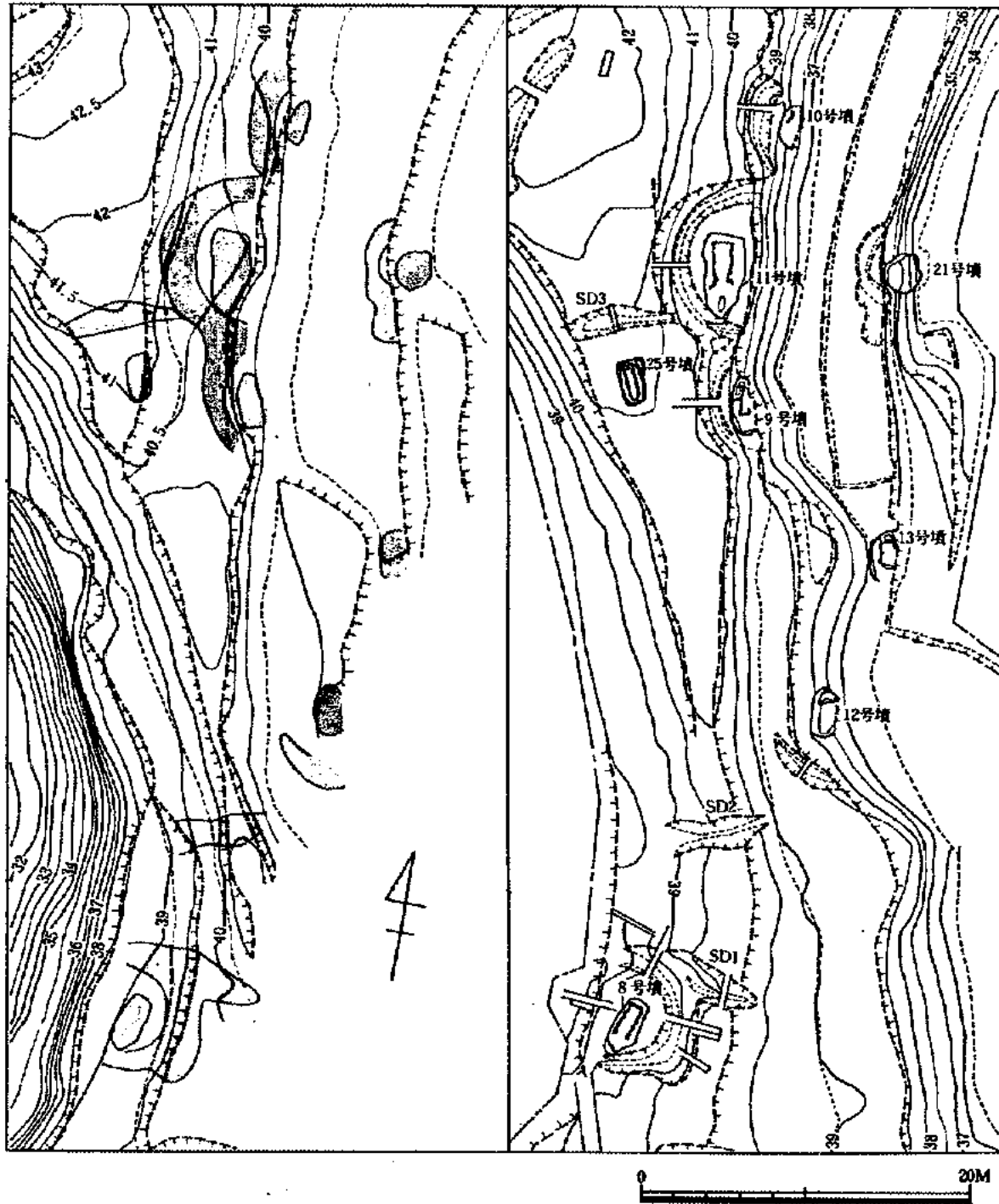
9) 8号墳 (図版5、第23・69図)

3号墳の北側にあり、西側は比高7m強の急斜面となっている。現状ではまったく古墳と確認できず、表土掘削後にそれと判明した。また、周溝の一部は中世に埋没した溝に切られているが平面的に捉えることができずに終わった。

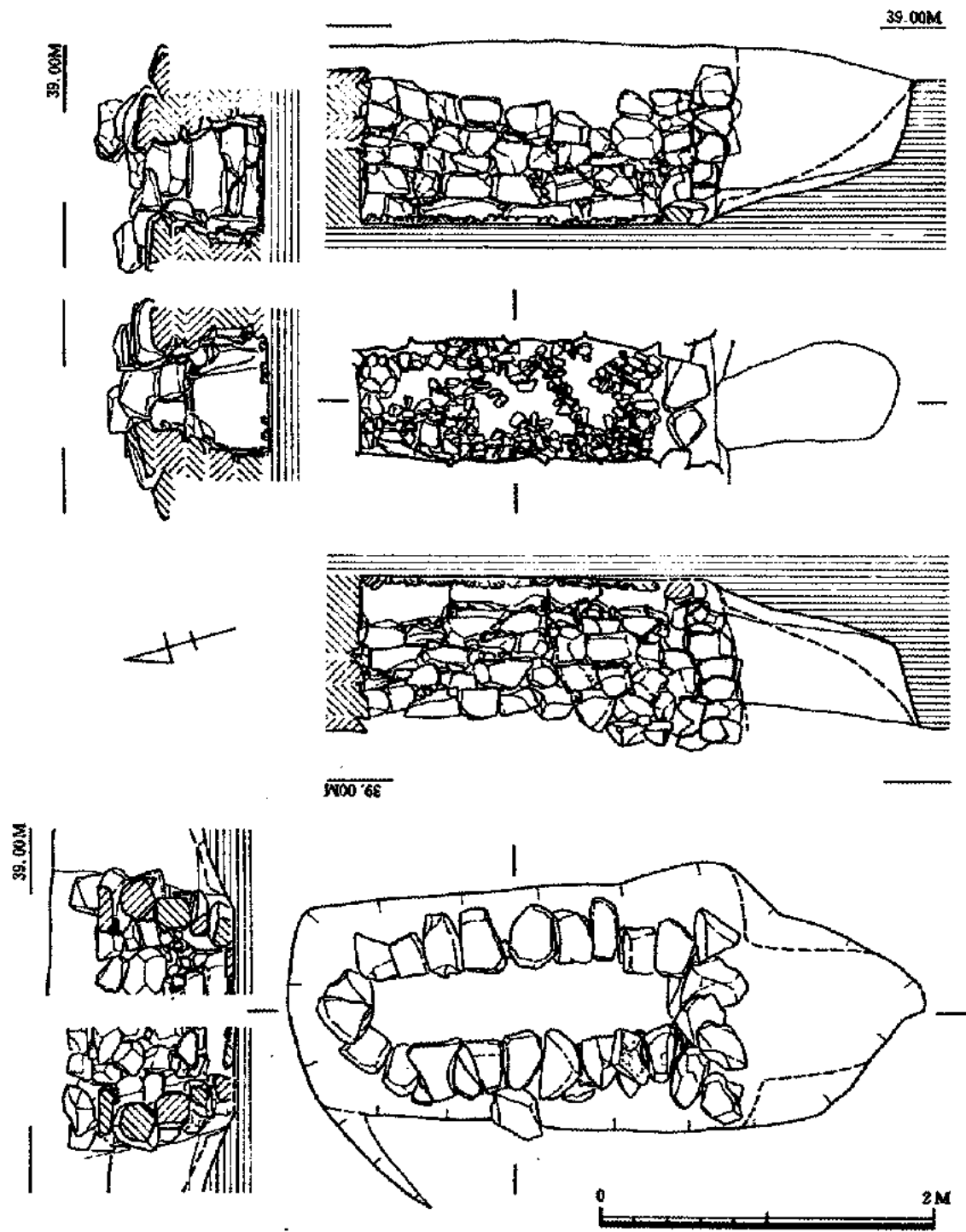
周溝は幅2m、深さ1m強の規模で石室東側、高位の緩斜面に半円形を描いて掘り込まれている。主体部中心からの距離は2-3mとなる。

主体部 (図版11・12、第24図)

天井石は失われているものの残存状況は概ね良好といえる。天井石が水平に架構される単室



第23图 8-13-12号墳地形測量图 (1/400)



第24图 8号墳主体部実測図 (1/40)

の所謂竪穴系横口式石室である。掘形は発掘を失敗したが、2.8×1.3~1.5mの長方形プランを推測でき、南側短辺に長さ1mの短い墓道が取り付く。

玄室の規模は0.6~0.7×1.8mで、中央部がやや膨らむ長方形の平面プランを採る。残存部の高さは最高で1mを測るが、天井石を架構するとはは掘形の上端に一致することから、壁体は原状に近いと思われる。

奥壁腰石には当古墳で最も大きな石材を立てて使用し、それ以上と両側壁はほぼ人頭大の石材を横積みにして構成し、小さく持ち送っている。左側壁は奥壁とのコーナーから墓道貼石部分まで目地がよく揃うが、右側壁では玄門部に向かって下降する。

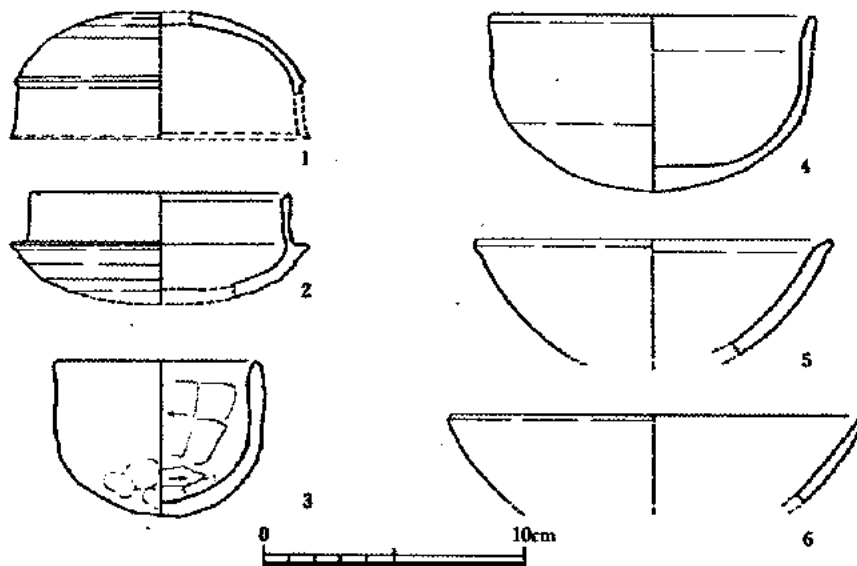
玄門部では奥壁腰石及び側壁の二段に見合う高さの袖石を立て、以上の石積みは側壁の目地に揃い突出度は小さい。墓道の貼石は短く、縦一列の石積みで終わり、袖石の控えといった感がある。閉塞石はやや大振りの石材を横積みにして構成する。

出土遺物（図版44、第25図）

石室内は無遺物で、周溝内より土器が出土したのみである。

須恵器（1・2） 1は口縁部を欠くが天井部は比較的大きな部分が残る。天井・口縁部界は突線状に明瞭に作り出されている。2もかなりの部分が残るが接続しえず、反転・復原実測したもので口縁部立ち上がりの長さは確実なものでない。1・2ともに焼成は良好であるが、胎土が粗い。TK47型式に比定できようか。

土師器（3-5） 3はほぼ完形の粗製品。4も完形に近いが底部を欠く。丁寧な寛磨きを多用して仕上げている。5も完形に近い。外面底部付近を篋削り、その他の部分を横撫でで仕上げるようである。



第25図 8号墳出土遺物実測図 (1/3)

白磁(6) 同一の口縁部片が数点出土している。口縁部は内彎気味に直行して素縁で終わる。釉は黄味を帯びる色に発色する。

10) 9号墳 (第23図、70図)

現地形で尾根線が最も狭くなる地点の東斜面、本丘陵の北側に入りこむ谷の西側斜面に占地する。この谷部分は開墾が著しく、当古墳も東半と北端部を破壊されている。

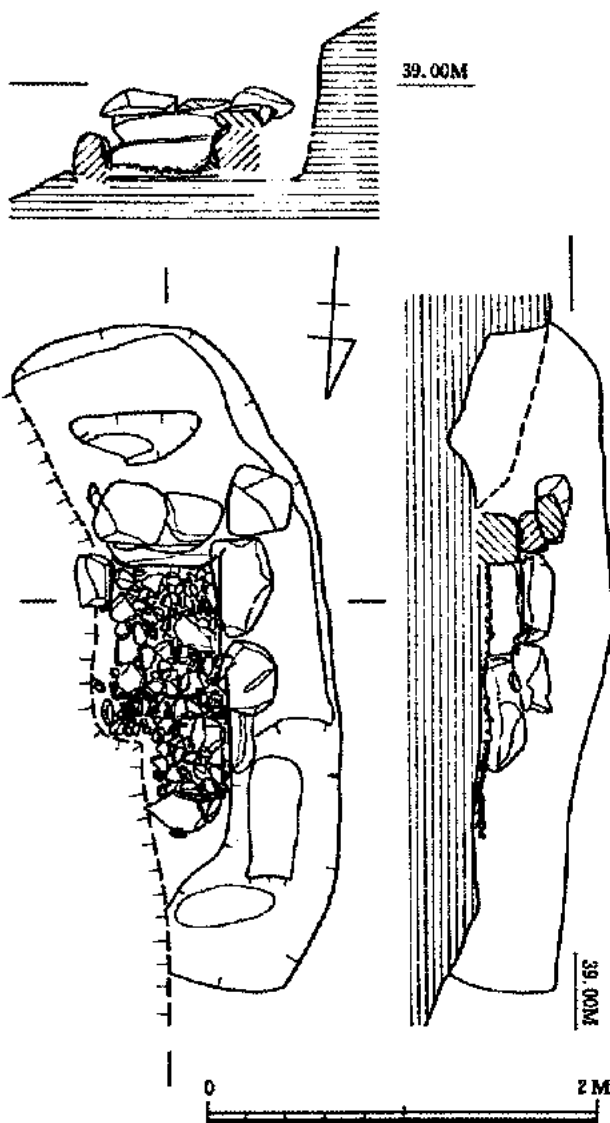
主体部西側には幅1.5m、深さ0.6mほどの周溝が石室を中心として内径3-5mの弧を描く。その北端は11号墳周溝と一部重複するが切合関係は把握できていない。盛土は遺存しない。

主体部 (図版13、第26図)

破壊が著しい小型の石室で、石材は側壁・閉塞石・敷石の一部が残存するに過ぎない。石材の抜取痕からみて石室規模は内法で長さ1.5m前後、幅0.6mに復原できる。框とする石材が腰石と同レベルにある点など一見小型の竪穴式石室を思わせるが、左側壁南端に貼石が付設される点や、石室掘形が南側へ張り出すことなどからみて小型の竪穴系横口式石室と考えてよかろう。なお、主体部床面は周溝底より約0.8m下位にある。

出土遺物 (第27図)

9号墳の南崖面から出土したもの



第26図 9号墳主体部実測図 (1/40)



第27図 9号墳周辺出土遺物実測図 (1/3)

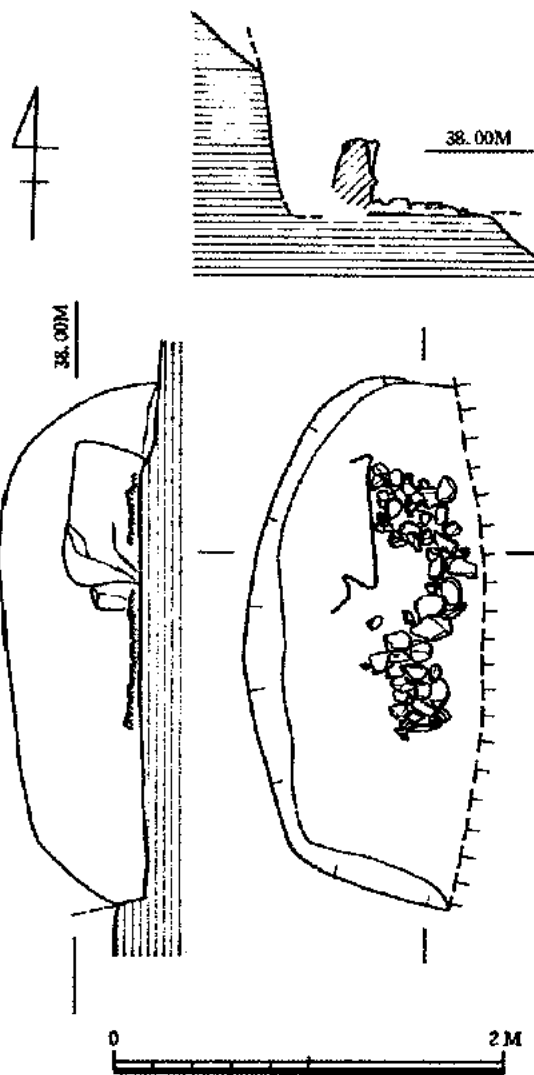
で、古墳に伴うと断言できるものではない。約1/3が残る土師器碗で、外面は不定方向の磨削り、内面は磨きで仕上げているようである。

11) 10号墳 (第23図)

11号墳を間に挟んで9号墳の南17mの地点の同じ斜面にある。破壊が著しく盛土はない。表土掘削後に判明したものである。周溝は幅1.5m、深さ0.5mの規模で主体部西側を弧状に巡り、石室中心から復原する内径は最小で約3mとなる。出土遺物はない。

主体部 (図版13・14、第28図)

開墾のために大破しており、現状では非常な急斜面に位置する。石材は1点の腰石と敷石の一部を残すに過ぎない。残存する掘形は長軸2.7m、幅1.2mと小規模であり、石材の大きさや同様な立地条件を有する他の古墳と比較参考すればやはり小型の竪穴系横口式石室を想定できる。なお、主体部床面は周溝底の1m下位にある。



第28図 10号墳主体部実測図 (1/40)

12) 11号墳 (第23・70図)

これも盛土は残らず、表土掘削後に発見したもので、本遺跡群中唯一の未盗掘石室墳である。周溝は主体部の西方を半円形に巡り、幅2m強、深さ1mの規模を有する。溝底の最高部は主体部の天井石上にあり、床面より1.6m上位にある。石室中心からの距離は4mに過ぎない。

主体部 (図版14・15・17、第31図)

上述したように未盗掘墳であり、3体分の人骨が原状に近く遺存していた。

玄室内法は長軸2.02m、奥壁幅1.16m、同高さ1.36m、玄門幅0.61m、框石・楣石間の高さ1.1mとなる。

奥壁は石室中最大の石材を腰石として垂直に立て、以上は小さく持ち送る。腰石の高さは側壁のほぼ4段目に相当する。

左右両側壁は腰石を含めて8段の石積みで構成され、小礫を使用するパッキングが著しい。中には軽く触れるだけで落下するものもあり、壁体を積み上げつつ必要以上に目地に詰めこまれた様子が窺える。腰石は通例のように奥壁側がより大型となっている。

右側壁は奥壁の腰石に相当する高さまではほぼ垂直に積み上げ、以上は若干持ち送っている。本来的なあり方を示しているであろう。壁体の目地も整然と通っている。

左側壁では玄門脇の2段目に大型の石材を使用しているためか、上位で石積みが乱れている。壁体が直線的に内傾するのは土圧による変形と思われる。

玄門部分では左右ともに石材を立てて袖石とし、その意識がはっきり見て取れる。左側は側壁の2段目、右側では4段目とはほぼ目地が揃い、袖石以上の石材も左右両側壁に揃う。

敷石は径10~20cmの小角礫を乱雑に敷き詰めており、規則制は見えない。

天井石は4個の大型石材を並べ、これも丁寧にパッキングを施すが粘土等の特殊な用材は観察できなかった。前面に向かって緩く下降するものの、所謂前壁構造はない。

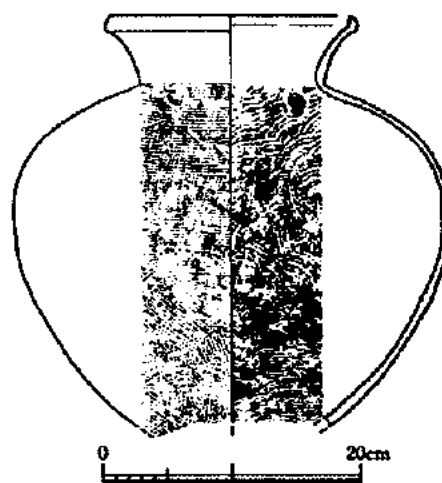
墓道は土壌墓を連続して発掘したために細部は不明となった。しかし土壌墓を含めても長さは2.4mに過ぎない短いもので、急斜面に復原できる。玄門に取り付く部分では左右両側壁ともに最大2列の貼石を付すが、その積み方は乱雑である。

閉塞は框石上に偏平な板石を置いてその上に角礫4個を並べ、さらに板石を立て掛ける。

なお、人骨の性別等は以下の通りである(註2)。

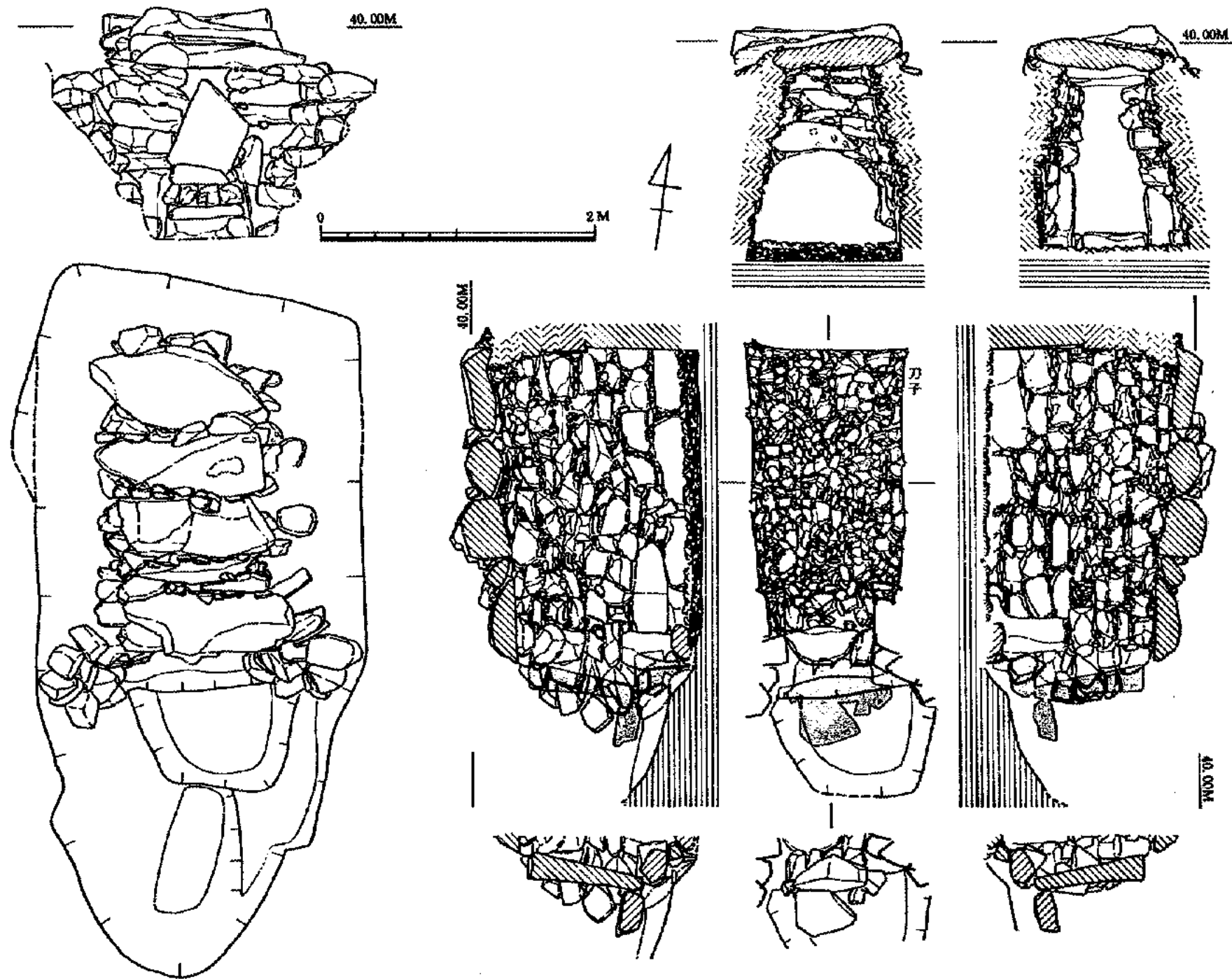


第29図 11号墳出土遺物実測図1 (1/3)



第30図 11号墳出土遺物実測図2 (1/6)

人骨番号	時代	埋葬形式	伴出遺物	性別	年齢	推定身長(m)	抜歯	備考
1号	古墳時代中期	円墳(横穴式石室)	なし	女性	老年		なし	
2号				女性	成年			
3号				女性	老年			



第31图 11号墳主体部実測図 (1/40)

出土遺物 (図版44、第29・30図)

主体部内より刀子を、周溝内より須恵器を出土している。

刀子 主体部右奥敷石上から出土し、検出時から切先を欠いていた。柄の部分には木質と、さらにそれを覆う鹿角が遺存している。

土器 底部を欠く須恵器甕で、細片化して墓道西側の周溝底よりまとまって出土した。口縁端部を上方につまみ出して拡張し、外面に稜線を造り出して唯一の装飾とする。TK47型式に比定できる。

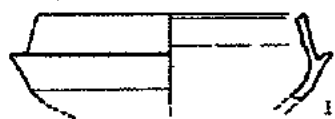
13) 12号墳 (第23・70図)

9号墳の南にあり、南へ入りこむ谷の同じ西斜面にある。破壊を受ける状況も似た状況で、当古墳では敷石と周溝を残すのみである。

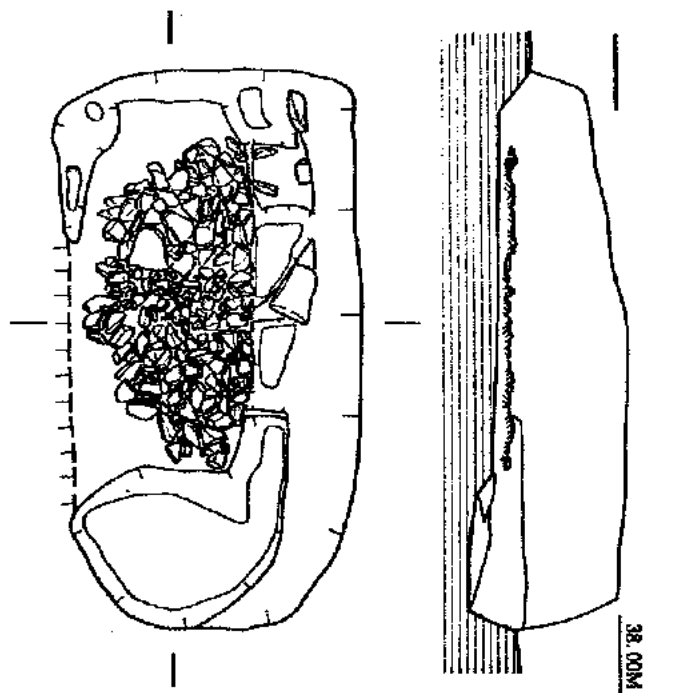
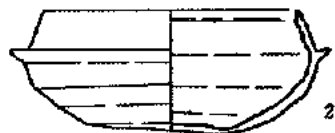
周溝は幅1mほどの小規模なものである。石室中心から測る内径は約6mとなる。

主体部 (図版18、第33図)

掘形は長幅2.8m、幅1.6mの規模である。残存する敷石・腰石の抜取復から推して、主体部内法は長軸1.9m、幅0.9mほどに復原される。北側の抜取痕が深くかつ大規模であることから奥壁に想定でき、他の古墳の状況を勘案すれば南側に入口を持つ竪穴系横口式石室であったと考えてよからう。



第32図 12号墳出土遺物実測図 (1/3)



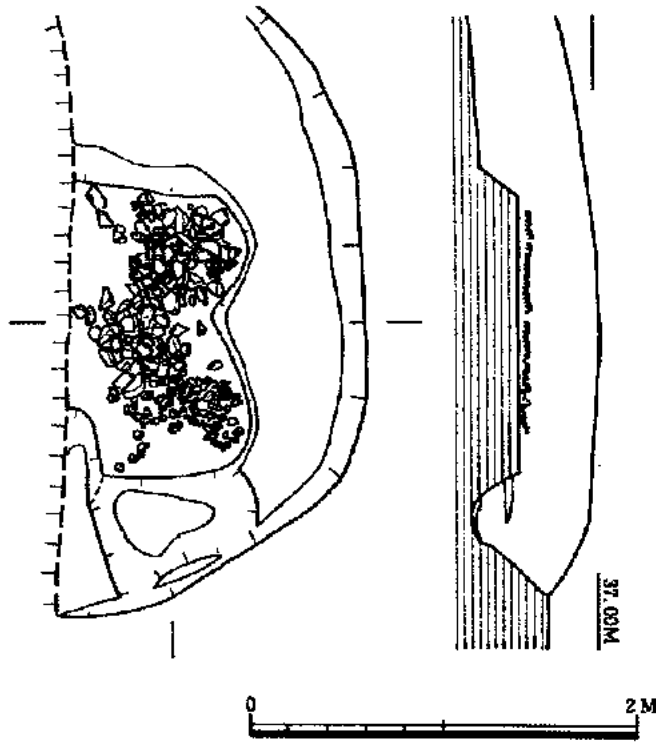
第33図 12号墳主体部実測図 (1/40)

出土遺物 (図版44、第32図)
 周溝より須恵器杯身2点を出土している。1は小片であるが、残存部の形状は2と同様である。2は口縁部の一部を欠く。立ち上がりの内傾が著しく、端面を段を有する。底部の張りが強い点特徴的である。TK23-TK47型式とできる。



14) 13号墳 (第23・71図)
 9号墳の西、12mの斜面に位置し、盛土・周溝はない。出土遺物もない。

主体部 (図版18、第34図)
 石材の抜取痕と敷石の一部を残すのみである。敷石の範囲は1×1.1mで、小礫が乱雑に遺存していた。北側小口部分の抜取痕がもっとも深くなっていることから奥壁を想定でき、入口は南に考えられる。



第34図 13号墳主体部実測図 (1/40)

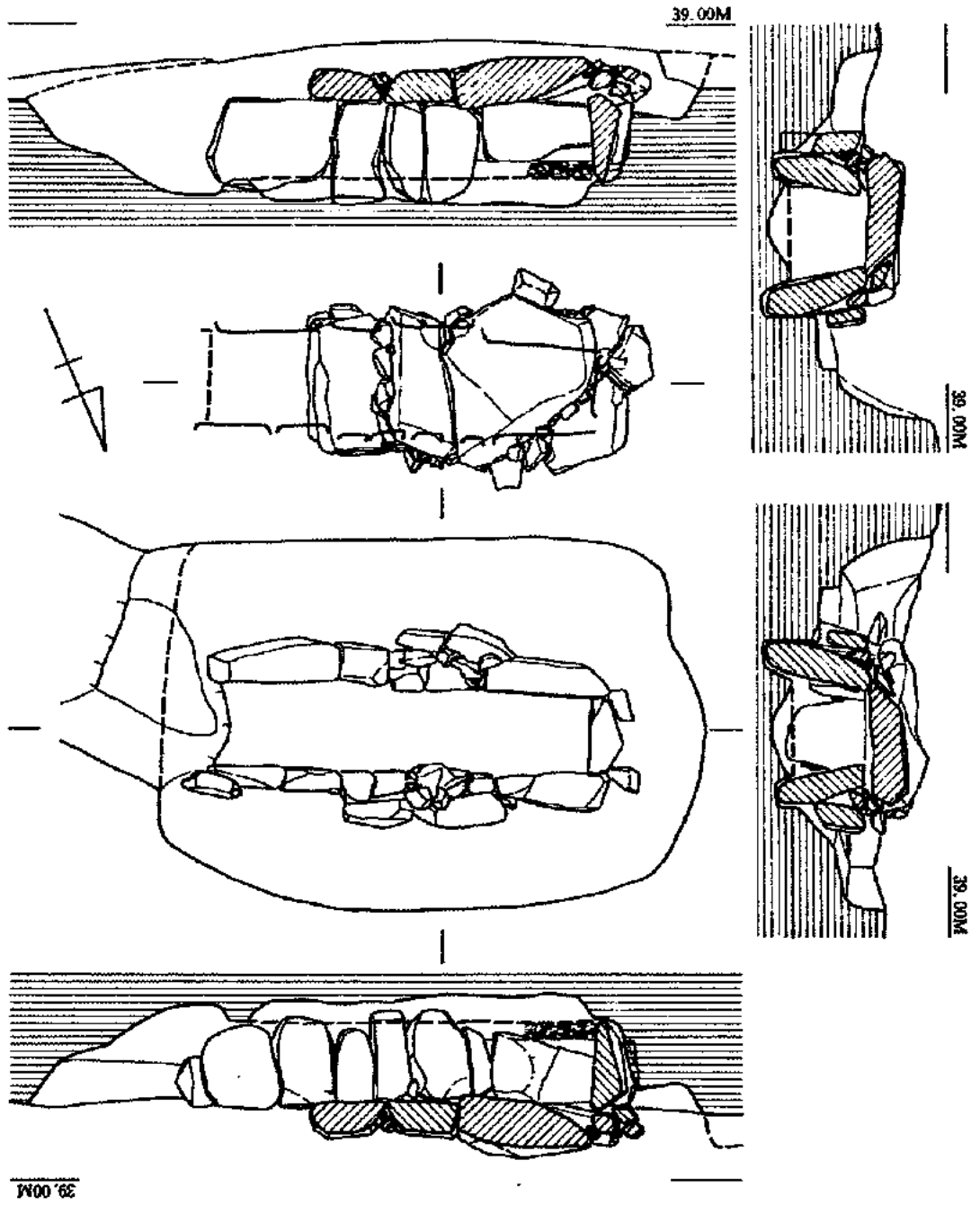
石室の形態は敷石や石材抜取痕の状況、そして接近する他の古墳の形態などを考え合わせるとやはり小型の竪穴系横口式石室を復原できる。

15) 14号墳

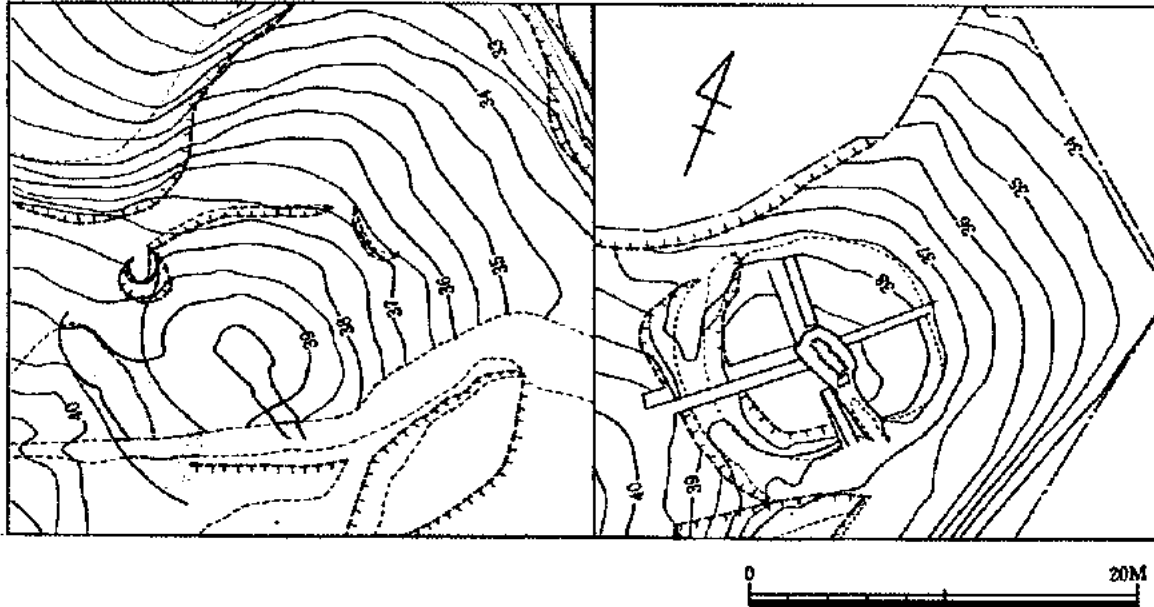
南北へ延びる主尾根から東へ張り出した支丘上にある。調査前から古墳であるという確信を得ていたが、南端を神社への参道・開墾で破壊されており、かつ現状では墳裾の傾斜変換線を認めることができなかった。墳頂は径8m前後の平坦面となっており、盗掘坑も観察できなかった。

墳丘 (図版19・20、第36・70図)

盛土の範囲は東西・南北ともに約8.5mであり、主尾根側(墳丘西側)には幅4m、深さ1.1m



第35图 14号墳主体部実測図 (1/40)



第36図 14号墳地形測量図 (1/400)

の大きな周溝を掘削している。墳形を決める材料はないが、円墳として大過なからう。

残存する盛土はもっとも厚い部分で0.6mとなる。周溝の内側では幅1.3mにわたって盛土の残存しない部分があるが、元來施していなかった可能性も考えられる。

主体部 (図版21、第35図)

南側小口部分が盗掘によつて破壊されるが、主軸長2.2m、幅0.5mの大型の箱式石棺を復原できる。床面は攪乱が著しくほとんど旧状を残さないが、盗掘坑発掘時に拳大以下の小円礫を多く検出しており、敷石として用いられていたと思われる。

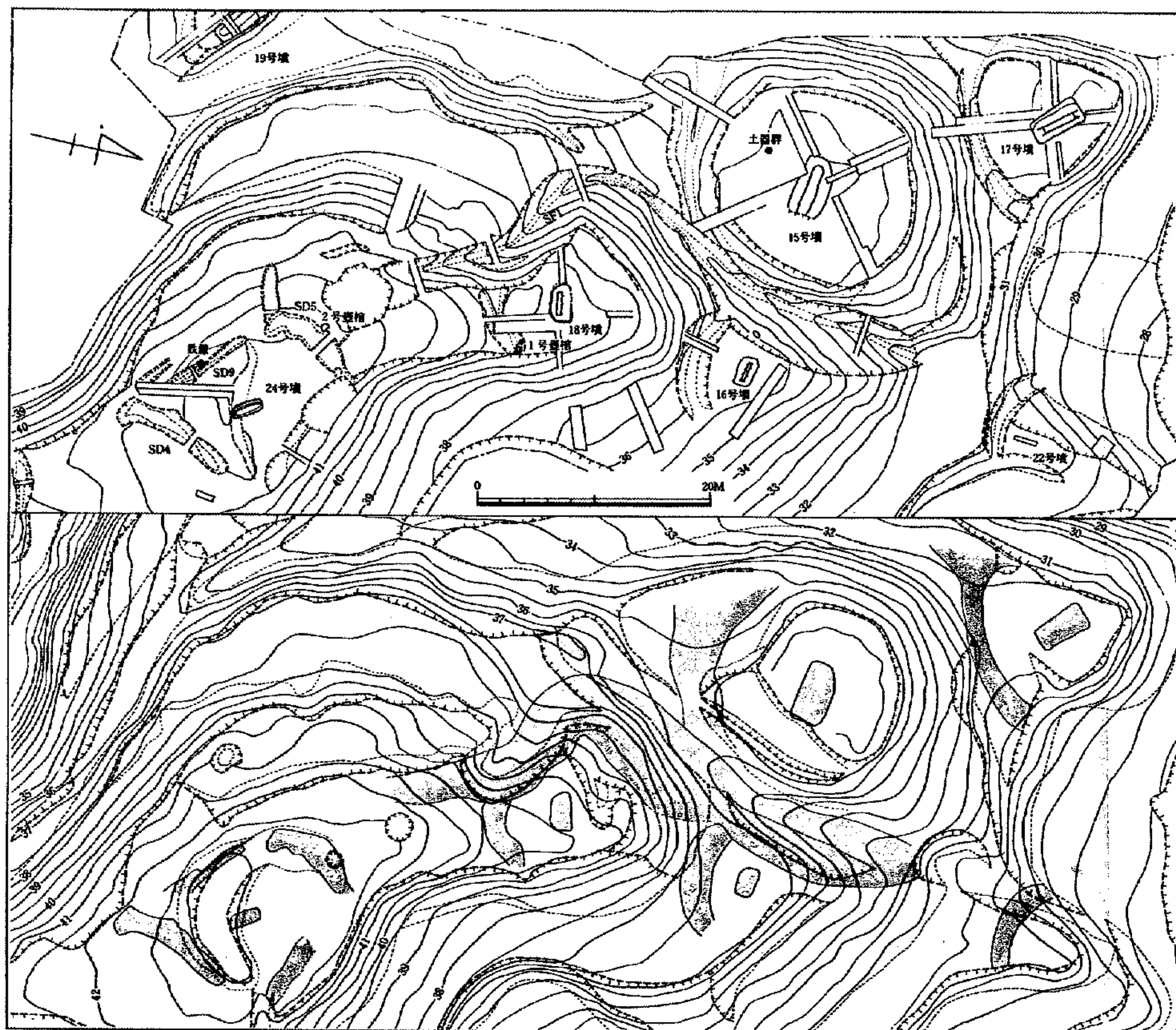
南側壁は5個、北側壁では7個の偏平な石材を立てるが、おおむね東側の石材が大振りになっており、かつ床幅もやや広いことから頭位を東に採ったと考えられる。

天井石は大小3個が残る。ここも入念なパッキングが施されるが、粘土は検出されていない。出土遺物はない。

16) 15号墳

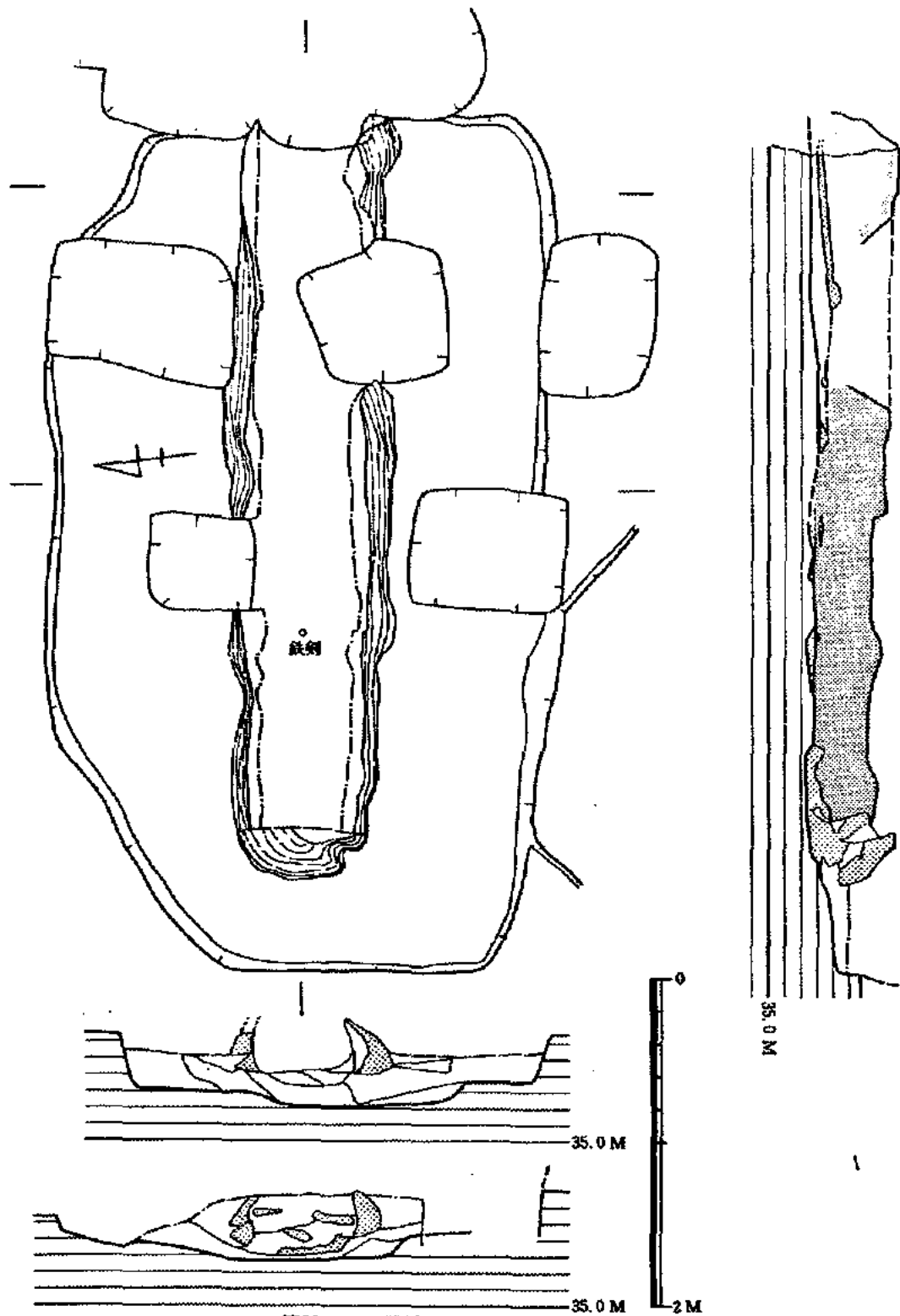
当遺跡群中で確認した古墳のなかで最も墳丘が良好に遺存する。墳頂部には近世墓の石積みが多く残り、一部削平を受ける部分もあるが頂部平坦面は径13~15mを測る。墳丘東側、16・18号墳との間には中世の道路状遺構があって大きくくぼみ、同西側は崖に連なるなど、現状では墳裾の判断はできなかった。

調査は尾根線と平行及び直行するトレンチを入れることから始め、主体部・地山面を確認した後に盛土のすべてを除去した。



第37圖 15-18・22・24号墳地形測量図 (1/400)

3
34



第38圖 15号墳主体部実測図 (1/40)

墳丘 (図版22・23、第37・71図)

盛土は東西15.6m、南北方向では11.3mの長さまで確認できた。しかし、南北方向では盛土北端から周溝肩までの距離が17.4mを測り、墳丘規模としては径16m前後の円墳を想定して大過なからう。盛土の厚い部分では約0.9mの高さがあり、その構築法として顕著な特徴はない。なお、地山の旧地表上で数点の土器が出土している。

周溝は中世の道路状遺構によって半分以上が再掘削され、南側の一部が旧状を留めている。そこでは幅約4m、深さ0.7mの規模となり、通常のレンズ状の堆積状態を観察できる。

主体部 (図版24・25、第38図)

近世墓が集中する部分であるために一部不明点があるものの、約3.0×5.2mの不整長方形に復原できる掘形内に設置された粘土槨を埋葬主体とする。被覆粘土の形状から割竹形を推測できる木棺は直径0.6m、長さ4.4m前後である。

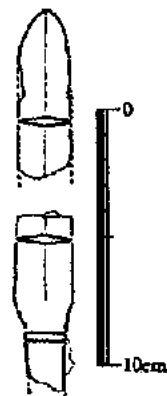
木棺は割竹を粘土で丁寧に包み込むものの、棺上・棺底では大雑把に粘土を被覆し、敷いていたことが横断面図によって看取できる。棺底のベンガラも同様である。

小口部の粘土は平面的には両側縁を挟み込む形となっているが、断面の観察では床面及び立ち上がり部分の粘土中に炭を含む間層を見ることができ、その上に乗る小口粘土は木棺を被覆していたものと考えてよからう。棺床粘土中の間層は理解に苦しむ。また、小口粘土との間にやはり間層を挟んで内側に傾く粘土塊は小口板の裏込めに供されたものであろう。そうとすれば、小口板は木棺端部にきわめて近い部分で使用されていたと考えられる。

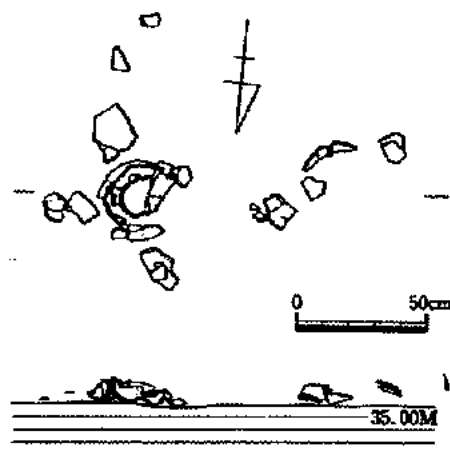
なお、掘形西側短辺で径2m前後の不整円形土坑を地山(旧地表)上で検出している。主体部掘形に先行する遺構で、深さ0.5mを測り、床面は段階状になっている。埋土に特記すべきような点はなく、出土遺物も皆無であり性格は不明と言わざるを得ない。

出土遺物 (図版25・44・45、第39-41図)

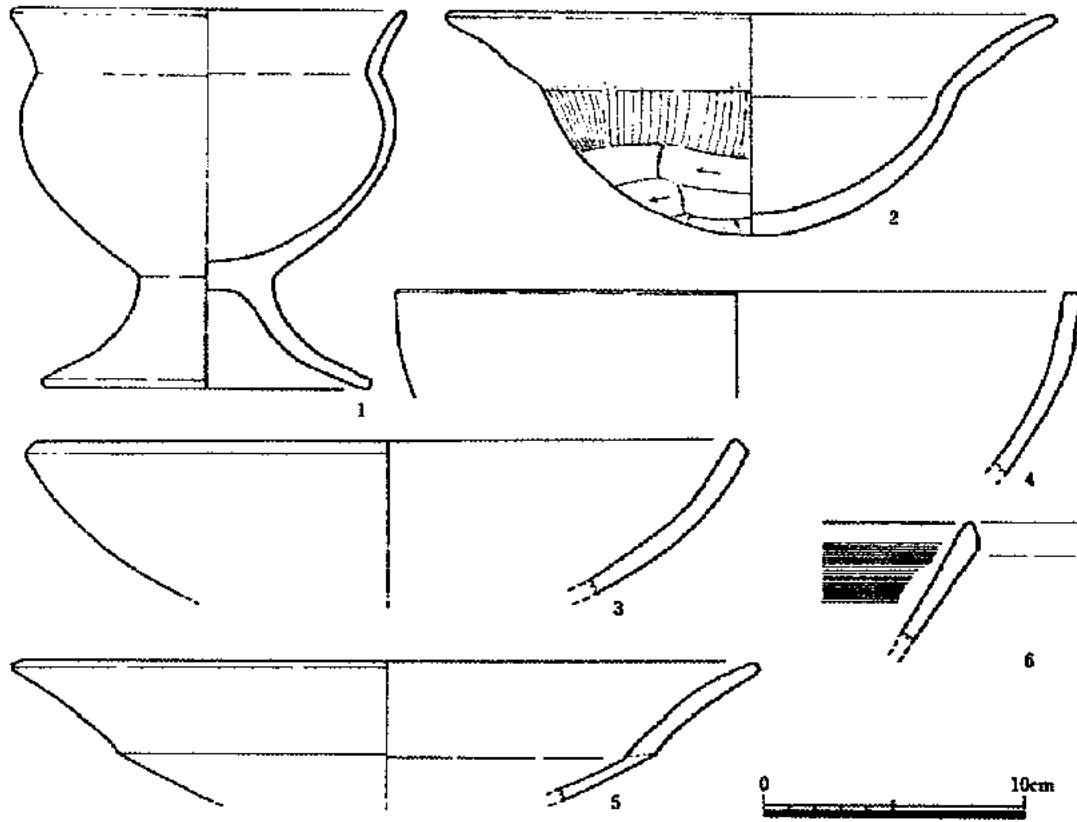
主体部内から鉄剣を、墳丘下の地山上から若干の土器を出土している。



第39図
15号墳出土遺物
実測図1 (1/3)



第40図 15号墳地山上遺物
出土状態実測図 (1/30)



第41図 15号墳出土遺物実測図2 (1/3)

鉄剣 主体部中央部付近から出土した。刃部の中央部で折れ、柄頭を欠く。刃部は幅2.2cmで、明瞭な鑿を持つ。関の部分は現状では図のように滑らかに移行しているが、本来的な形状を示しているものか定かでない。

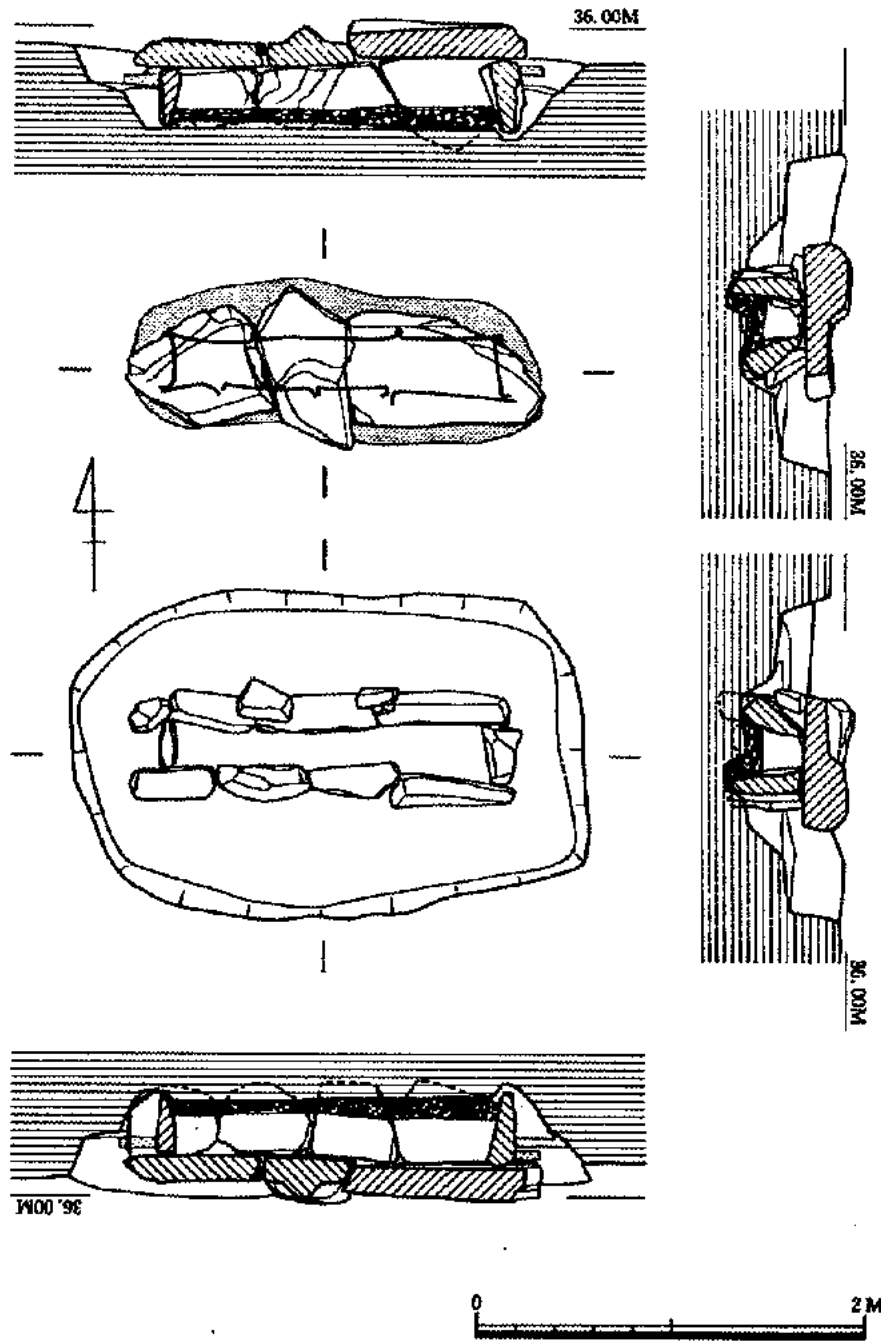
土器 1～5は盛土の下、旧地表（地山）上よりまとめて出土し、6は周溝より出土した。

1は約1/2が残存する脚付き鉢で、調整痕は一切わからない。2もほぼ1/2が残存する。底部は浅く、口縁部の発達が特徴的である。体部外面の上半を刷毛目で、下半を篋削りで仕上げている。3・4も鉢であろう。器表の風化が著しい。5の高杯も同様である。

6は瓦質の摺鉢で、中世の道路状遺構SF1に伴うものであろう。

17) 16号墳 (図版22・23、37・71図)

15号墳の東側、18号墳の北側段下に位置する。旧地形は15号墳と一連の尾根線であったろう



第42图 16号墳主体部実測図 (1/40)

が、15号墳に後出するために窮屈な感のある地点を占地したと思われる。

盛土はまったく遺存せず、表土除去後に新たに発見したものである。主体部南側、18号墳との間に幅3m、深さ1mの弧状溝を掘削し、主体部中心で折り返した径は6mほどとなる。

主体部 (図版26、第42図)

1.6×2.7mの不整長方形プランの掘形内に

設置された完存する箱式石棺である。蓋石・北側壁を3枚、南側壁を4枚、そして両小口を各1枚の偏平な石材で構成している。さらに北側壁では目張りにも同様の石を使用している。

内法は長さ1.7m、幅0.2~0.3m、高さ0.2m前後であり、幅が広くかつ高さのある東側を頭位と想定できる。それはまた棺材の大きさからも裏付けられる。棺床には変哲のない土を敷き、頭位とできる東側では長さ1cmほどの薄い粘土が観察できたが、18号墳に見られるようなはっきりとした形状は残していない。

側壁上端、蓋石下でも薄い粘土層が幅広く見られたが、蓋石間に目張りは使用されていない。

出土遺物 (第43図)

周溝から弥生土器とともに図示した須恵器が出土している。長頸壺の小片であろう。この土器に見合う時期の遺構・遺物は他になく、その由来は不明である。

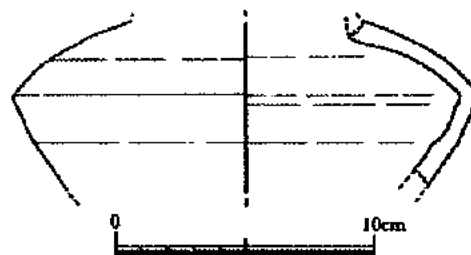
また、石棺内より壺片を出土したが取り上げに失敗した。

18) 17号墳

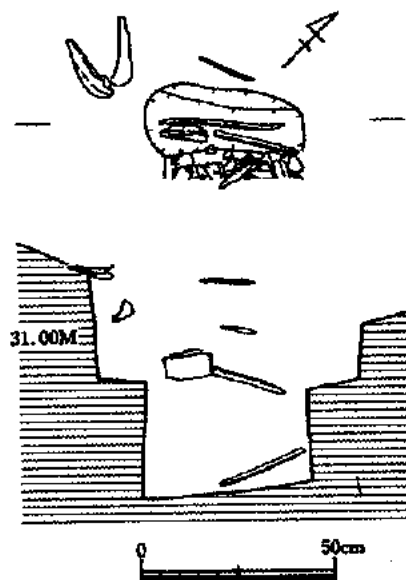
これも地形変更が著しく、調査以前には古墳と認定するに至っておらず試掘溝を入れて漸く確認できた。現状では15号墳との間に約4m、北側の畑との間に約3mの比高差を持つ丘陵先端地で、頂部は10m前後の扇形の平坦地となる。西側は急落する崖である。

墳丘 (図版22・23・27、第37・71図)

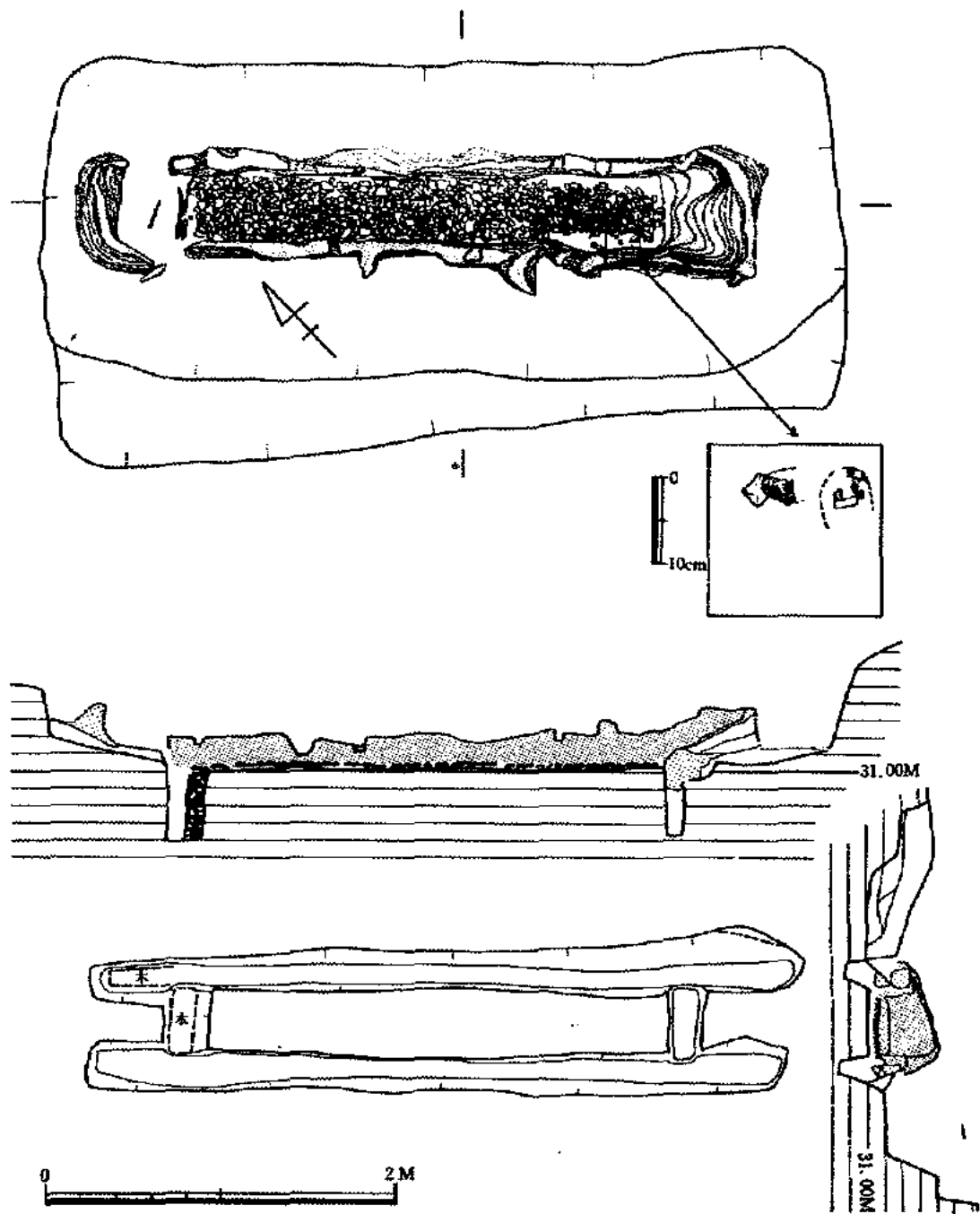
上記したように墳丘は完存しないが、東西方向で長さ8.4m、高さ約0.8mの盛土が残る。南北方向では盛土は長さ7.9m、0.5mの高さで残り、盛土の切れる地点から2.7m離れて幅1.2m、深さ0.6mの弧状溝を掘削している。主体部中心で折り返した墳丘規模は半径6.5mとなる。



第43図 16号墳出土遺物実測図 (1/3)



第44図 17号墳遺物出土状態 (1/20)



第45图 17号墳主体部実測図 (1/40)

主体部 (図版27-29、第45図)

主体部掘形は盛土を行った後に掘り込んでおり、上端は表土直下にある。それを面的に把握したのは地山面まで掘り下げた段階で、幅2.1-2.4m、長さ4.6mの不整長方形のプランを検出した。南西長側辺では幅0.2-0.6mにわたって異なる色の埋土が入っているが、これは木棺の腐朽・盛土の陥没に伴って生じた現象であろう。

埋葬主体は組合式木棺を粘土で被覆したもので、木棺はもちろん遺存していないが多量の粘土を検出している。それらの状況から未盗掘の主体部と断定できる。

径5cm前後の小礫を用いた敷石の範囲から見て木棺の規模は長軸2.7m、幅0.35mの長方形プランとなり、ほぼ腐朽した棺材の掘形内法は一致する。北西側小口部分では小口材の内側に裏込めを深く行い、南東側小口では外側に浅く行っている。長側辺では内側の掘形ラインがより急であることから外側に裏込めを行ったと考えられる。

多量の粘土は木棺外側を覆っていたものと考えられる。しかし、埋土中に多量あるいはまとまった粘土塊を見なかったことは天井が一枚板であった可能性を示していると言えよう。両長側辺も同様である。天井までの高さは小口部分の粘土が0.3-0.4mの高さで遺存することからおおよそ数値を推測できる。

頭位は壺構の出土をみた南東側に求められる。

出土遺物 (図版29・30・45、第44-46図)

主体部の北側小口部分から一括して鉄器を出土し、同南小口近くの敷石より壺構・刀子を出土した。北側小口部分では木棺が腐朽した空洞に一括して転落した様を呈していた。殊にU字形鑄先は土圧によって二つに切断されることから、それらは木棺上に副葬されていたと推測できる。南側小口付近の敷石状には第46図3に示した最大の刀子を除く3点の刀子と壺構が出土している。壺構は西辺近くに近接して5個体前後があったと思われるが取り上げに失敗してしまった。

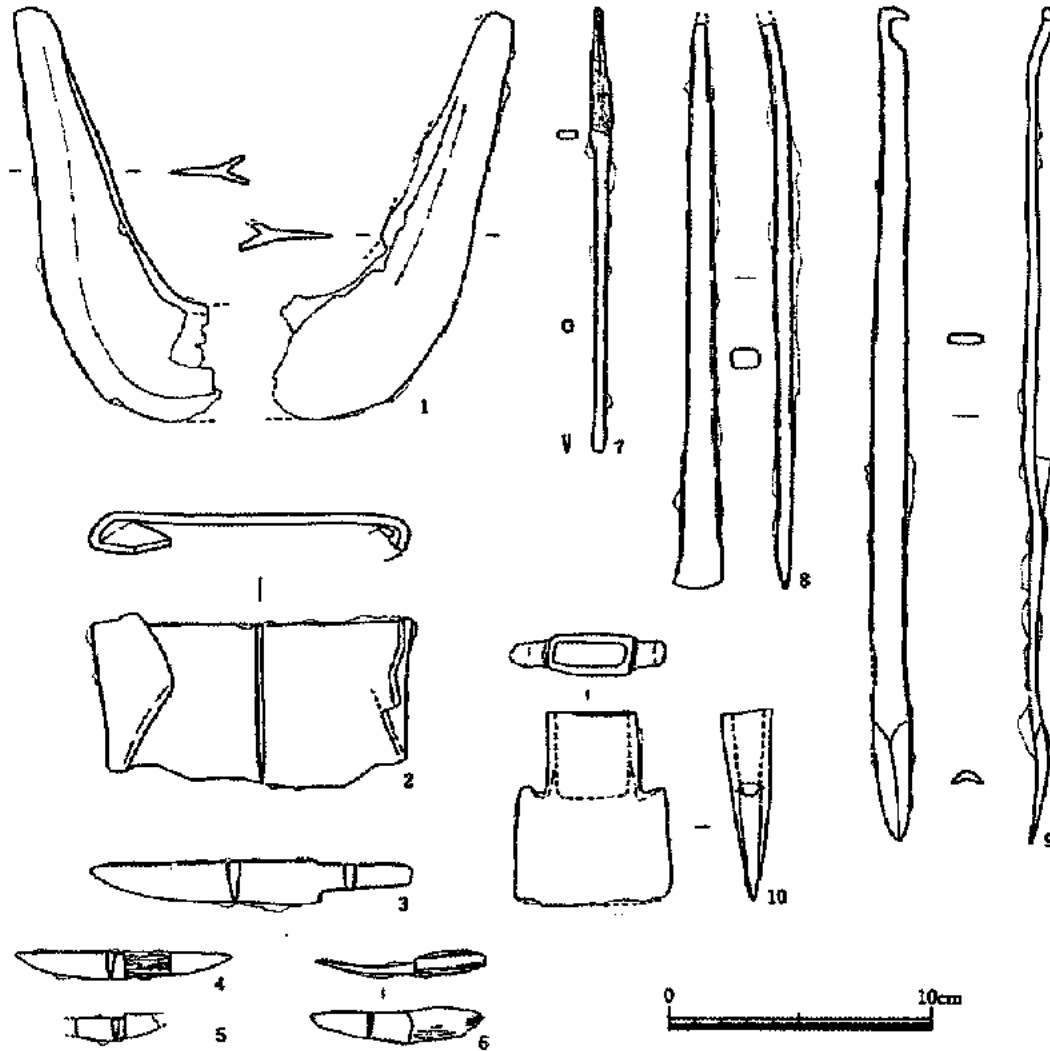
鑄先(1・2) 1はU字形を呈するもので、中央部から折れて分離している。図左に示した部分では袋部が身から遊離した箇所があり、製造時に鍛接によって袋部が形作られたことがよく解る。2はいわゆる鉄刃である。図右側の折り返し部を欠損する。刃部は中央部が両端よりも長く突き出している。この両端に刃が造り出されているかどうかは定かでない。

刀子(3-6) 大小4点が出土している。3は両関で、柄等はまったく遺存していない。4は柄に木質が見える部分と鹿角の部分がある。5は関から柄にかけて木質が覆い、細部は不明。6は切先を欠くが柄の部分に鹿角が残る。

鑿(7・8) 7は全長17.5cmの細身の製品である。身は断面方形で、基部に木質が残る。8は残存長22cmの大型品で基部の一部を欠く。刃部はやや幅広となり、身の断面形は長方形である。木質等使用法を示す痕跡は残らない。

鏃(9) 全長32.5cm、身幅1cm強、同厚さ0.4cm前後を測り、基部が鉤状となって折れ曲がっている。刃部長は約5cmで幅はさほど変わらない。鏃の見える部分を上にすると側面観は浅いU字状となり、横断面はへ形となる。これも木質等は残っていない。

鉄斧(10) 全長7.5cm、刃部幅5.5cmの小型品。身の部分の正面観は長方形で、肩が怒り肩となる。袋部は断面長方形で、閉じ合わせは見えない。鋳造品であろうか。



第46図 17号墳出土遺物実測図(1/3)

19) 18号墳 (図版22・23、第37・71図)

24号墳の北西に続く尾根上にある。現状では24号墳との間は連続的で、15号墳との間には4mの比高差がある。しかし、傾斜変換線はまったく判然とせず古墳との認識はなかった。

墳丘 (第37図)

主体部西側ではすでに盛土は残らず、北側も遺存状況は悪い。したがって東西方向では主体部を含めて6mの範囲に、南北方向では同6.1mの規模で盛土が観察できたにすぎない。南側では主体部中心から約4mの地点より幅2.3m、深さ0.6mの規模の弧状溝を掘削して墓域を画している。盛土の高さは最高で0.4m弱である。

墳丘外部施設はなく、瘦せ尾根に位置することから墳丘の流出もあって墳形は定かでないが、周溝の形態から円墳を推定してよからう。

主体部 (図版31・32、第48図)

きわめて特異な、一種の箱式石棺で、内法で長さ2m、幅0.4m、高さ0.3mとなる。

検出した段階では0.4×1.9mの長方形の範囲を囲うように幅0.2-0.5mの粘土が分布していた。特に、小口部分では東側で0.4m、西側で0.7mの幅にわたって一段と高く盛り上がりしており、棺内にはバイラン土が埋積していた。この段階で側壁の石材は見えていたものの小口の石材は見えず、あるいは倒れているかとも考えていた。しかし、棺内埋土を除去すると小口部分の粘土は頂部が山形、内側が平滑な面となっており、さらに断ち割った後に板材の裏込めとして用いられていたと推測された。小口材の基部に相当する部分に粘土を敷いて固定するように工夫を凝らしていることも上記の推測を裏付けている。

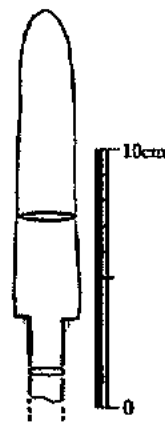
天井部にも板材を架構していたものと思われるが直接に裏付ける痕跡は残っていない。が、小口粘土の形状から横断面は弧を描いていたものと思われる。

側壁には厚さ10cmに満たない薄い石材を選別して用いている。

なお、東小口部分に粘土で作った枕を設置していた。

出土遺物 (図版33・45、第47図)

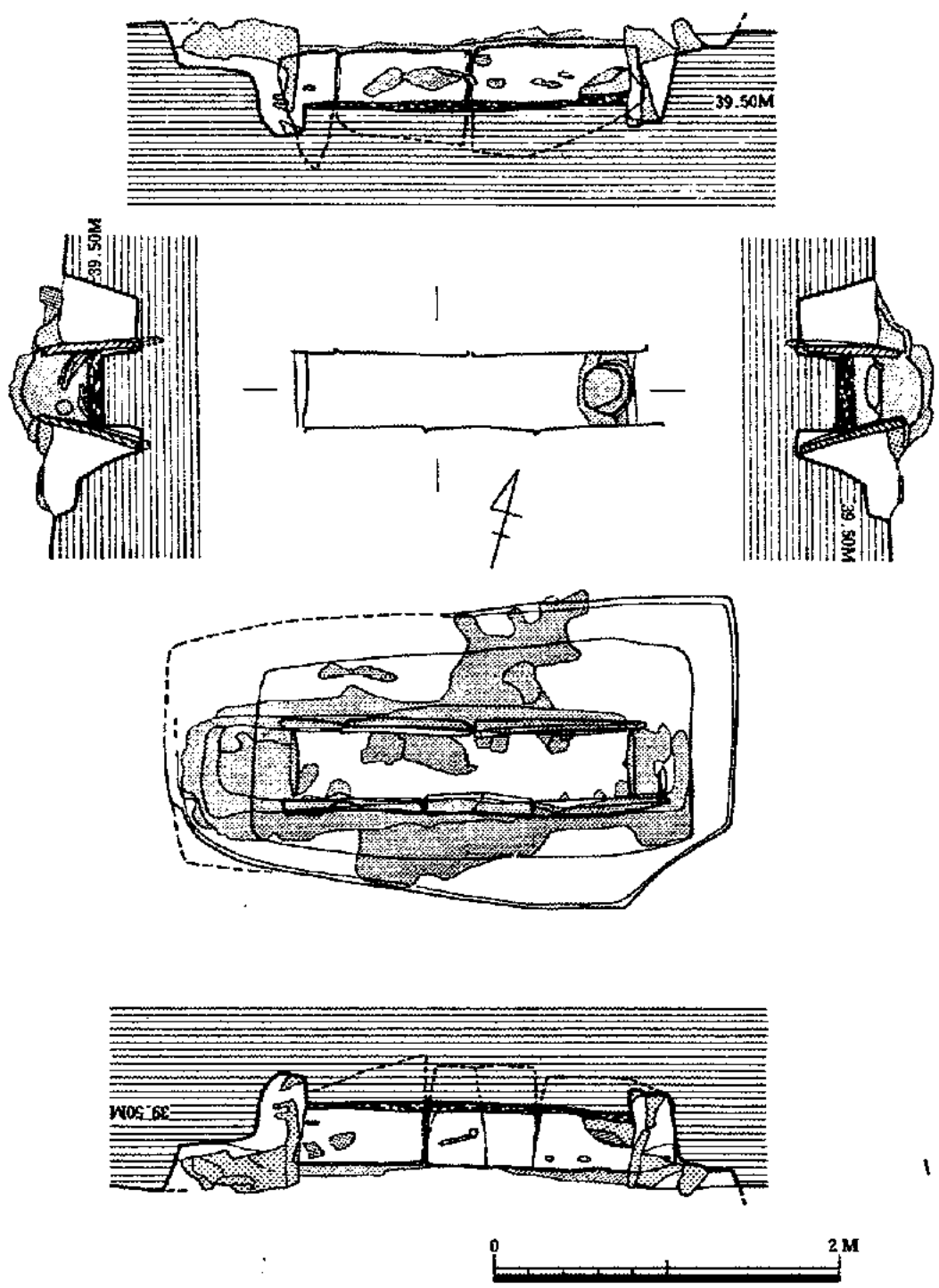
鉄剣が一口、東側小口板の外側部分に厚く盛られた粘土の直下に副葬されていた。柄の一部を欠くが、残存長15.2cm、刃部長12cm、同幅2.5cm、同厚さ4mmの法量を有する。鑢は認められず、断面形はレンズ状となる。



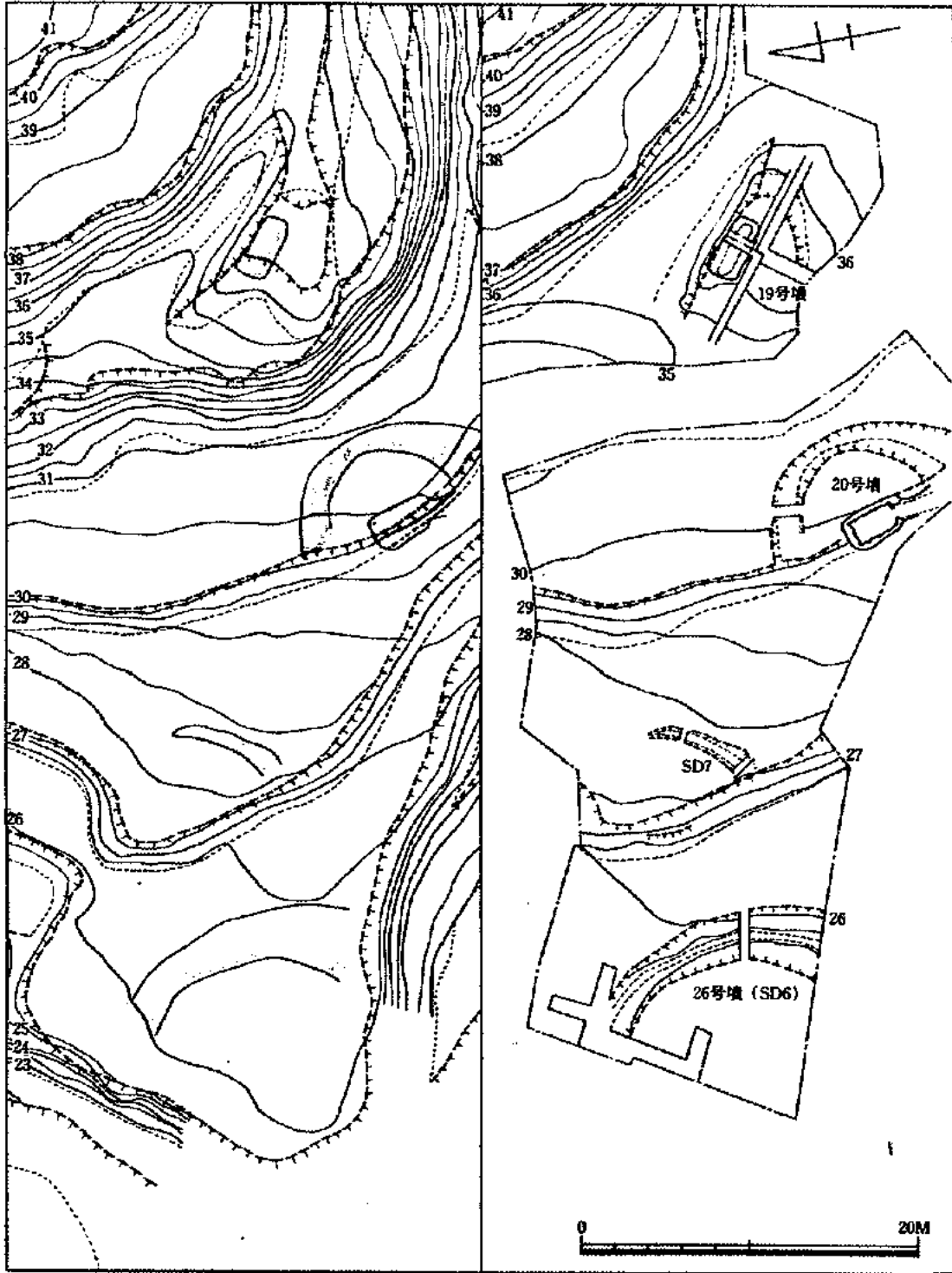
第47図
18号墳出土遺物
実測図 (1/3)

20) 19号墳

25号墳の占地する旧社殿の西側下方には幅6m、深さ2.5mの大規模な切り通しが南北にはしり、その西側に長さ4m程の高まりが孤立して残っていた。さらに西側は比高5mの崖となって急落し、とても古墳とは思えない状況であった。確認のために入れた試掘溝で主体部の粘土層を断ち割ってしまい、事



第48图 18号墳主体部実測図 (1/40)



第49图 19·20·26号墳地形測量图 (1/400)

に古墳と判明したものである。

墳丘 (第49・72図)

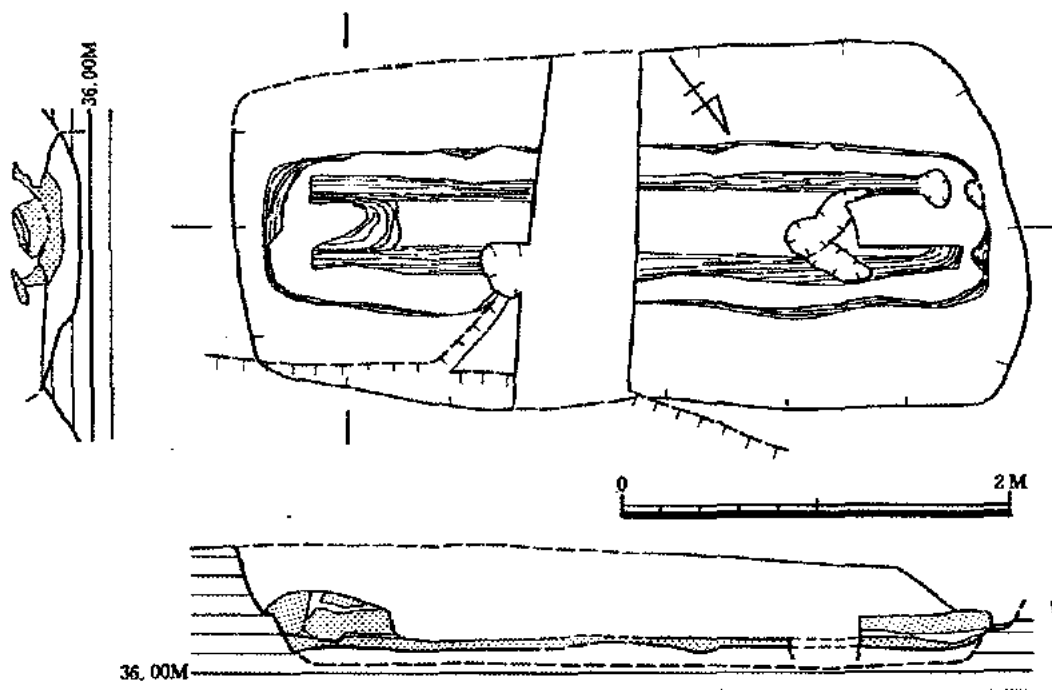
上記したような状況であったが、南北方向で4.3m、東西方向で4.2mの長さになり、最高で厚さ0.5mの盛土が残っていた。主体部は残存する墳丘の東端近くにあるが、西側崖下は弥生時代の遺構が広く分布していることから西側への墳丘の広がりにはさほどあったとは考えられず、径10m前後の墳丘規模を推定して大過なからう。

主体部 (図版34、第50図)

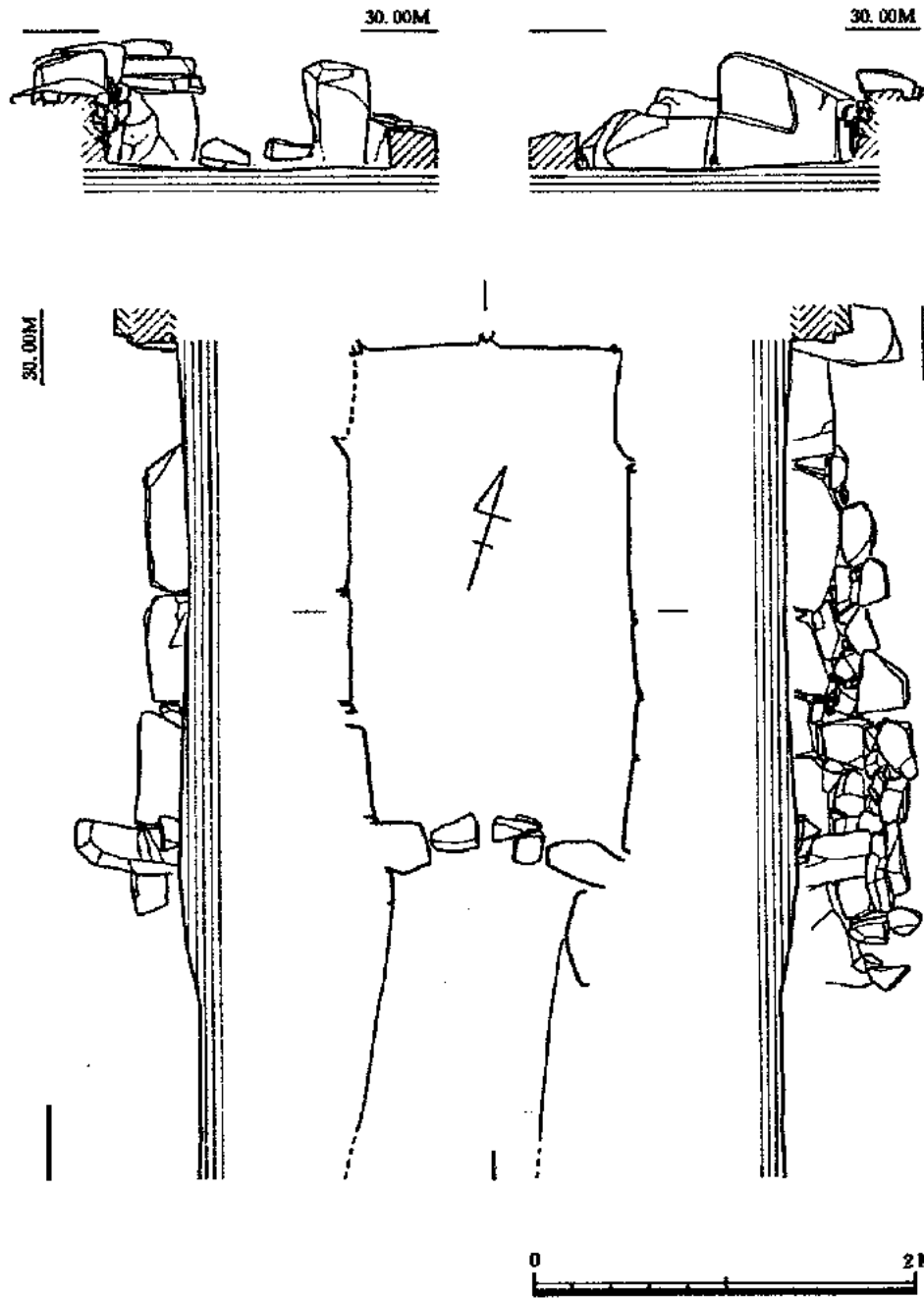
1.9×4.1mの規模の長方形プランの掘形内に設置された粘土槨を埋葬主体とする。

検出した段階では3.2m、幅0.3~0.4mの範囲を囲んで幅0.2m内外の粘土が長方形に廻っていた。内側に転落した埋土を除去すると割竹形木棺の棺床が現れるとともに小口部では内側に突出した粘土塊間に灰褐色土層を噛み、本来連続した塊でなかったことが判る。恐らく割竹形木棺の小口壁両端よりもかなり内側にあり、かつ、その外側に粘土を裏込めたことを示すものであろう。木棺は長さ3.3m、直径0.6mほどの規模を推定できる。

出土遺物はない。



第50図 19号墳主体部実測図 (1/40)



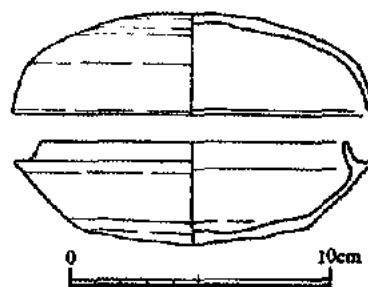
第51图 20号墳主体部実測図 (1/40)

21) 20号墳 (図版22・35、第49・71図)

19号墳の西側、崖下にある。表土掘削後に幅1~2mの周溝を確認したことで精査、検出した。周溝は石室中心から直径10mの規模で半円形を巡っている。

主体部 (図版35、第51図)

開鑿のために法面に位置し、奥壁及び左側壁は腰石を残すのみである。石室は1.3~1.5×2.6mの長方形プランを有する。袖石は小さいながらも立石を用い、その前面の貼石は一列を築くのみである。墓道は残りが悪く不確かなものとなった。



第52図 20号墳出土遺物実測図 (1/3)

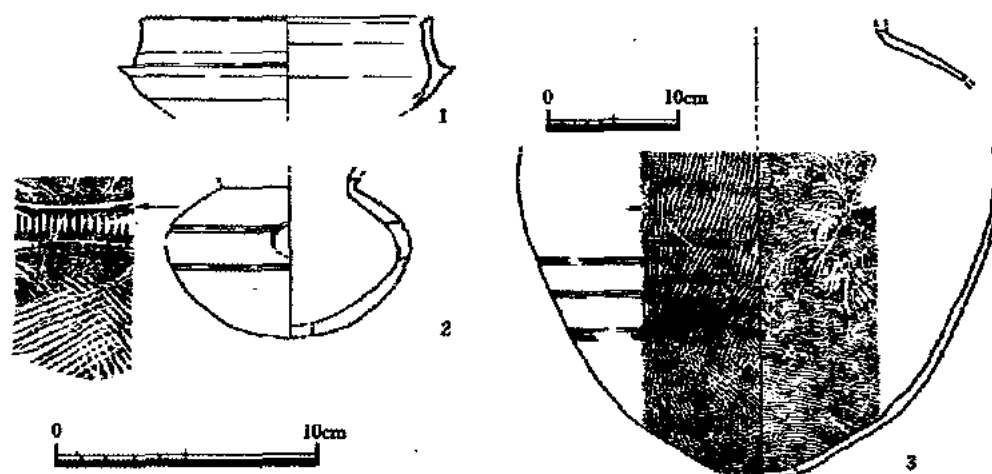
出土遺物 (図版46、第52図)

周溝より須恵器壺杯の1セット分を出土するが、重なって出土したものではない。1は完形に近く、口縁部にまだ面を残す。が、天井部へと丸みをもって移行し境界を限る明瞭な痕跡はない。2は約1/2の残片。口縁部は内彎しつつ短く立ち上がる。TK43型式に属すであろう。

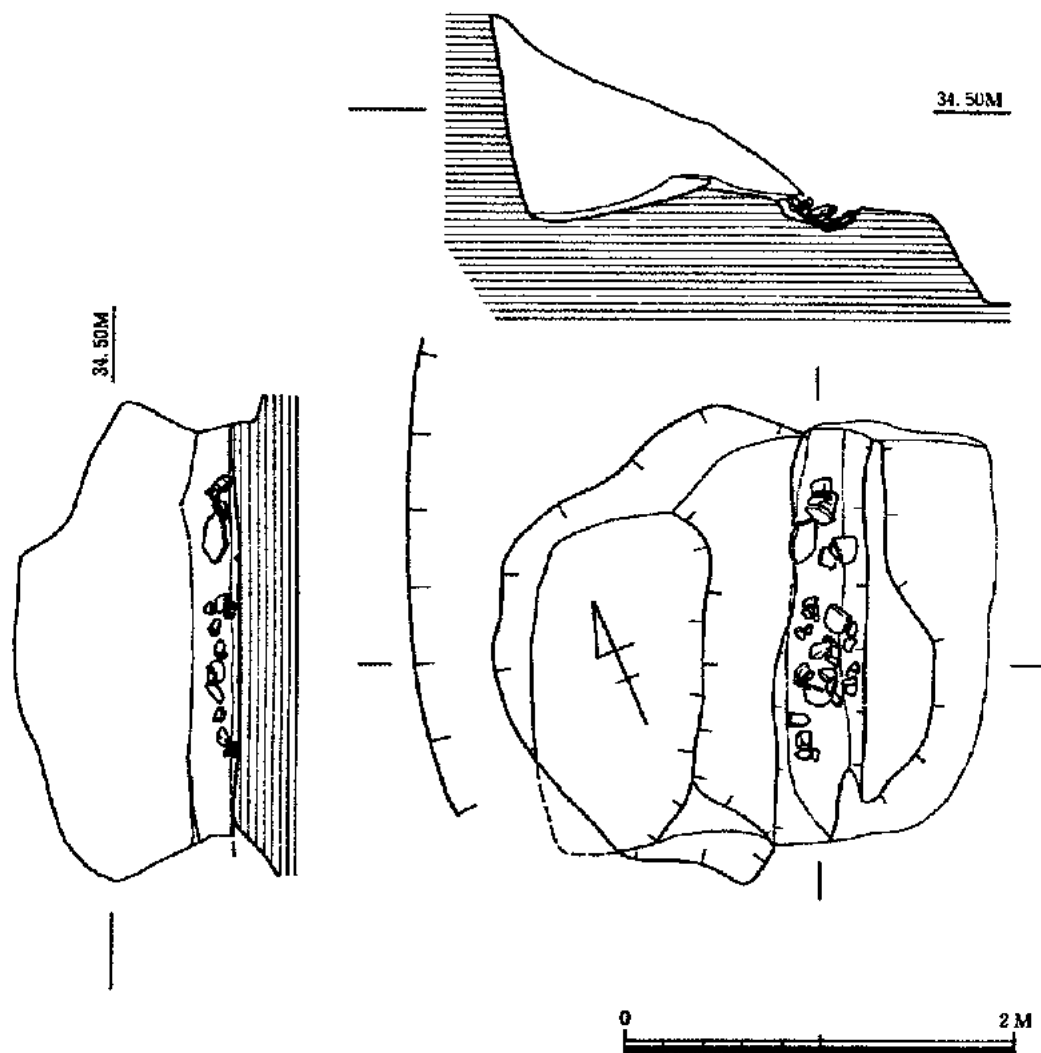
22) 21号墳 (第23・71図)

11号墳の東側下方、他の古墳と同様に法面中にある。周溝は幅1m、深さ0.4mほどで、石室中心から内側上端までの距離は2.5mに過ぎない小規模なものである。

主体部 (図版36、第54図)



第53図 21号墳出土遺物実測図 (1/3、1/6)



第54図 21号墳主体部実測図 (1/40)

掘形は最深部で1.1mを測り、周溝底との比高差は2.1mとなる。平面プランは長方形に近く、大型石材はまったく残っていない。長さ2.2m、幅0.4mの浅い溝があり中に小石が散乱していた。恐らく右側壁の抜取痕であろう。石室形態としては同一斜面に位置する他の古墳と同様の小規模な竪穴系横口式石室を想定できる。

出土遺物 (図版46、第53図)

周溝内から須恵器を出土している。1は杯身の小片。2は甕の残欠である。文様帯の上下を沈線で画し、その間に帯描き刺突文を配する。仕上げは丁寧である。3はかなりの残片を残す甕で、カキ目を単体で文様風に施す。

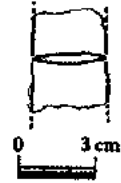
23) 22号墳 (図版22・23、第37図)

15号墳の北側段下、わずかな鞍部を留める地点にある。表土掘削後に幅2m、深さ0.3mほどの弧状溝を検出した。最高所に試掘溝を設定したが、盛土・主体部ともに検出できておらず、確証はないが地形的に見て間違いないと思われる。

一連の古墳のあり方から見て、埋葬主体は粘土槨・箱式石棺等の竪穴系の施設を想定できる。

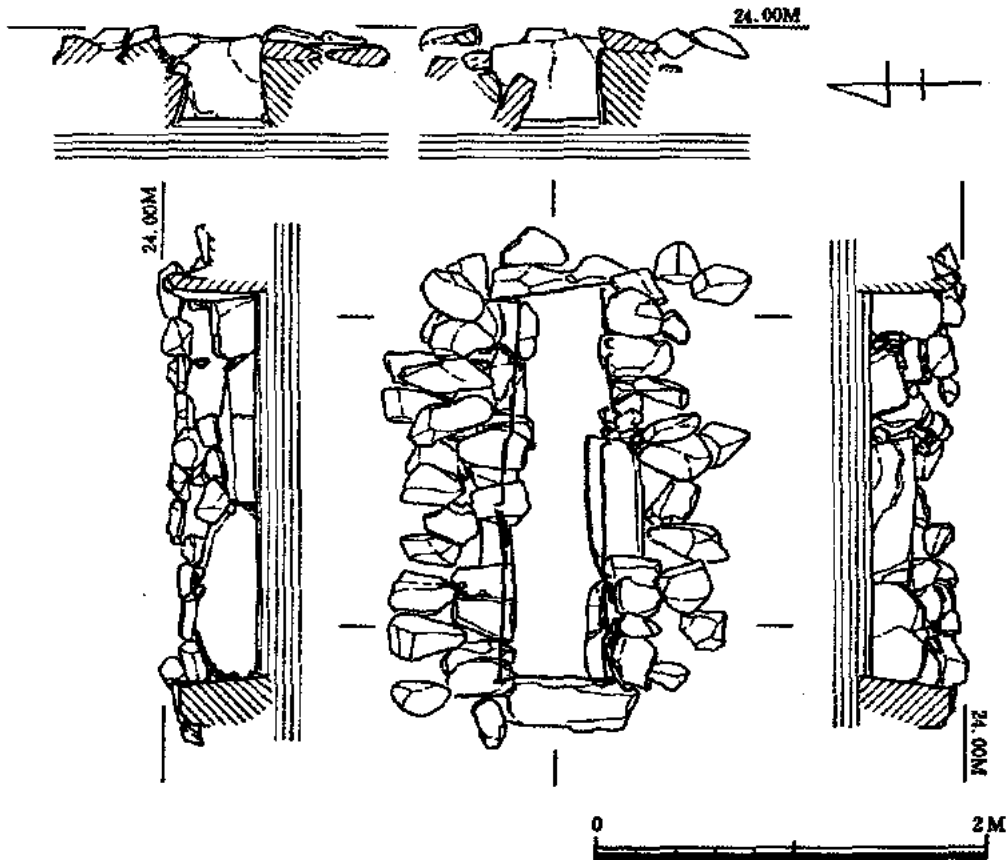
出土遺物 (第55図)

周溝内から出土した鉄剣である。残存長4cm、刃部幅3cmの小片。錆はなく、刃部は厚さ0.5cmのレンズ状となる。



第55図
22号墳出土遺物
実測図 (1/3)

24) 23号墳 (第69・72図)



第56図 23号墳主体部実測図 (1/40)

調査区最北端の畑地にある。調査区の境は比高数mの段落ちとなっているために諸般の状況を考慮して幅4～5mの間は表土を残していた。が、畑地の表土掘削および包含層を一部除去したところ、幅2.4m、深さ0.6mの周溝を検出したために主体部を想定できる部分を拡張して検出できた。盛土はまったく遺存していないが、周溝内径が10～11mの規模の円墳である。

主体部 (図版36、第56図)

天井石を失うものの比較的保存良好な壜穴式石室、と言っても所謂石棺系石室である。石室内法は0.4～0.5×2.0mの長方形プランで、残存する高さは0.5mを測るがそれは本来の高さに近いと思われる。頭位は幅広となる東側に求められる。

両小口は一枚石を立て据え、長側壁は腰石のみ立てて以上を横積みして築く。長側壁では控え積みを有するが、最上段を確認したのみである。石室床面に敷石の痕跡はない。

出土遺跡はない。

25) 24号墳

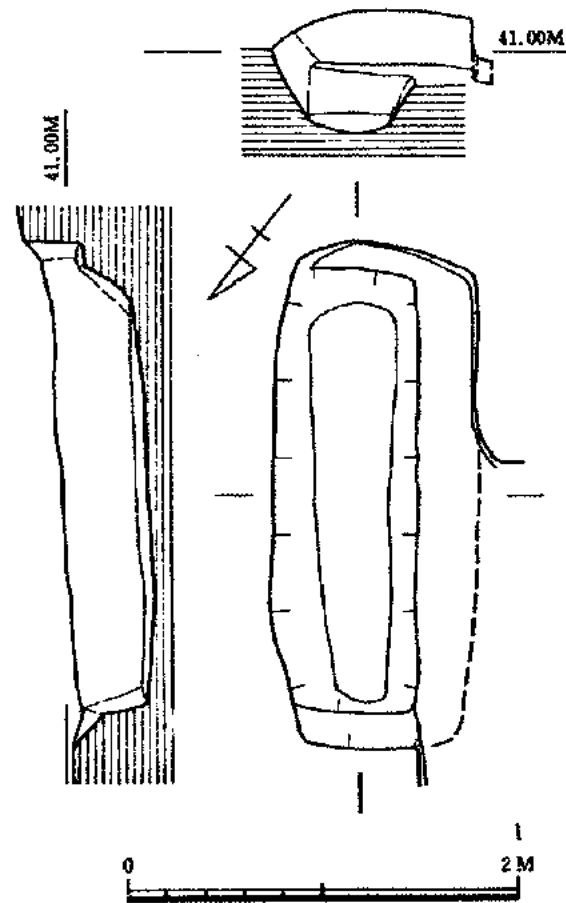
標高43m強と本遺跡中の最高所に位置する。調査前には社殿が存在し、その背面に弧状を呈する高まりが残っていた。社殿は平坦に削平した場所にあったことからこの古墳の主体部と弥生時代の遺構(土壌墓)とを同一面で検出した。そのために当初は土壌墓の一つとして登録していたが検討の結果改めた。

墳丘 (図版19・37、第37・72図)

社殿によって半ば以上を破壊されるが、南側背面から西側へかけては標高40.75mのコンター付近を傾斜変換線として、径15mの円墳状を呈していた。

わずかに残る高まりの土層を観察した結果、厚さ0.2mの盛土が残っており、その末端は主体部中心から約6mの距離であった。

一方、墳形の決め手となるのは主体部の周囲を長方形に巡る5条の溝状遺構である。中、SD9と呼称する南側の溝は、



第57図 24号墳主体部実測図 (1/40)

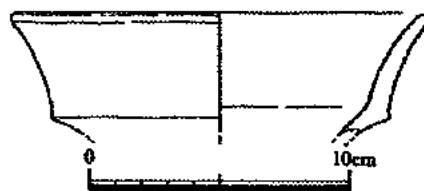
土層観察の結果では盛土下層にあり古墳に伴うものではない。そのさらに南側の溝（登録番号無し）は土層に表れて無く、発掘ミスによるものかも知れない。東辺の溝SD5は幅1.3m、深さ0.9mの直線的な溝で、古式土師器を出土していることから見てもこの古墳に伴うものとしてよからう。また、西側のSD4および北側崖落ち部分の溝状落ち込み（登録番号無し）は間に攪乱坑があって同一か否か判断できないが、溝底で土壌墓を検出していることやSD4の西側に接して2号壺棺墓があることなどから見て古墳に伴う可能性が強い。北側落ち込みは崖の肩にあたることからあるいは発掘の失敗によるものかも知れないが、地形的に見てSD4・SD5が古墳を尾根から分離する位置にあるのに対して、他の二辺は急落しているために区画する必要もないのであろう。以上のことから見てこの古墳は東西長12m、南北長10mの長方形墳と考えられる。なお、SD4は幅約2m、深さ0.4mの規模を持つ。

主体部（図版37、第57図）

南北を限る溝（SD5・SD1）のほぼ中央部にある。墓壙は本来二段掘りであったようだが、西半は失われていた。残存規模は1.0×2.6mで、下段のそれは0.7×2.3m、深さはそれぞれ0.3m、0.4mほどとなる。床面は南に高くなり、横断面で弧を描くことから割竹形木棺を想定できる。粘土等は検出していない。

出土遺物（第58図）

南辺の溝SD5からかなりの土器を出土したが復元しえなかったために口縁部のみを図示した。同一個体の体部もかなりが出土しており、古墳に伴うことは確実と思われる。この口縁部は1/2弱が遺存する。小さく開く二重口縁壺で、屈曲部はシャープな稜を有し、口端部は単純に終わる。胎土粗く、器表の風化も進んでいるが器肉まで非常に堅緻に焼け締まっている。



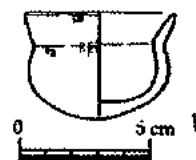
第58図 24号墳出土遺物実測図（1/3）

26) 25号墳（第23・72図）

11・15号墳の西側上方、尾根線上に位置し、鉄戈を出土した土壌墓SKIに近接する。墳丘はまったく遺存せず、これも当初は土壌墓の一つとして登録していた。しかし、周溝SD3と主体部の埋土が良く似ており、かつ他の土壌墓とは明らかに異なるものであったことなどから改めた。

周溝は北側にのみ掘削され、幅1.6m、深さ0.5mの規模で尾根線を直線的に断ち割っている。かつ、土壌墓SK29を切る。

主体部（図版39、第60図）

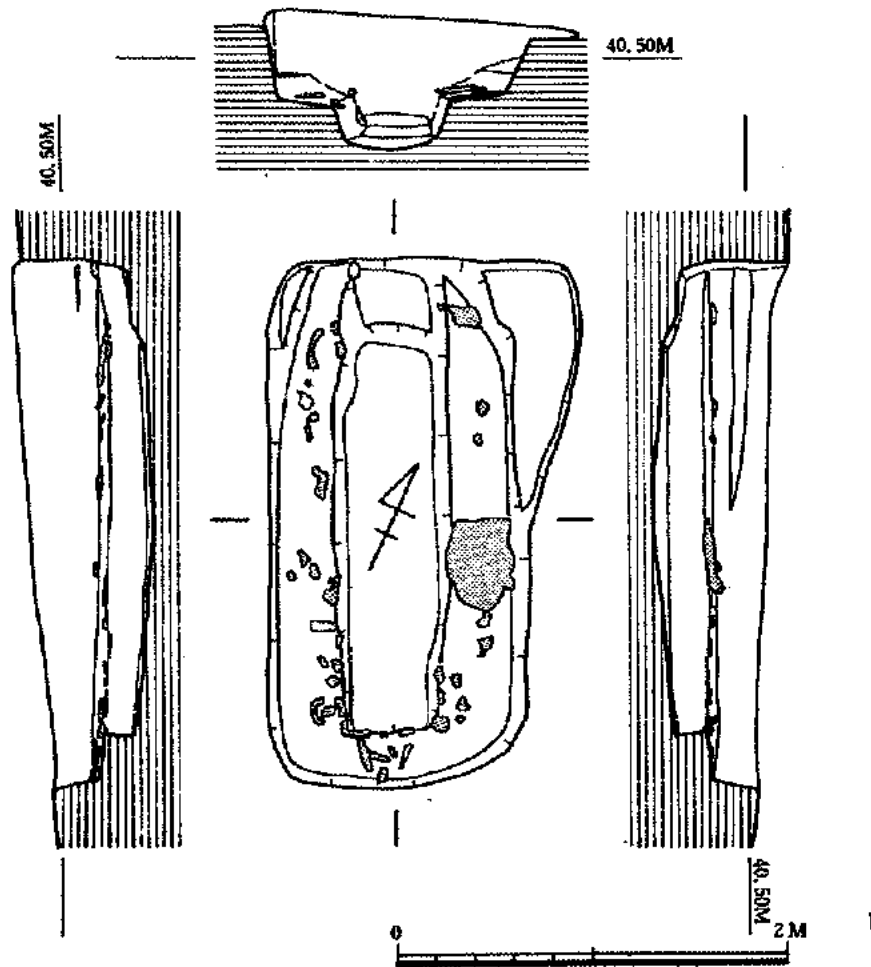


第59図 25号墳出土遺物実測図（1/3）

1.3×2.8mの長方形掘形を有し、二段掘り込みとなる。中断テラスには粘土小塊が秩序無く散乱しており、どのように使用していたものか理解に苦しむ。埋葬部は0.6×2.4mの平面規模で、深さは0.2mである。北側小口部分に地山削り出しの枕状遺構があり、床横断面は浅い円弧を描く。

出土遺物（図版46、第59図）

周溝中より出土したミニチュアの壺で、ほぼ1/2が残る。風化が著しく、調整痕等はまったく解らない。



第60図 25号墳主体部実測図 (1/40)

27) 26号墳 (図版22・35、第49・73図)

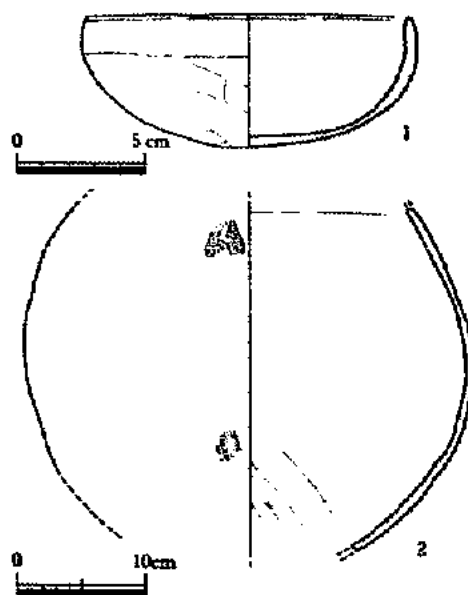
最高所にある24号墳から西へ延びる小支急の端部に位置し、その西は崖落ちとなって道路が通じているために残存部のすべてを発掘したものではない。

当初SD6と呼称した溝は幅3m、深さ0.7mの規模で弧状に廻り、その内径はほぼ10mを測る。

出土遺物 (図版46、第61図)

周溝内より若干の土師器を出土している。

1はほぼ全体が残存する椀で、器表が風化しており調整痕は外面の静止陥削り痕が確認できるのみである。2は大型の壺あるいは甕で体部の大部分が遺存するものの、口縁部を欠く。焼成が甘いために器表の磨滅が著しい。



第61図 26号墳出土遺物実測図 (1/3、1/6)

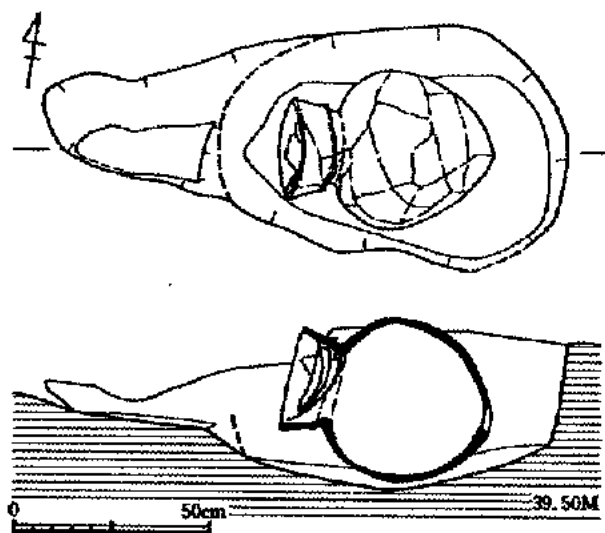
28) 1号壺棺墓 (図版33・46、第62・63図)

18号墳周溝内東端にあり、周溝発掘後に検出した。切り合い関係の有無は確認できていないが、状況から判断して18号墳に伴うとしてよからう。

周溝内にあったために掘形の一部を壊してしまっただが、平面径は0.6~0.9mの偏円形を呈し、もっとも深い部分で0.4mを測る。

構造は底部穿孔を行った二重口縁壺に土器片を用いて閉塞を行った単棺で、水平より若干上向きに据えている。

棺体 法量は口径約26cm、器高



第62図 1号壺棺墓検出状態実測図 (1/20)

52cmを測る。器肉は厚い。

口縁部は弱く外彎しつ小小さく外傾し、端部を外側下方へつまんで端面を形成する。頸部との屈曲部も下方へ小さく垂下し、頸部はC字形となる。

体部は張りの弱い倒卵形を呈し、底部中心に焼成後に行った径7～8cmほどの不整形の穿孔がある。

仕上げは全体に細かい刷毛目を多用しており、口縁部から頸部にかけての内面に粗い篋磨きを、そして体部内面中位と同外面下半では撫でを併用している。内面全体に黒色顔料を塗る。

閉塞 土師器壺の球形を呈する体部である。外面を刷毛目、内面を篋削りで仕上げる。外面には多くの煤が付着しており、日常使用土器を転用したものである。

29) 2号壺棺墓 (図版38・46、第64・65図)

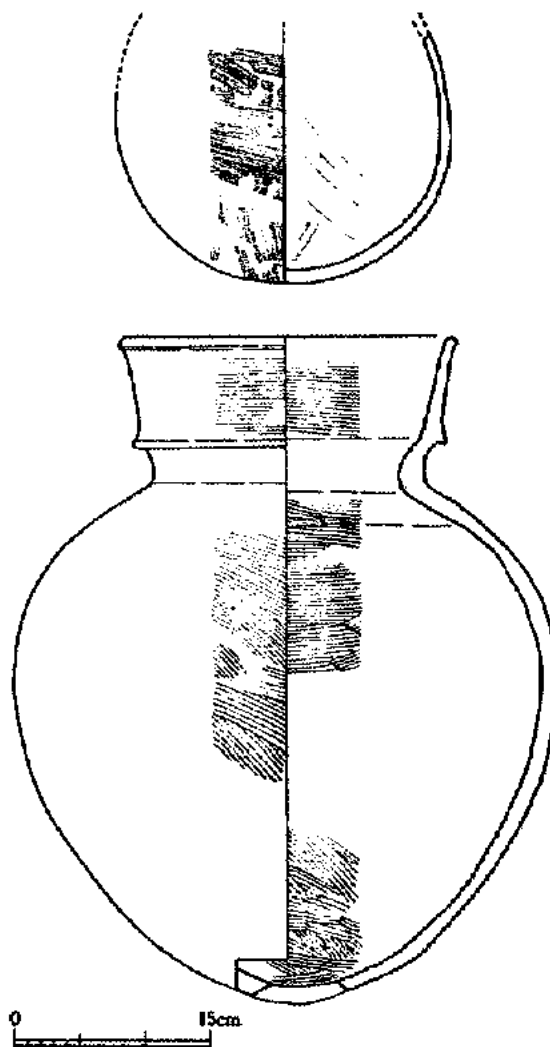
24号墳の北辺周溝の外側に接してあり、これも積極的な根拠を欠くものの24号墳に伴うものと理解している。

上端を表土掘削時に重機で壊してしまったが、掘形は0.5～0.7mの楕円形プランを呈し、深さは0.3mが遺存する。

棺体はほぼ45°の角度で据えられ、口縁部はすべて内外に転落していた。閉塞に供された壺形と思われる土師器も口縁部は出土できず、検出状況では棺体の上に正位置で被せた様を呈する。このままでは閉塞の用を果たせないのいかとも思われるが資料不足である。

棺体 表土直下にあったため上半の一部を壊してしまった。口縁部は内彎しつほぼ直立し、端部は面を持つ。頸部との屈曲部は稜線が走るのみで誇張はしていない。

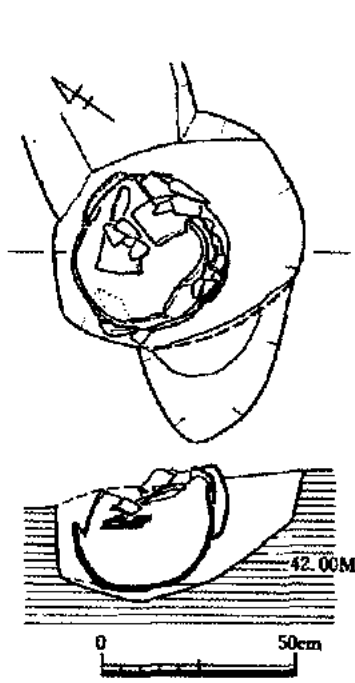
体部はその中位で強く張り、底部は突出気味で肉厚となる。



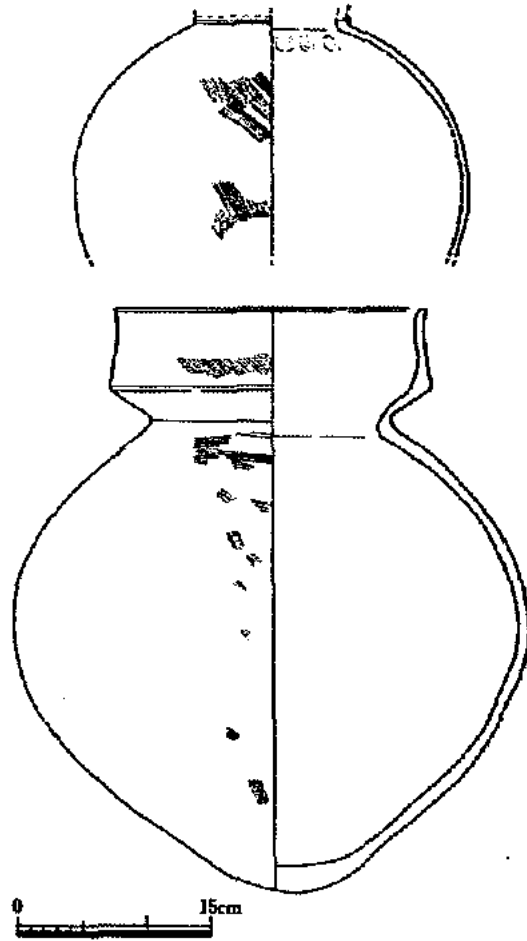
第63図 1号壺棺実測図 (1/6)

器表は全体に磨滅が著しく、わずかに残る刷毛目のはかには調整痕を確認できない。

閉塞 上記したように口縁部を欠き、球形胴の上半が残る。頸部との屈曲部には断面方形の貼り付け突帯が巡る。仕上げは外面を刷毛目、内面の大部分を篋削りで行い、同頸部直下には指頭圧痕が残る。



第64図 2号壺棺墓検出
状況実測図 (1/20)



第65図 2号壺棺実測図 (1/6)

30) 小結 (古墳の築造時期について)

ここでは各古墳の築造時期について考えてみたい。

まず、時期決定が容易な須恵器を出土した古墳を中心にまとめると以下のようになる。

TK23~TK47型式 (2号墳) 8号墳 (9号墳) (10号墳) 11号墳→ 12号墳 (13号墳) 21号墳	MT15型式 5号墳 ←(6号墳)	TK10型式 7号墳	TK43型式 (3号墳)→ ←(4号墳)→ 20号墳 (26号墳)→
---	-------------------------	---------------	--

この表では、破壊の著しい石室・墳丘の小規模な古墳を12・21号墳を参考にしてやや溯らせて考えている。

これを見て明らかのように古式の横穴式石室、つまり堅穴系横口式石室は遺跡の北側に深く入りこんだ小さな谷の周縁の斜面に位置し、時期が新しくなるにつれて遺跡の東西に広がる谷に面した支丘の斜面・尾根線上に移動している。2・8・9・12号墳等、堅穴系横口式石室の多くがきわめて小規模で、箱式石棺の大きさと同様である事はこの種の埋葬主体を受容した階層や背景を探る上で重要な意味を含んでいると考えられる。すなわち、こうした新来の埋葬施設はこの地の人々にとって当初は家族墓というような認識が無く、あくまでも箱式石棺と同様な個人墓として受け入れられたのであろう。この時期に築造された古墳数が短期間にもかかわらず多いこと、比較的閉鎖的な谷地形に位置すること、そして規模が小さいことはこの谷が集団墓というよりも一族の墓所として利用されていたと考えてよかろう。

時期が下ると古墳は拡散していき、本遺跡群のすべての尾根上に築造されているといっても過言ではない。しかし、古式の堅穴系横口式石室はこの調査区に限られており、そうした現象は古墳を築造できる階層の拡大を如実に示していると言える。

次に、横穴式石室導入以前の古墳についてその築造年代について考えてみたい。土器あるいはまとまった副葬品を出土した古墳は以下の通りである。

17号墳	埴輪・鉄製農具一式
18号墳	鉄剣・1号壺棺
24号墳	土師器・2号壺棺
25号墳	土師器小型壺

ただし、15号墳地山上からまとまって出土した土器群についてはとても古墳に伴うとは考えられず、ここでは除外している。

17号墳出土の鉄器群については従来の編年観で5世紀中葉前後(註3)に比定されていたものである。

また、この古墳と同様な木棺墓は現在までに隣接する柏屋郡古賀町で集中して発見・調査されており、副葬品はこの17号墳と同様に堅櫛・鉄製農具・若干の武器を主体とする特色あるものである(註4)。従来の調査例をみても上記の編年観に大きく抵触する例は無く、妥当なところと言えよう。今回調査を行った古墳群のなかで一つの標識的なものとする。

24号墳の周溝(厳密には区画溝と呼ぶべきであろうか)脇から出土した壺棺は、体部の張り強さ、底部の尖底の度合、二重口縁部の形態など18号墳周溝内出土の壺棺に比して明らかに先出的な要素を持つ。細かな時期比定は困難であるが、「布留式」の範疇に属することは間違いないであろう。

25号墳出土の小型壺はいわゆる小型丸底壺ではなく別の系譜に連なるものと思われる。

以上の4基の古墳のうち、25号墳を除く3基については以下のように編年できる。

24号墳 ⇨ 18号墳 ⇨ 17号墳

すなわち、丘陵の高所から順次占地・築造されていったと考えられるのである。その場合、15号墳は18・17号墳の間に、23号墳は17号墳の次に位置付けることができ、小地域の首長の奥津城として連綿と継続して墓域に選定されたといえる。

主尾根からはずれる古墳のうち、19号墳は埋葬主体に15号墳と同じ粘土槨を採用していることから関連づけられる。同様に16号墳は主体部を共通する14号墳、あるいは堅櫛を出土した17号墳との関連が考えられる。ここで問題となるのは14号墳の存在である。盛土の規模も10mと他の首長墓とした古墳と遜色なく、周溝・主体部の規模も大きいことから16・19号墳のような傍系的な性格を想定するのは難しい。一連の首長墓の系譜に組み込むならば17号墳に相前後するところとできる。

この相対編年と17号墳の推定年代を踏まえて作ったのが次表である。

350	400	450	500年
← (24号墳)	(18号墳)	(15号墳)	17号墳 ← (23号墳)
← (25号墳)		← (14号墳)	壺穴系横口式石室
	(19号墳)	(16号墳)	

一連の首長墓系列とした場合に問題となるのは世代間の古墳築造の年代的な開きである。福岡県内における古墳出土人骨のうち、没年の推定された350余例(註5)について大まかに計算してみた。結果は性別を問わず成年(20-39歳)が最も多く全体の50%弱を占め、熟年(40

～59歳)が男女ともにそれに次ぎ、約30%の比率となる。この数値は単体・複数埋葬の別、年代・主体部構造などを一切考慮せずに計算したものであるが、当時の被葬者の年齢つまり寿命の平均的な数値を表していると考えてよからう。これをさらに単純に計算するとほぼ40歳が当時の平均的な寿命とできる。また、大宝2(702)年の豊前国戸籍を分析した佐田茂氏は当時の平均的な結婚年齢を25歳前後と推定されている(註6)。乳幼児の死亡率が高かったであろう事をも考慮するならばもう少し若かったとも考えられる。首長権が世襲されるとし、かりに20才で子供をもうけ、40歳で没する事態が続けば20年毎に造墓を行うこととなる。先の表で配列した年代と比較すればやや短いものとなるが、大きく外れるものではない。

ただ、石棺系壜穴式石室を埋葬主体とする23号墳を5世紀後半に位置づけることには抵抗があるが、「後葉」・「後半」という言葉には30数年あるいは50年の時間幅を有しているということを強調して上表のままにしておく。24号墳の上限も同様に理解していただきたい(註7)。

註

註1. 田辺昭三「須恵器大成」、1981

註2. 「九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成」(『日本民族・文化の生成』、1988)

註3. 都出比呂志「農具鉄器化の二つの時期」(『考古学研究』13-3、1967)

註4. 福岡県教育委員会「川原塚山古墳群の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化調査報告』4、1974)

同 「千鳥古墳群Ⅱ」(『福岡県文化財調査報告書』第75集、1987)

古賀町教育委員会「浜山・千鳥遺跡」(『古賀町文化財調査報告書』第5集、1985)

同 「南原古墳群」(『古賀町文化財調査報告書』第8集、1989)等

註5. 註2文献に所収された資料を用いた。

註6. 佐田茂「豊前国戸籍にみえる家族状況」(『竹並遺跡』、1979)

註7. 福岡県内の調査例では、5世紀後葉に下る箱式石棺・壜穴式石室を中心主体とする古墳はごく乏しいと考えており、23号墳の年代は5世紀中葉あるいはやや遅る頃と考えている。

図のような配列になったのは都出氏の研究に忠実にあてはめたためである。しかし、近年ではおおかたの研究者が須恵器の初現を従来より古くするようになっており、それに従えば本遺跡の壜穴系溝口式石室の出現も若干遅らせて考えることができ、上記の編年観との空隙も狭まる。

4. その他の遺構

調査時には溝状遺構としてSD1～SD9を登録した。それら以外にも無登録の遺構が若干あるが、出土遺物もなく、遺構としてもさほどの重要性を認めなかったことから記録を怠っている。また、SD3は25号墳の、SD4・5は24号墳、SD6は26号墳の周溝と認定したためにここではそれら以外の溝状遺構・道路状遺構について記述する。

1) 溝状遺構SD1 (第23・72図)

8号墳の北にあり、その周溝と切り合うものの先後関係は確認できていない。幅2m、深さ0.7m、長さ6mほどの規模を有する。埋土は最上層に炭混じりの灰黒色土が入るほかに顕著な土層を含んでいない。また埋積状況は北から流れこんだ様を呈している。

出土遺物に黒色土器あるいは瓦器の高台付き底部・土師器皿の小片がある。

2) 溝状遺構SD2 (第23図)

SD1の北6mの地点にあり、狭くなった尾根を横切る格好となる。幅2m、長さ6mで深さ0.5mの規模をもつ。埋土の状況は記録できていない。

出土遺物はない。

3) 溝状遺構SD7 (第49図)

20号墳と26号墳の間にある小規模な弧状溝である。その西側を大きく削平されるために確認できないが、古墳であった可能性は大と考えられる。

出土遺物はない。

4) 溝状遺構SD8 (第37図)

18号墳の西側段下、15号墳の南に位置するこれも小規模な弧状溝で、西側を大きく削られている。性格は不明と言わざるを得ない。

出土遺物はない。

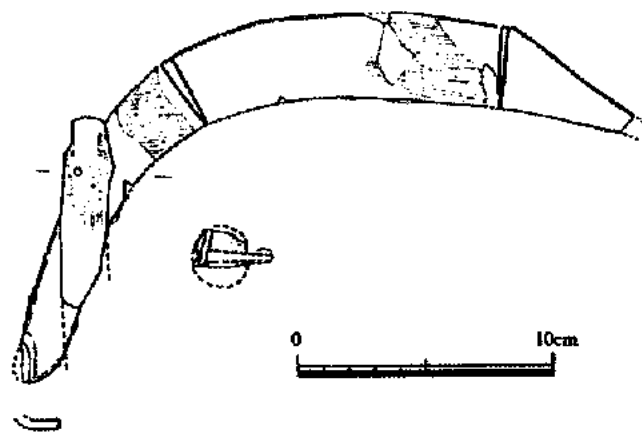
5) 溝状遺構SD9 (第37図)

24号墳の南にある幅0.6～1.3m、長さ8mの直線的な溝で、深さの記録を失念しているが最高で0.4mをやや越える浅いものである。一部で段となっており、あるいは二条が重なっているのかも知れない。そうすれば土層観察で24号墳の下層にあると判断したことと後述する鉄鎌の出土から推される年代観との齟齬は解消される。

出土遺物(図版39・46、第66図)

第37図に示した地点より鉄鎌が出土したのみである。

残存長31cmを削り、大きく彎曲する。切先は長く、鋭く尖るようだが先端を欠損している。また基部は柄の固定化を図って小さく折り曲げているが、ここも欠く。図のように柄の木質が一部に遺存し、目釘孔も確認できるが目釘自体はない。刃部の一部に木質が付着しており、鞘のようなものに納めていたのかも知れない。



第66図 溝状遺構SD9出土遺物実測図(1/3)

6) 道路状遺構SF1(第37・72図)

16・22号墳と15・17号墳との間は浅い谷状地形となっており、ことに北端の22・17号墳の間には幅8m、長さ13mにわたる黒色土の堆積が見られ、中に多くの弥生土器を含んでいることからその形成時期が知られる。それはさておいてこの谷状地形を利用して最大幅約8m、深さ2mの掘削をほぼ50mの長さにわたって掘削している。南端は18号墳の載る高所の西麓を巡り、全体としてはS字状に蛇行しつつ最高所である旧社殿跡、24号墳に向かう格好となる。この遺構の性格を測りかねていたが、床面に粘土が貼られていたと考えられることから道路と理解している。粘土は床面前体を覆うというものではないが、ことに15号墳の東側部分で著しく、床面中央部には連続して遺存していた。ただしその部分の粘土は床面より若干浮いており、土層図を示した地点のように床面に密着していなかった。

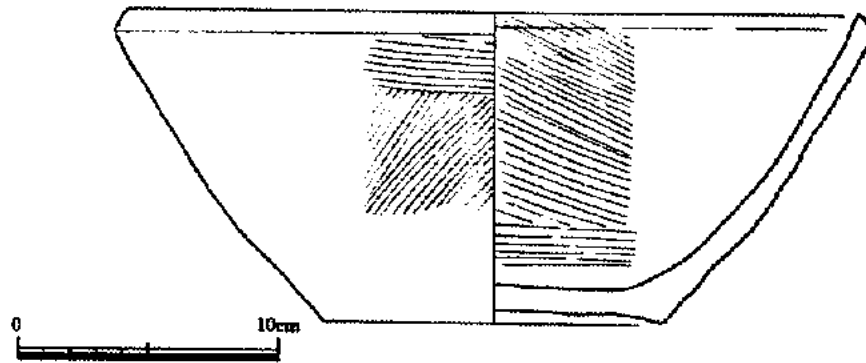
この道路状遺構を掘削し、粘土の採掘・運搬等の労力はかなりのものであったろう。

出土遺物(図版46、第67図)

図は瓦質の摺鉢で、ほぼ2/3が残る。体部内外面に刷毛目の使用が著しいが、内面底部付近では使用によって磨滅している。また、底部外面には板材の圧痕が観察できる。他に褐釉陶器壺小片などが出土している。

周辺に弥生時代の遺構が多くあるために弥生土器の若干も出土しているが、その他の時期の遺物はまったく見られなかった。したがってこの遺構の埋没時期をそこに求めることは妥当であると考えられる。遺物が乏しいことは使用時に徐々に埋没していったというのではなく、すっか

り廃棄された後に埋没したことを示しているであろう。



第67図 道路状遺構SF1出土遺物実測図(1/3)

7) 小 結

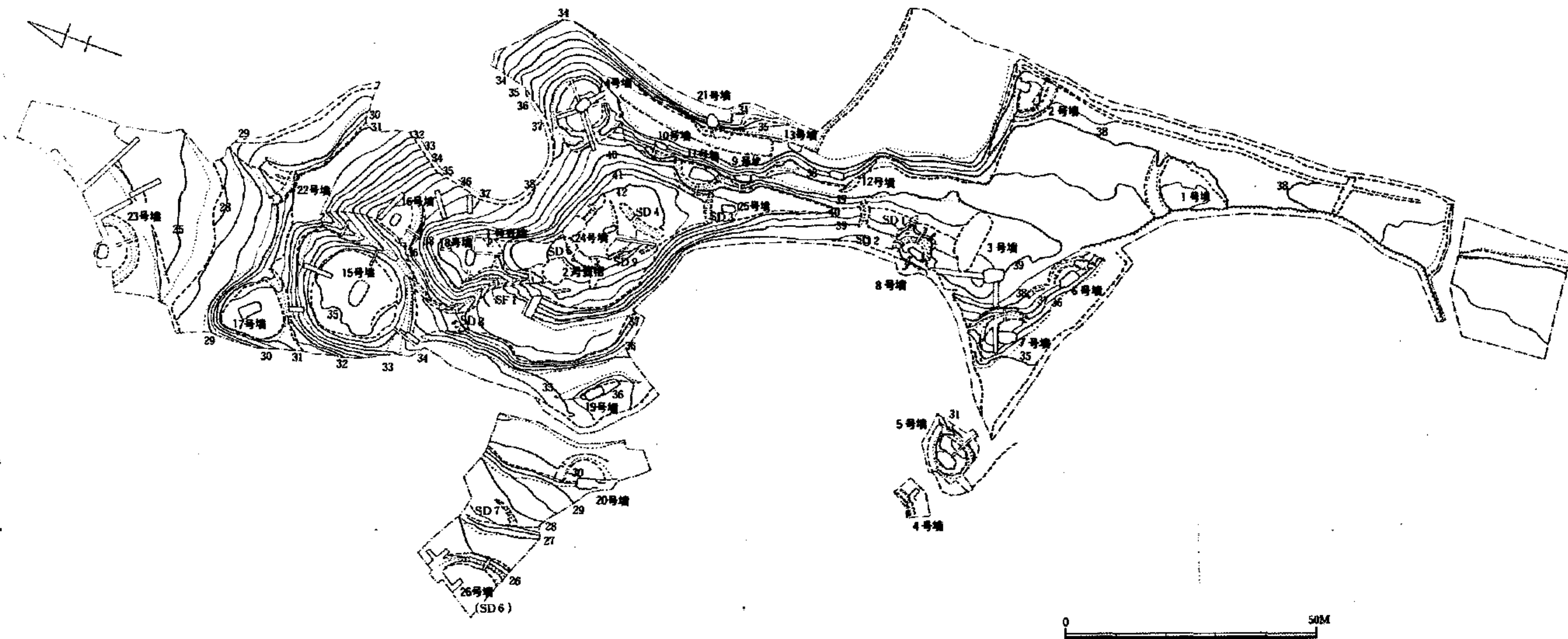
以上、溝状遺構及び道路状遺構について記述してきたが、調査の不備もあって必ずしも十分な成果をあげ得たとは言えない状況である。そのなかで若干の思いつきを述べてみたい。

まず、道路状遺構SF1であるが、出土遺物は乏しいものの瓦質の摺鉢はこの遺構の廃止の時期に関する有力な資料である。この摺鉢は7号墳出土例に非常によく似ておりほぼ同時期の所産と考えられ、13世紀中葉に比定できる(註8)。ここではSF1と7号墳の再利用時がほぼ同時であることが重要である。6号墳も含めて当遺跡では古墳の再利用を示す良好な資料が検出された。従来においても古墳盗掘の一つのピークが中世にあったということは該期の土器の出土例が多い現象からよくいわれてきたことであるが、中には本例のように再利用を行った場合も少なくないであろう。

道路状遺構SF1は古墳の合間を縫って本丘陵の最高所である。24号墳の麓まで続くが、24号墳の所在する地点は住居等の構造物を設置するには面積が狭く、またそのような痕跡を示す遺構・遺物も検出していない。したがってSF1はさらに南にある墓所を目的地の一つとしていたと思われる。再利用を確認・推測させる3・6・7号墳のみを意識したにしてはSF1の掘削工事は徒勞にも見えるが、古墳自体はさらに南に数十基が存在しておりそれらをも射程にに入れて掘削したとすればあながち徒勞とも言えない。

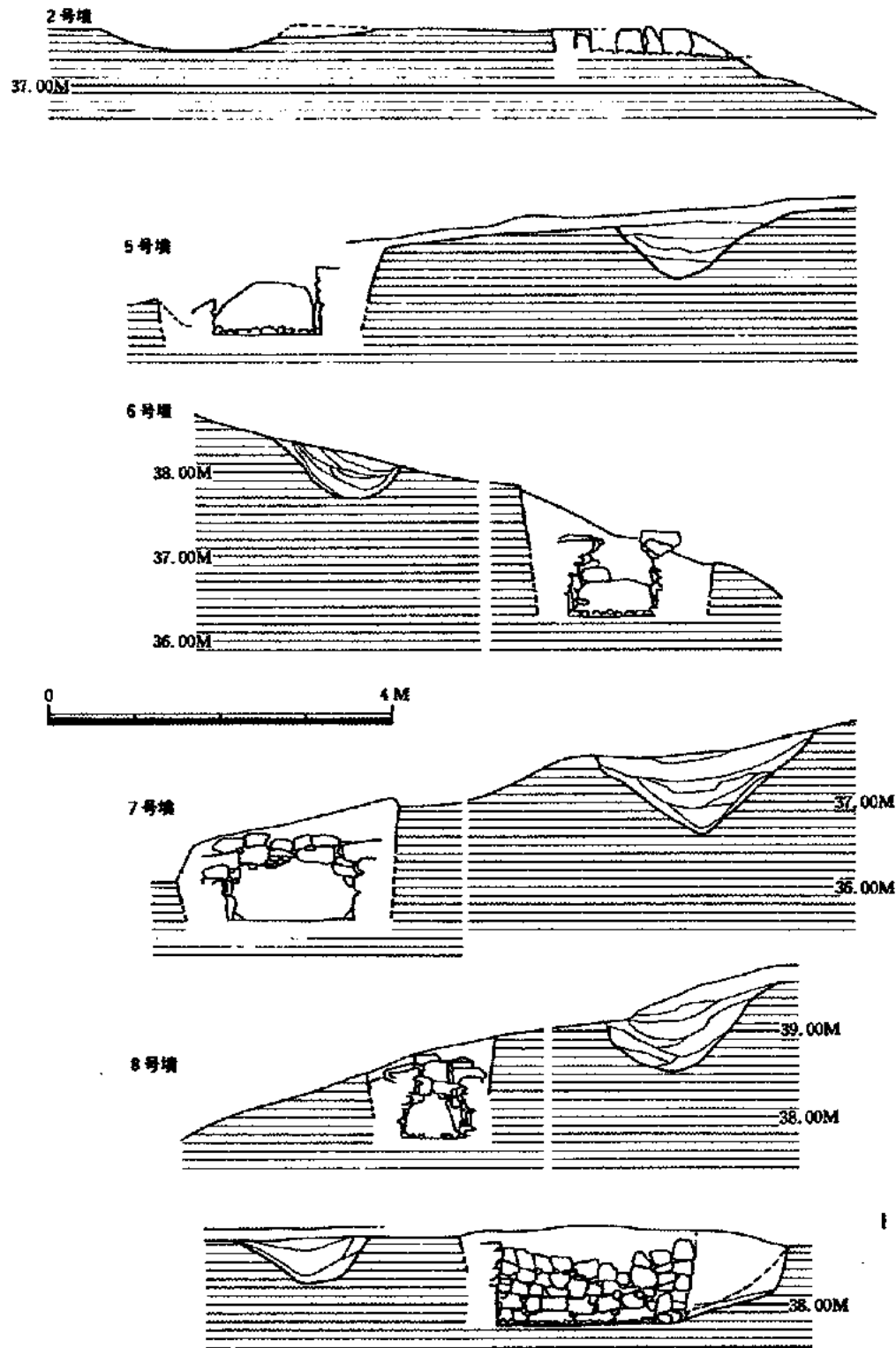
以上の推測が成り立つならばやはり中世に埋没したと思われる溝状遺構SD1も関連付けて考えることができる。SD1は瘦せた尾根線を断ち切るように掘削されており、区画としての性格を窺え、墓所を隔てていたものであろう。SD2も同様であったかも知れない。

註8. 横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」(『九州歴史資料館研究編集』4、1978)

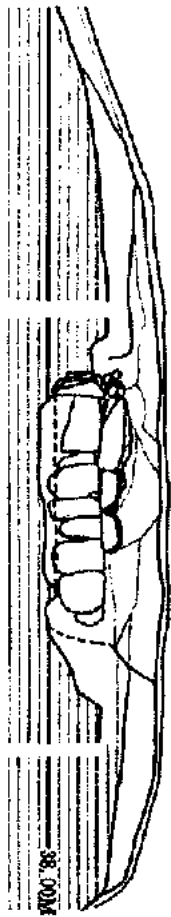
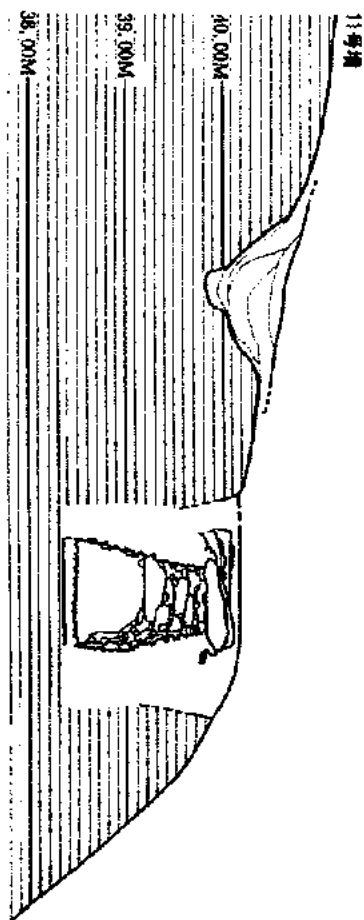
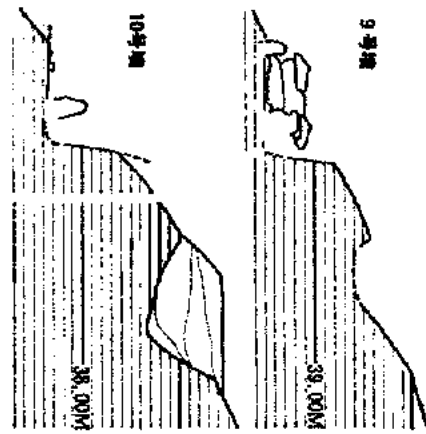


第58圖 富地原梅木遺跡古墳配置圖 (1/900)

— 3 —
— 3 —

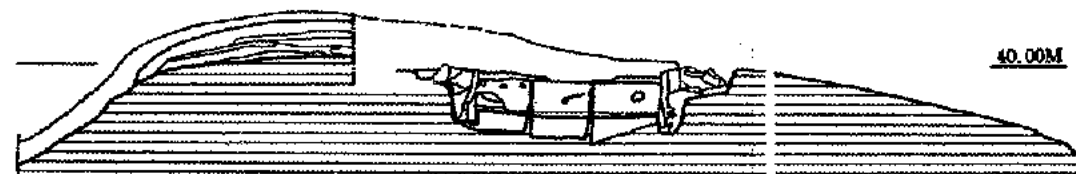
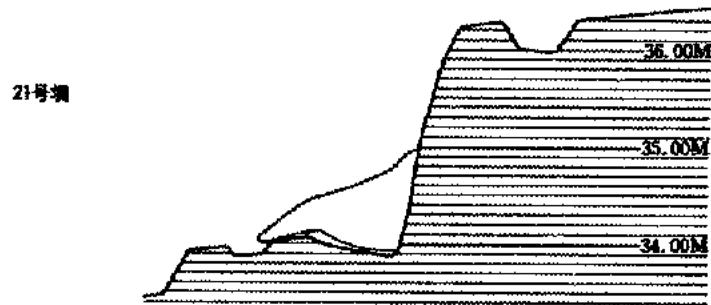
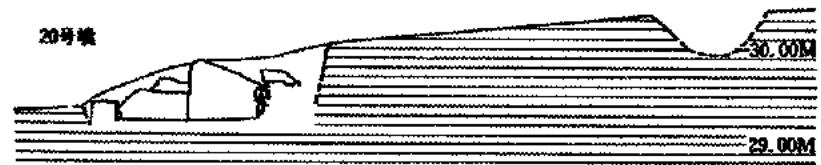
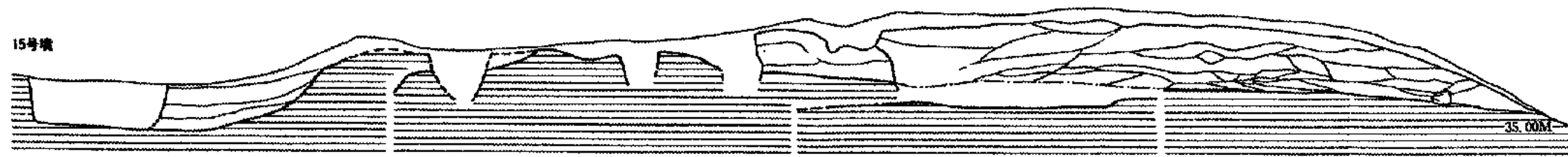


第69图 2·5-8号墳土層図 (1/80)

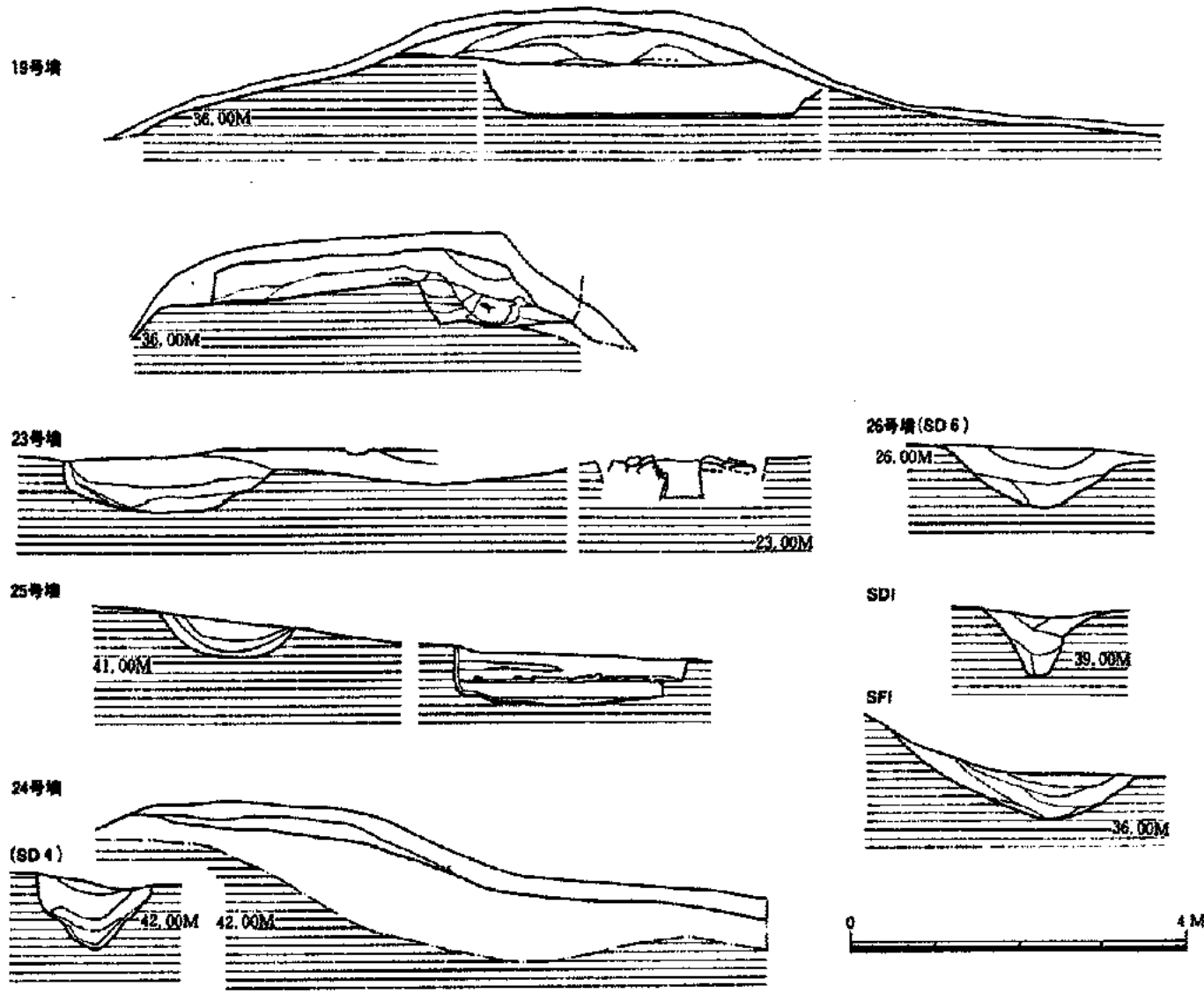


第70圖 9~11・14号墳土層圖 (1/80)

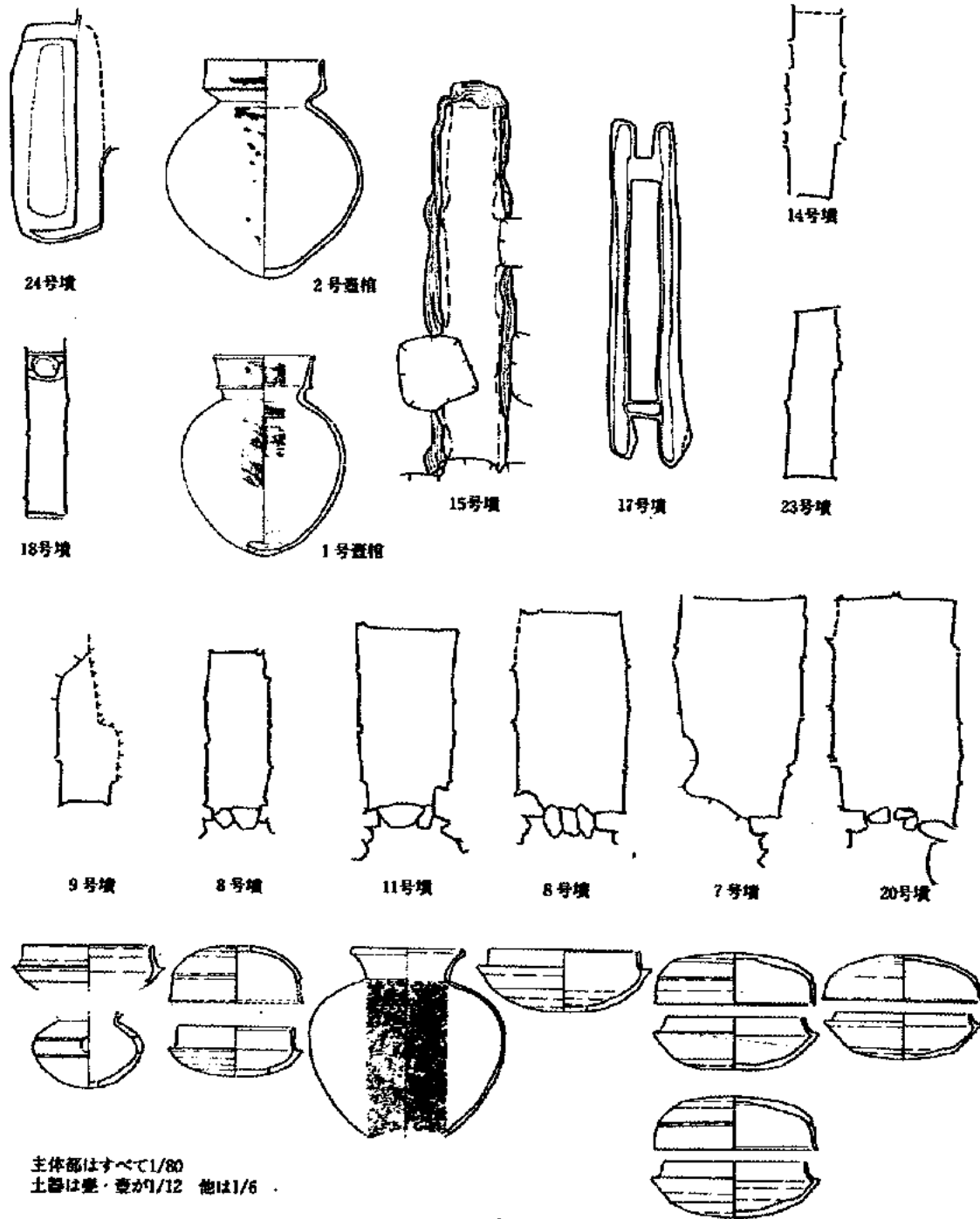




第71圖 15-18・20・21号墳土層図 (1/80)



第72圖 19・23-26号墳・SD1・SF1土層図 (1/80)



主体部はすべて1/80
土器は壺・甕が1/12 他は1/6

第73図 富地原梅木遺跡主要古墳主体部一覽 (1/80)

圖 版



1. 調査区全景
(南上空より)



2. 調査区全景
(北上空より)

図版 2



1. 調査区遠景 (南より)



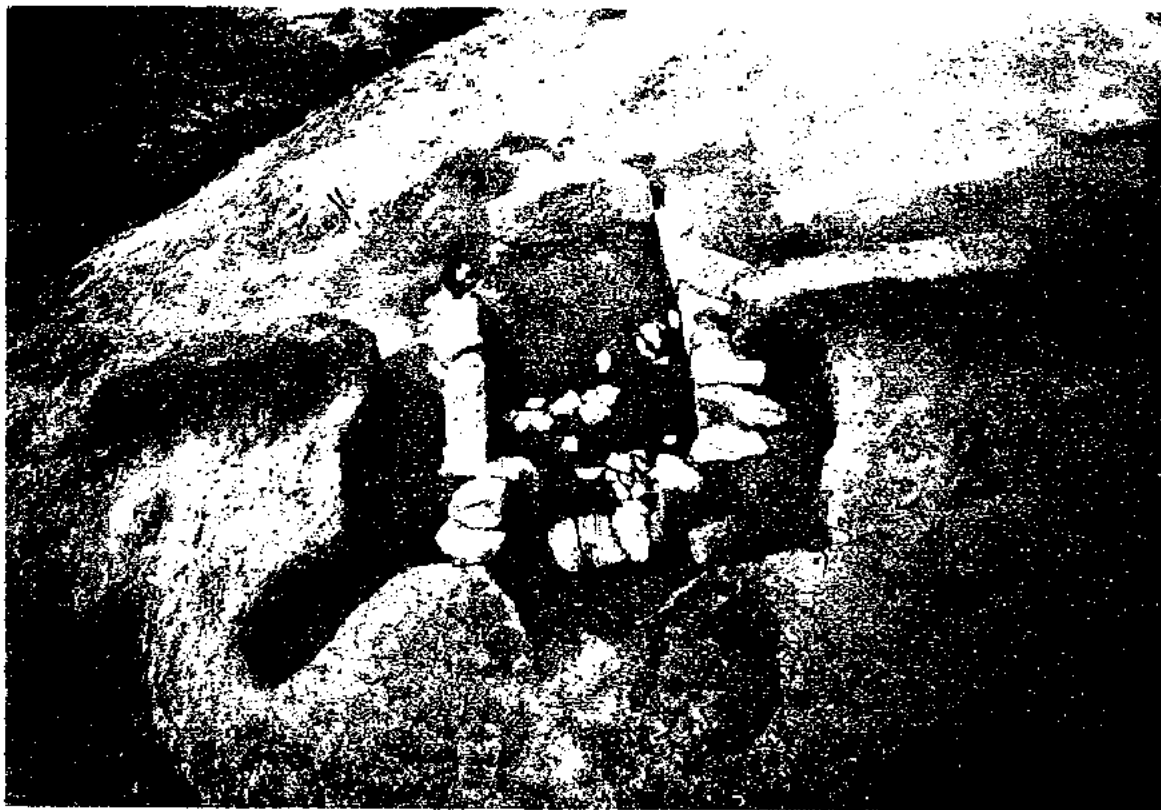
2. 調査区遠景 (西より)



1. 2号墳主体部（北より）



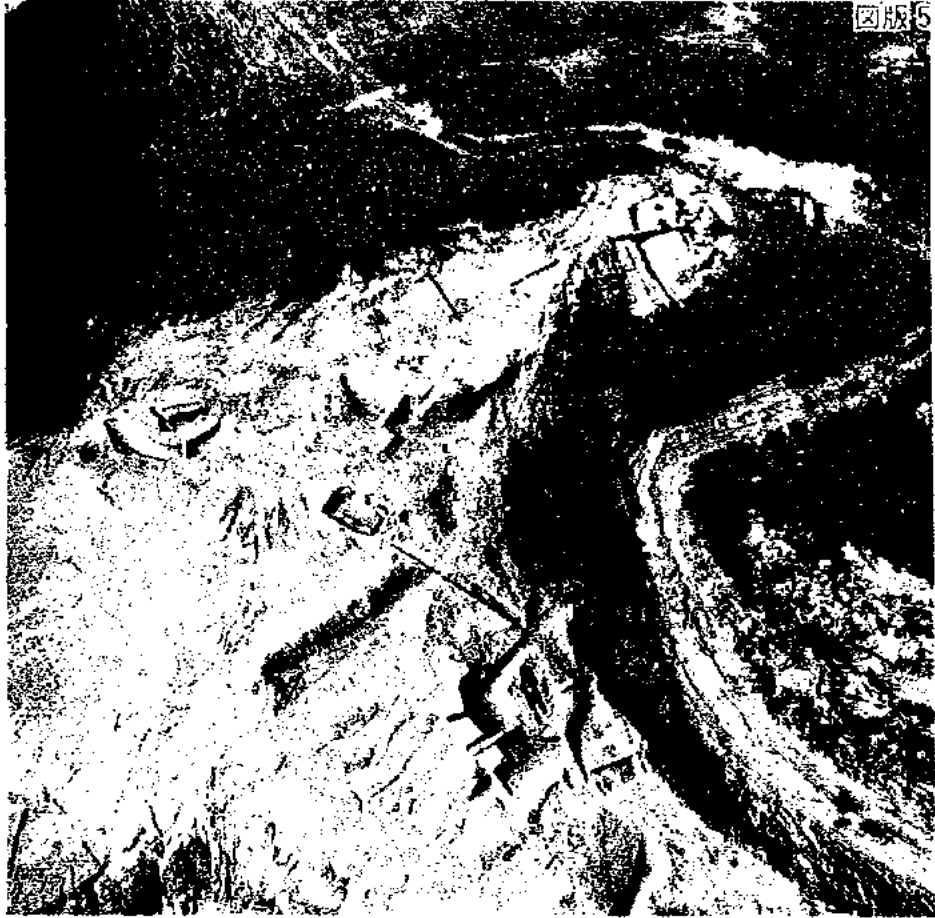
2. 3号墳主体部（南より）



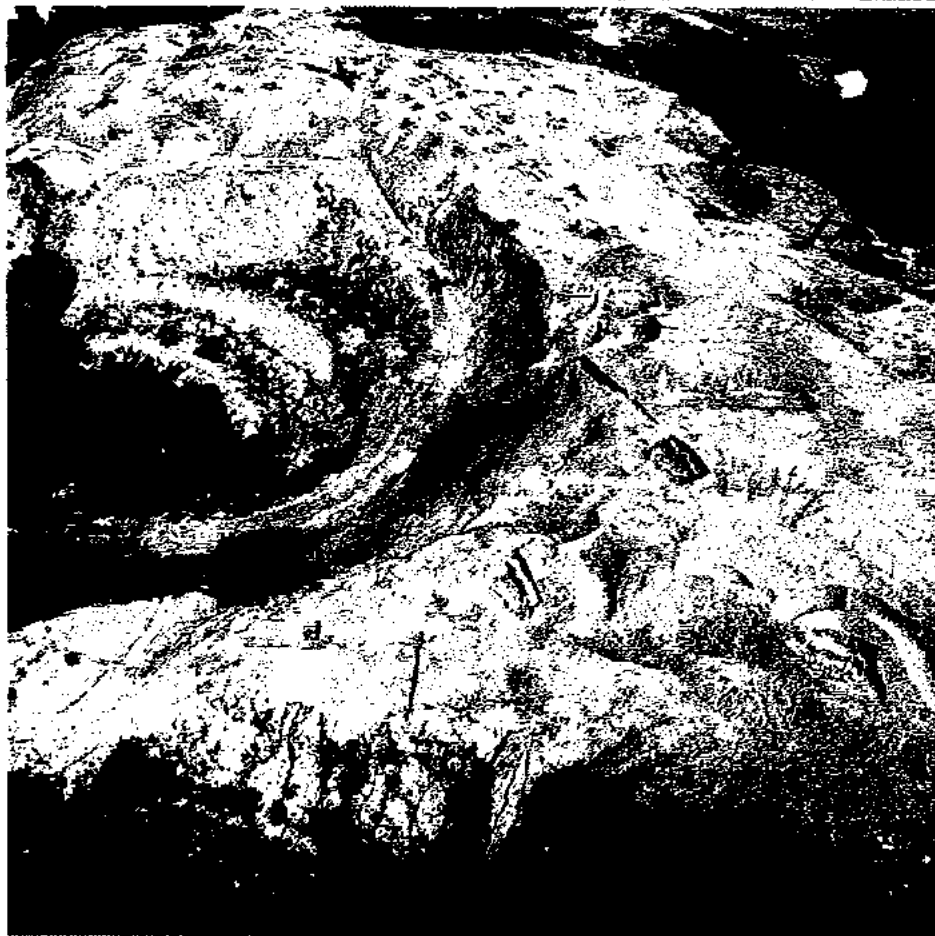
1. 5号墳主体部一次床面 (南より)



2. 5号墳主体部二次床面と閉塞石 (北より)



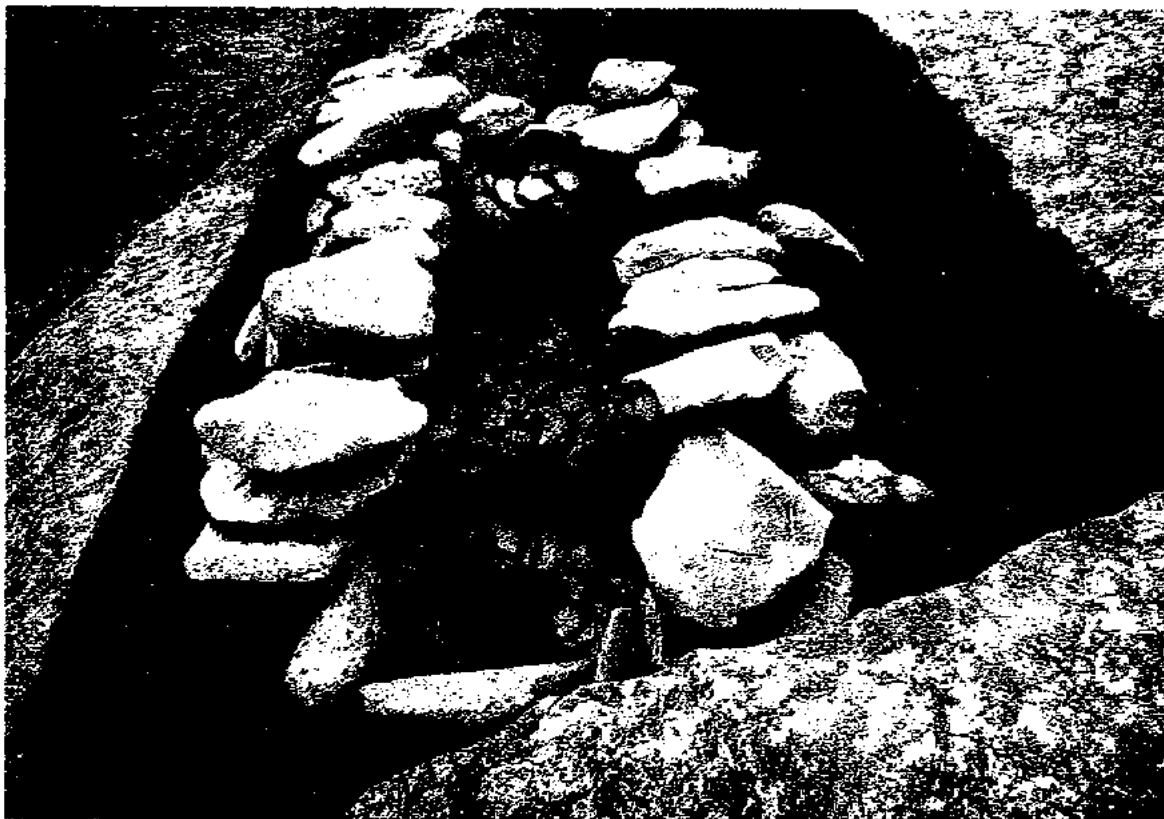
1. 3~8号墳
(北上空より)



2. 3~8号墳
(南上空より)



1. 6号墳全景（南より）



2. 6号墳主体部閉塞状態（東より）



1. 6号墳主体部（西より）



2. 6号墳主体部遺物出土状態（南より）



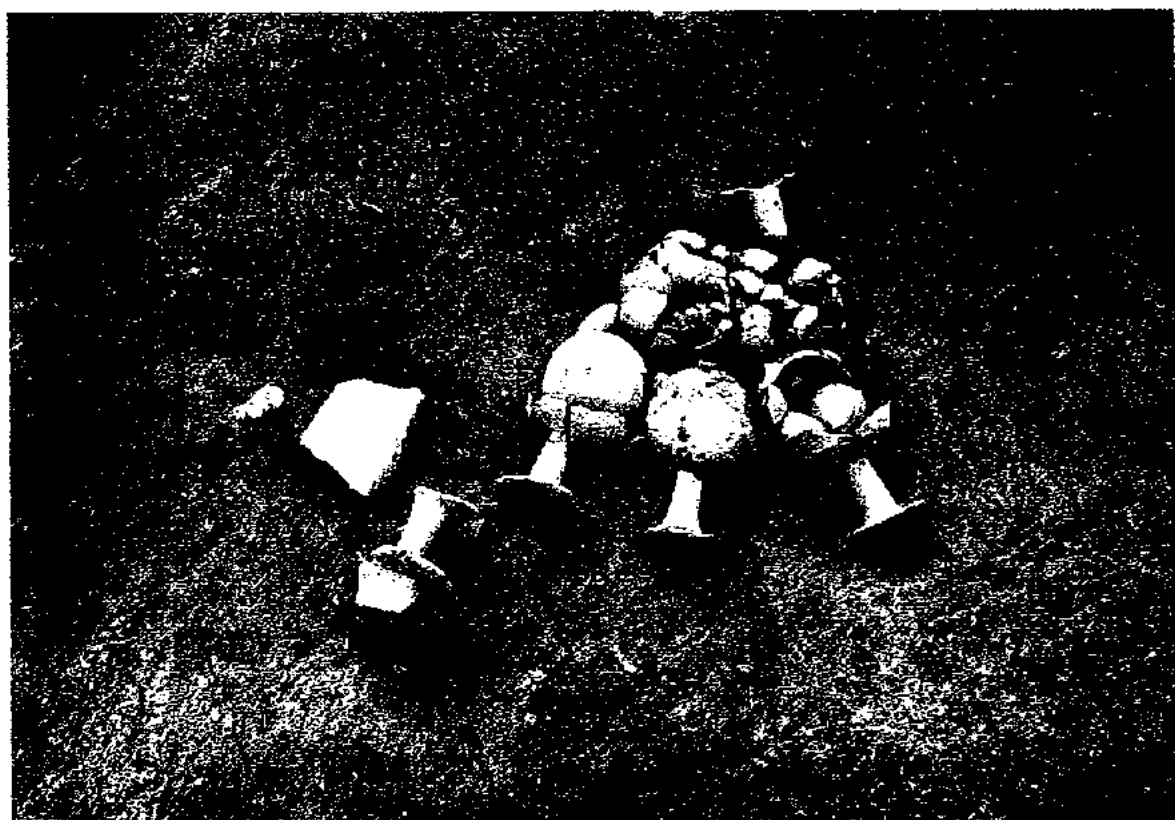
1. 7号墳主体部と周溝 (西より)



2. 7号墳主体部 (南より)



1. 7号墳周溝遺物出土状態（西より）



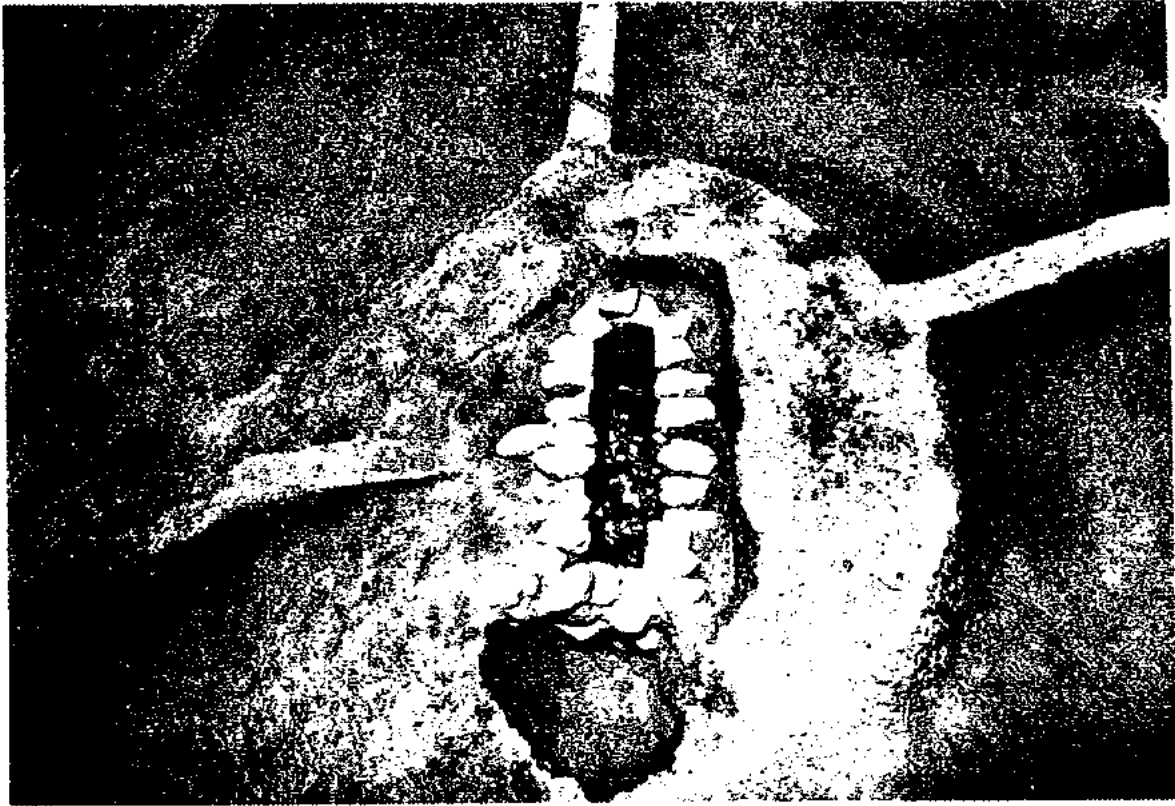
2. 7号墳周溝遺物出土状態（東より）



1. 7号墳主体部遺物出土状態（北より）



2. 7号墳主体部遺物出土状態（西より）



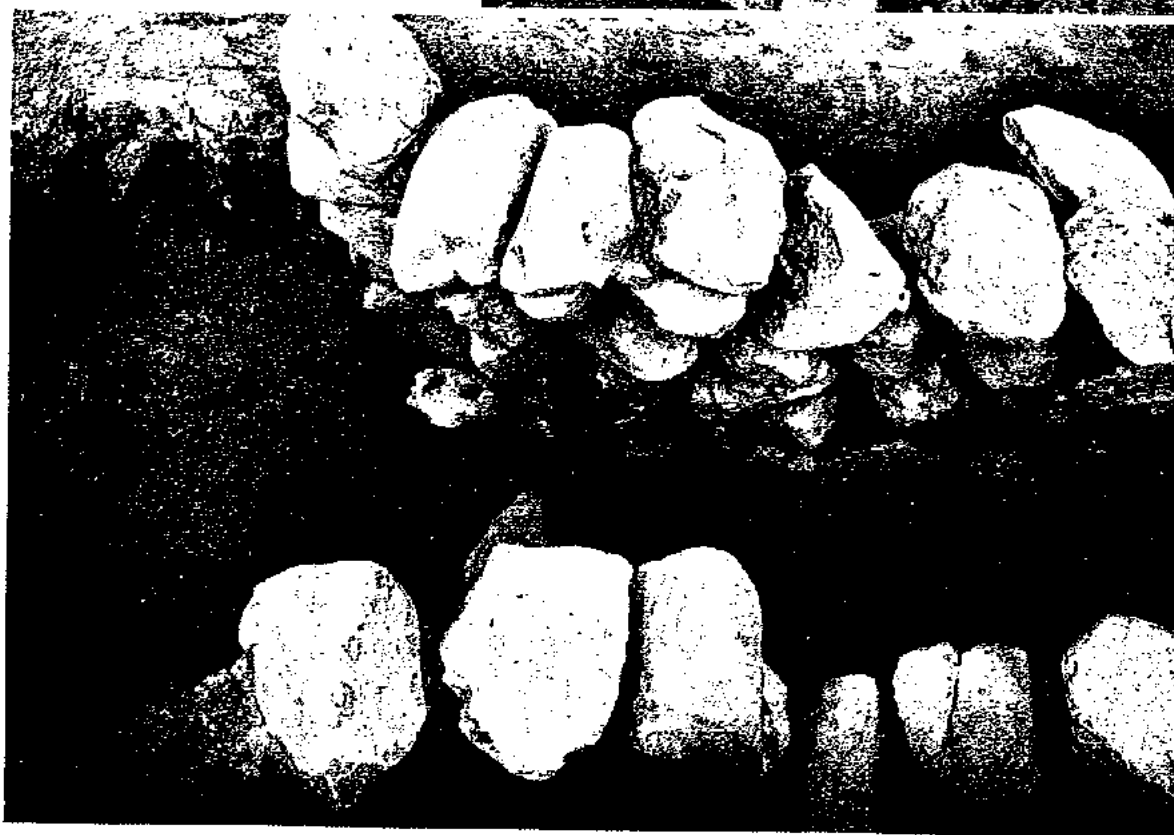
1. 8号墳全葬 (南より)



2. 8号墳主体部 (南より)



1. 8号墳主体部閉塞状態（北より）



2. 8号墳主体部玄門左側壁（東より）



1. 9号墳主体部（北より）



2. 10号墳全景（東より）



1. 11号墳周辺風景（南東より）



2. 11・10号墳全景（南より）



1. 11号墳主体部（西より）



2. 11号墳主体部閉塞状態（南より）



1. 11号墳周溝遺物出土状態
(南より)



2. 11号墳周溝遺物出土状態
(西より)



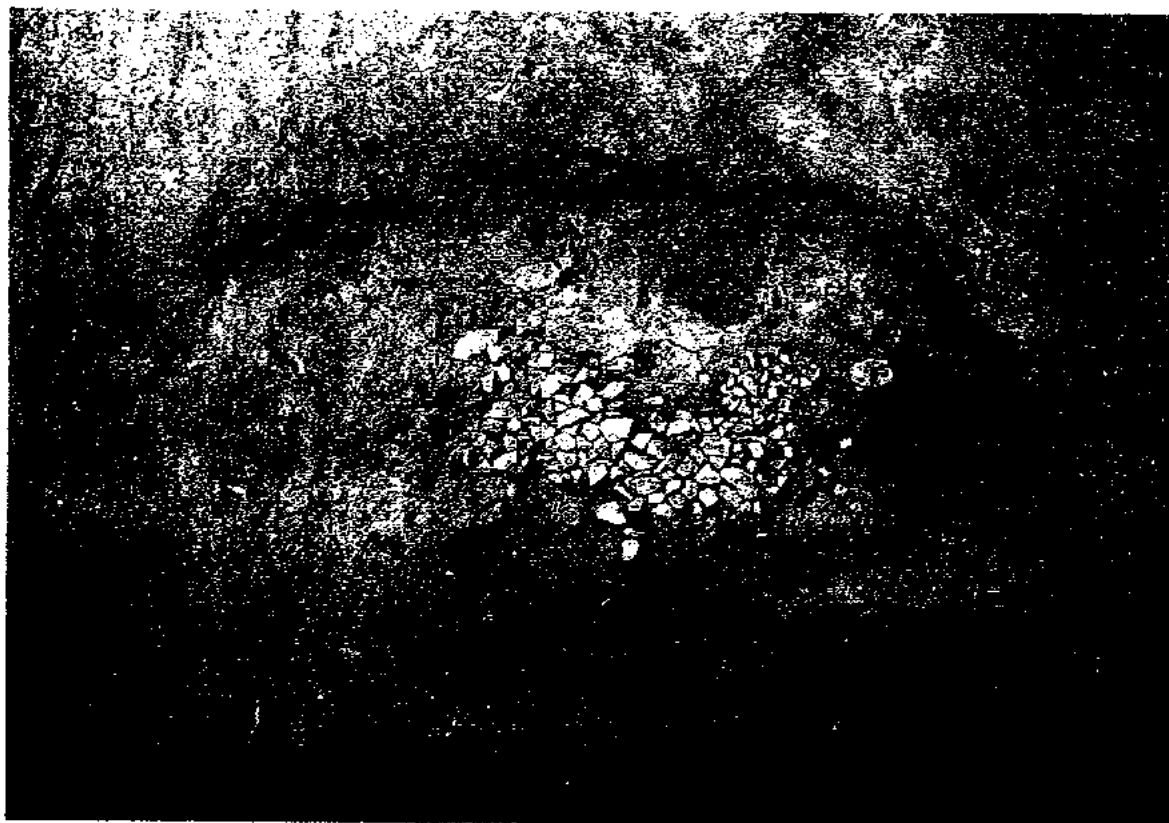
1. 11号墳主体部内 (南より)



2. 11号墳主体部内人骨細部 (南より)



1. 12号墳全景（東より）



2. 13号墳主体部（東より）

1. 14~18・24号墳現況
(北西より)



2. 14・24号墳現況
(南上空より)





1. 14号墳全景 (西より)



2. 14号墳全景 (西より)



1. 14号墳主体部（西より）



2. 14号墳主体部（西より）



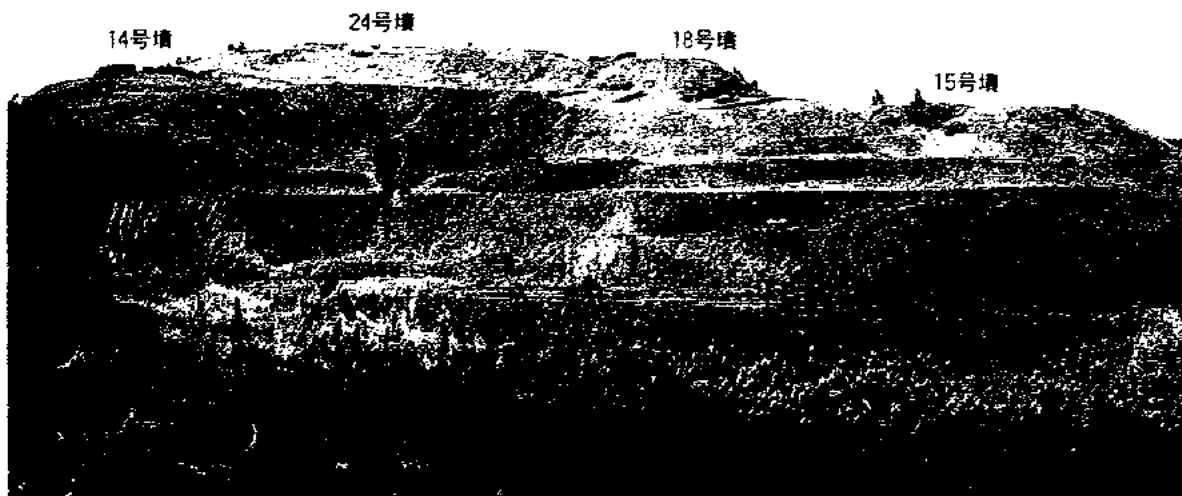
1. 15号墳周辺現況
(南上空より)



2. 15号墳周辺
(北上空より)



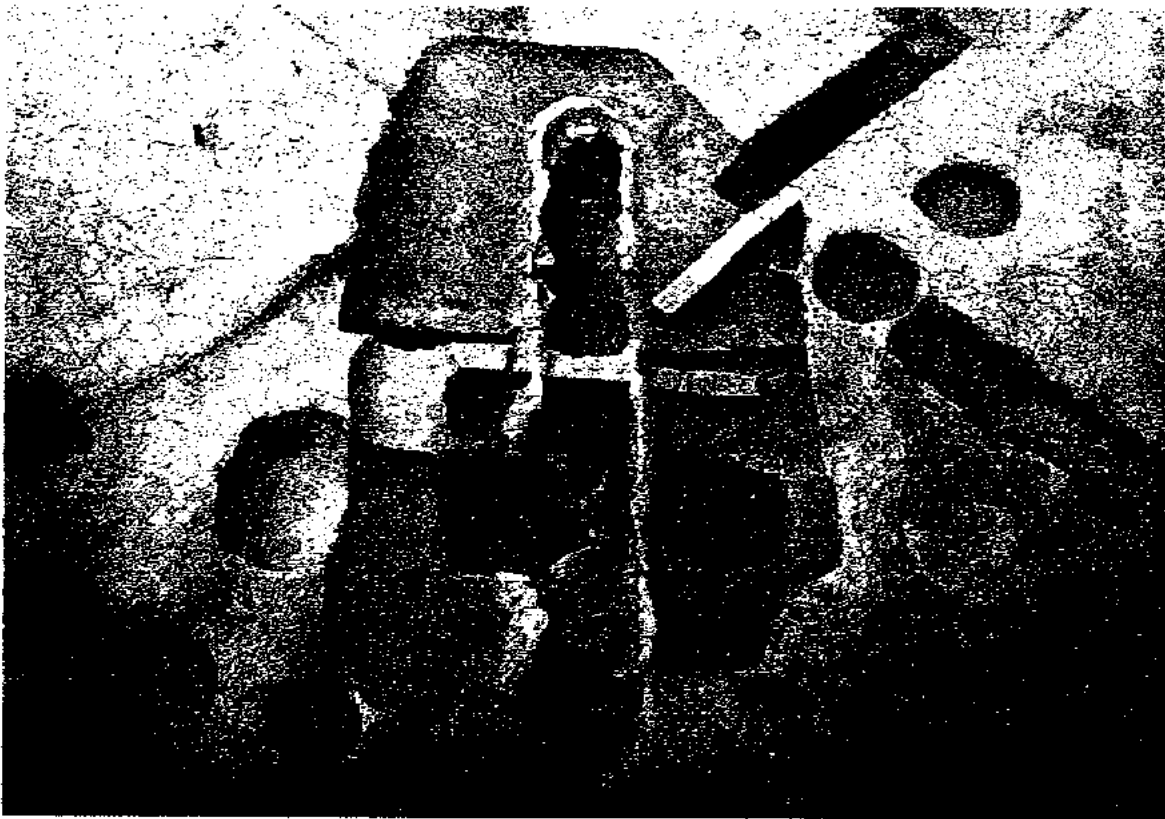
2. 15~18号墳周辺現況（北より）



2. 15~18号墳周辺（北より）



1. 15号墳主体部検出状態（東より）



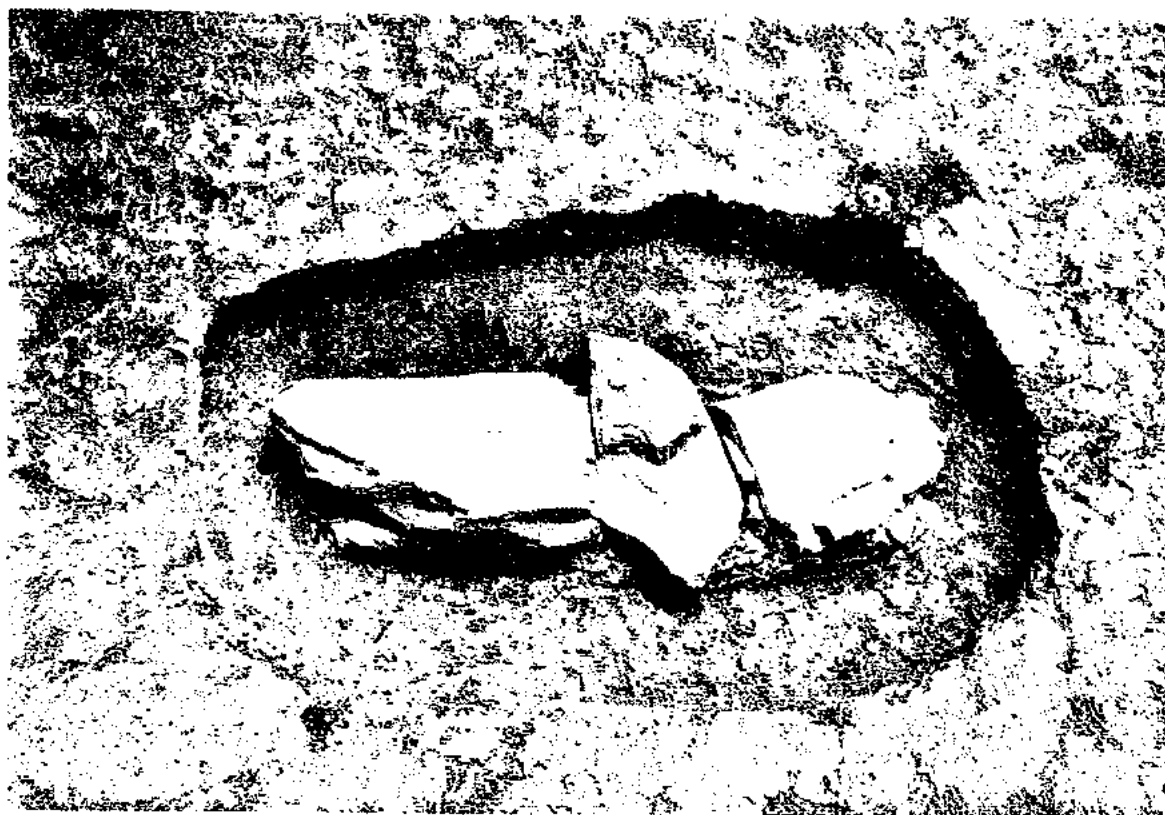
2. 15号墳主体部（東より）



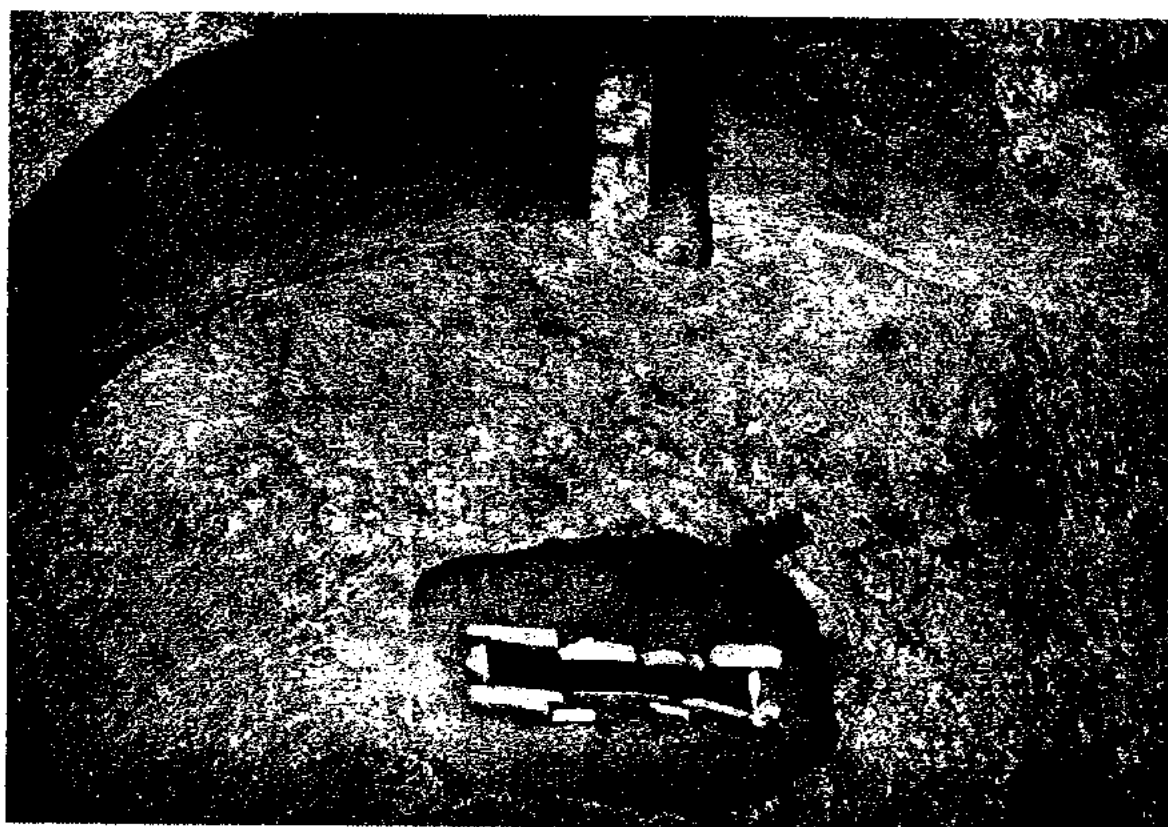
1. 15号墳主体部上層（西より）



2. 15号墳地山上遺物出土状態（東より）



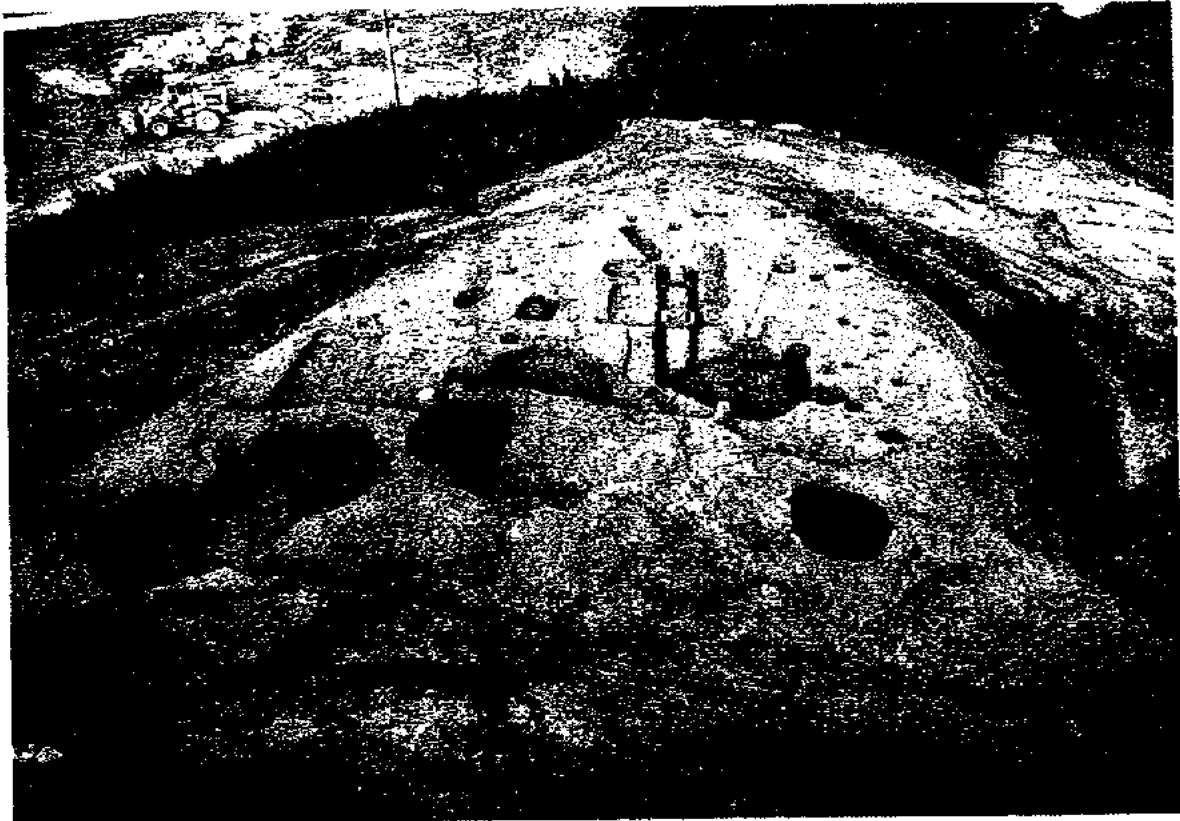
1. 16号墳主体部 (北より)



2. 16号墳全景 (北より)



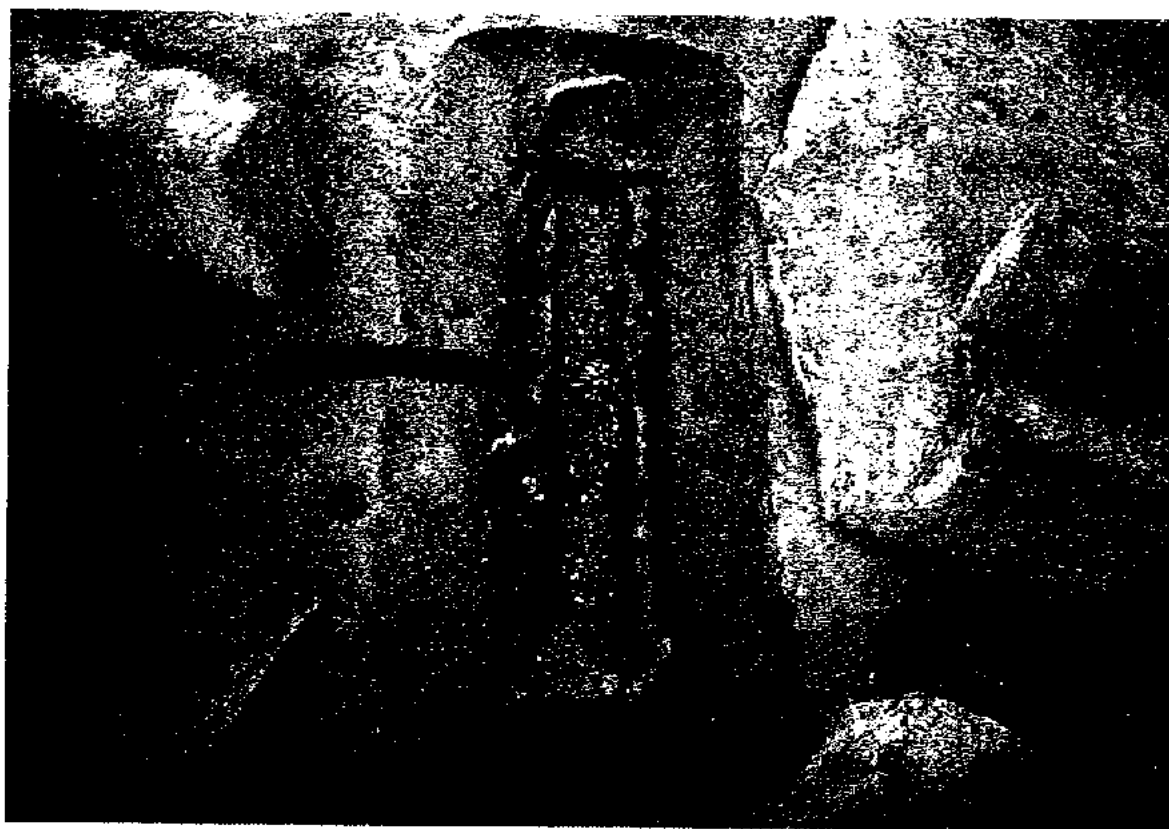
1. 17号墳遠景（東より）



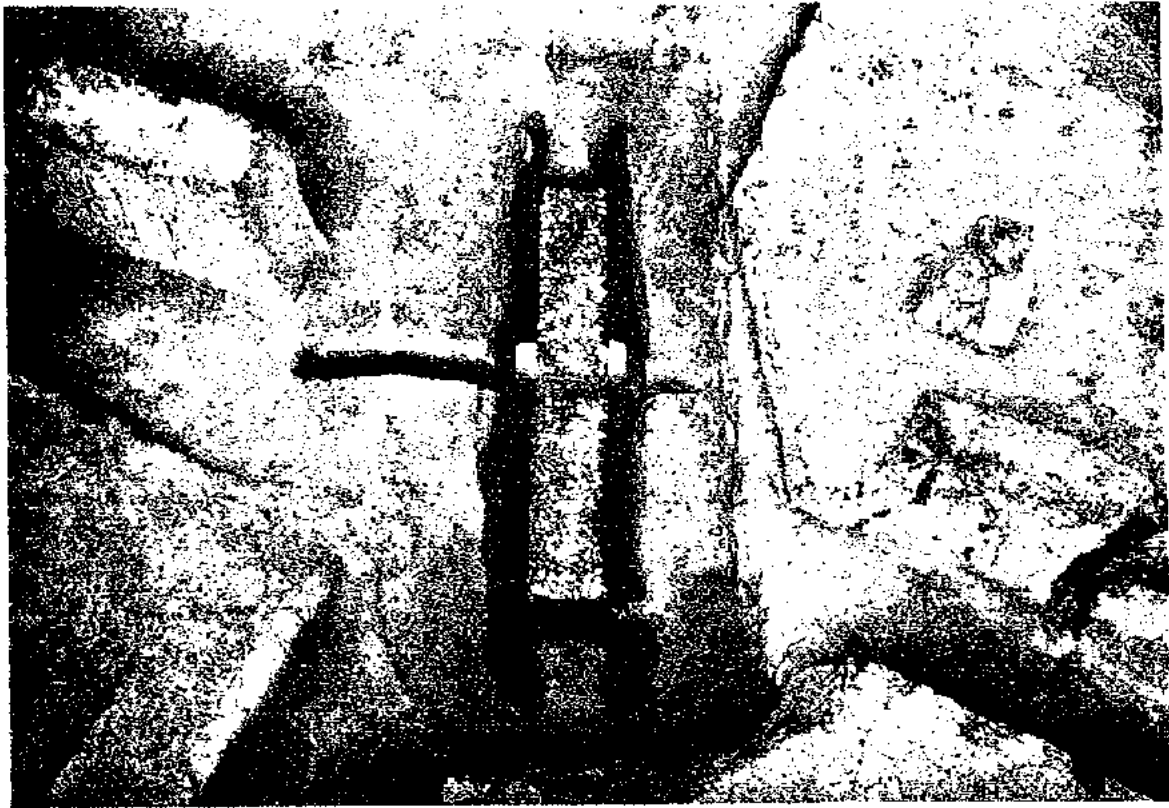
2. 17号墳全景（南より）



1. 17号墳主体部検出状態 (南より)



2. 17号墳主体部 (南より)



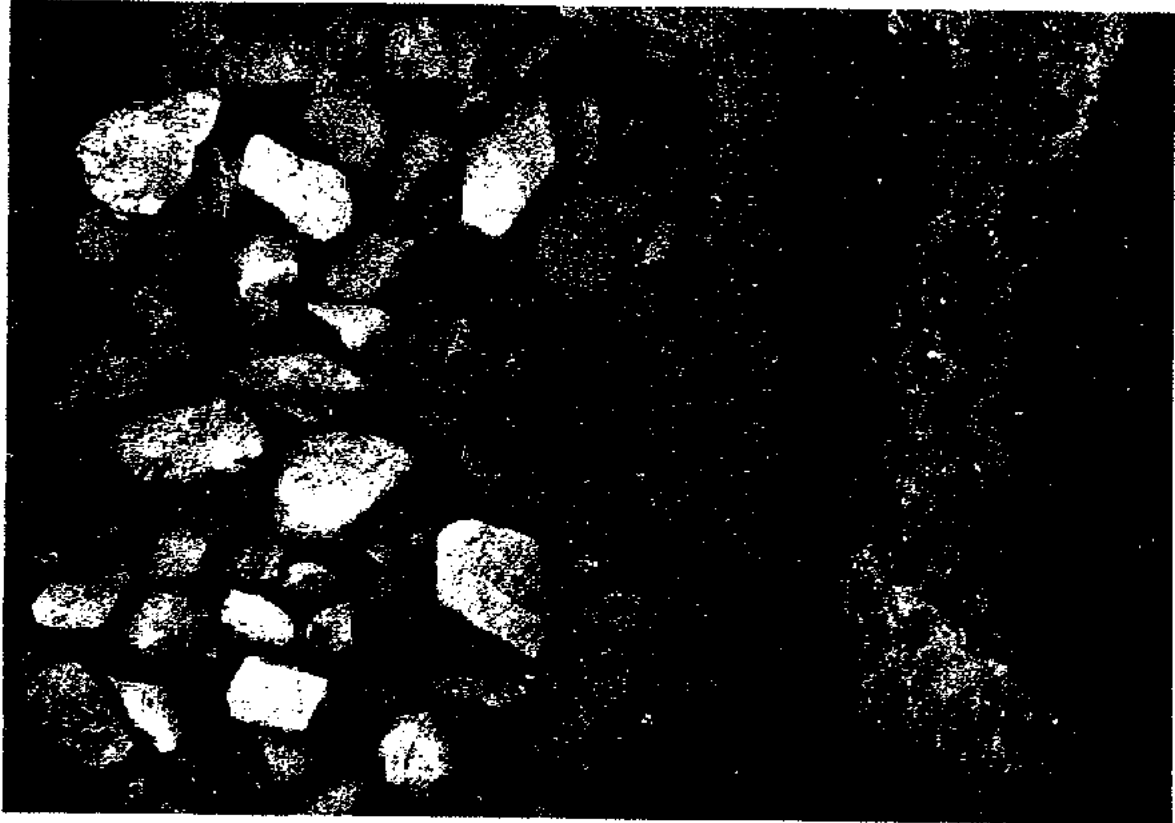
1. 17号墳主体部掘形（南より）



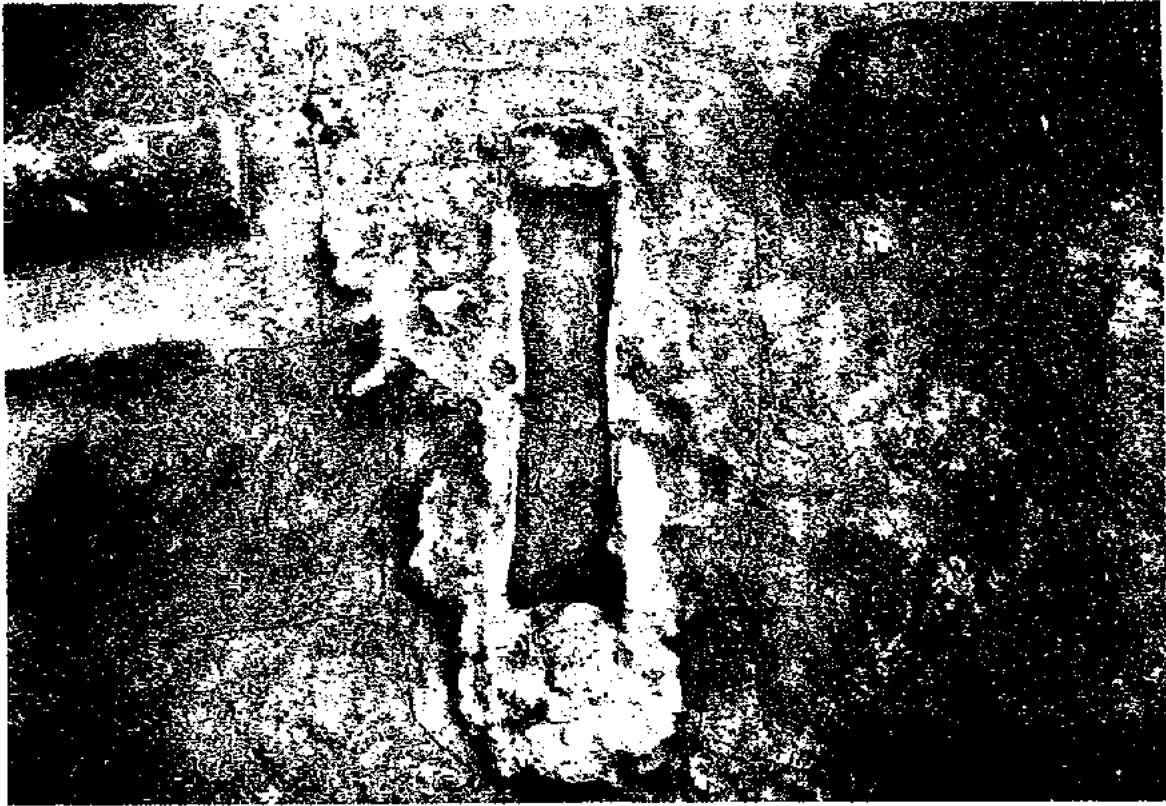
2. 17号墳主体部北小口遺物出土状態（南より）



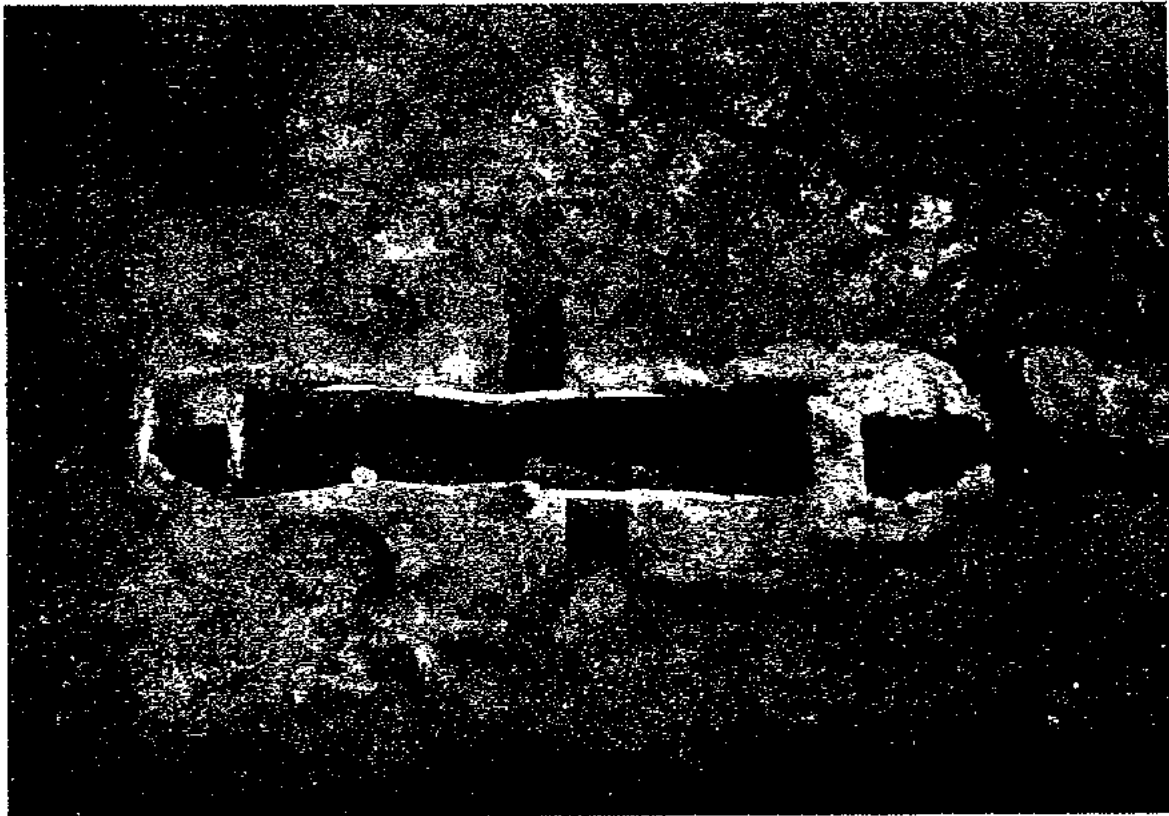
1. 17号墳主体部縦掘出土状態（西より）



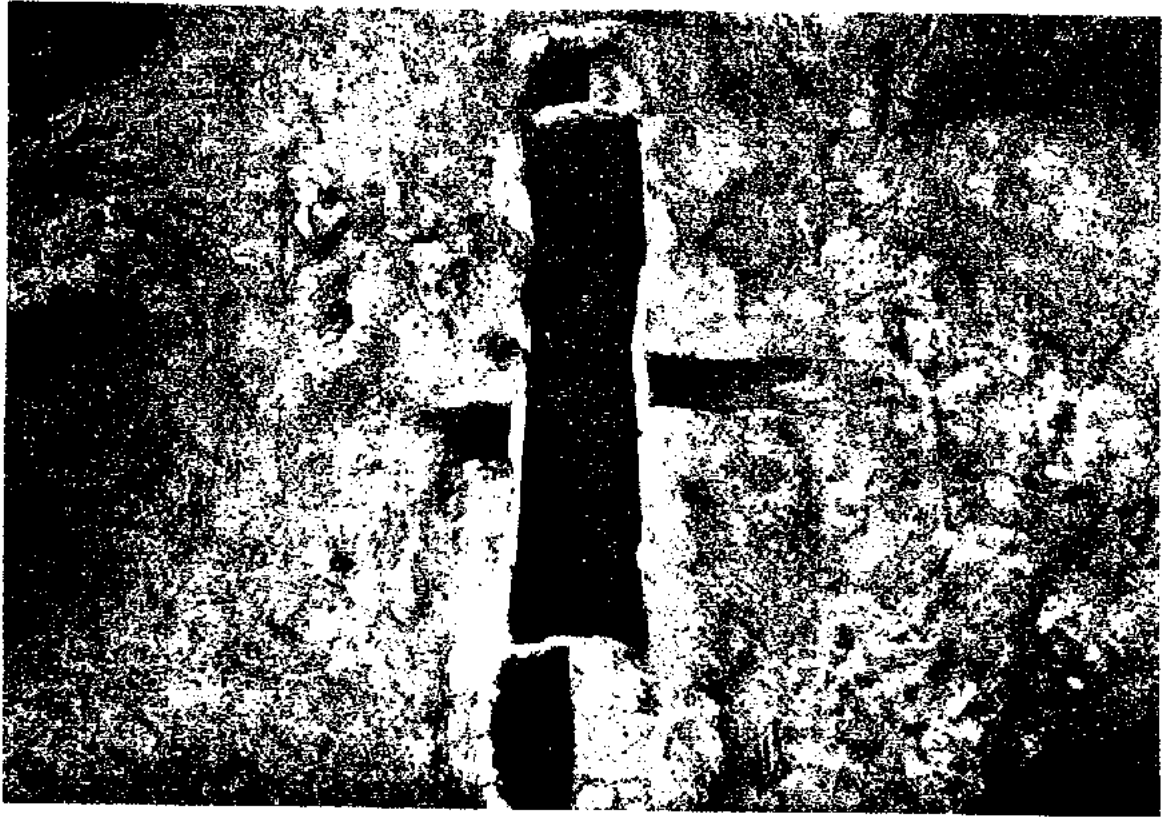
2. 17号墳主体部縦掘出土状態（北より）



1. 18号墳主体部検出状態（西より）



2. 18号墳主体部（北より）



1. 18号墳主体部（西より）



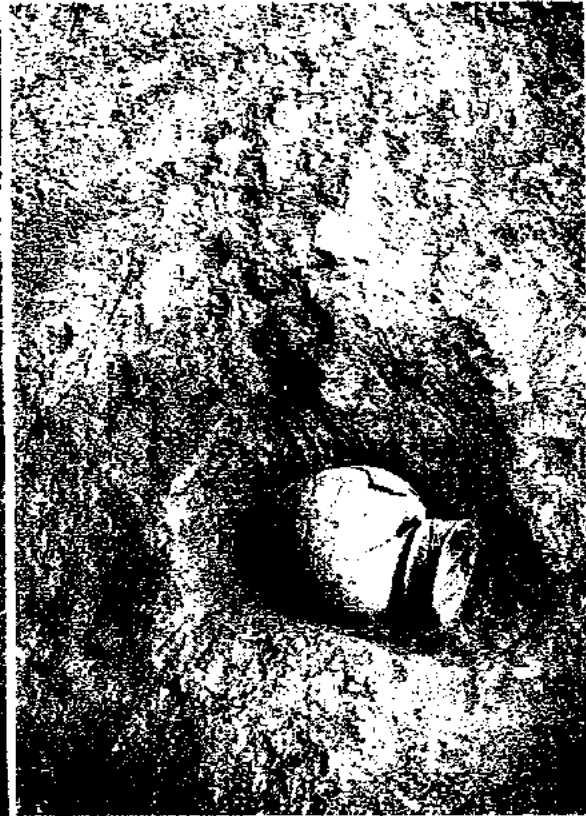
2. 18号墳主体部石材（西より）



1. 18号墳主体部鉄剣出土状態（北より）



2. 1号壺棺墓（西より）



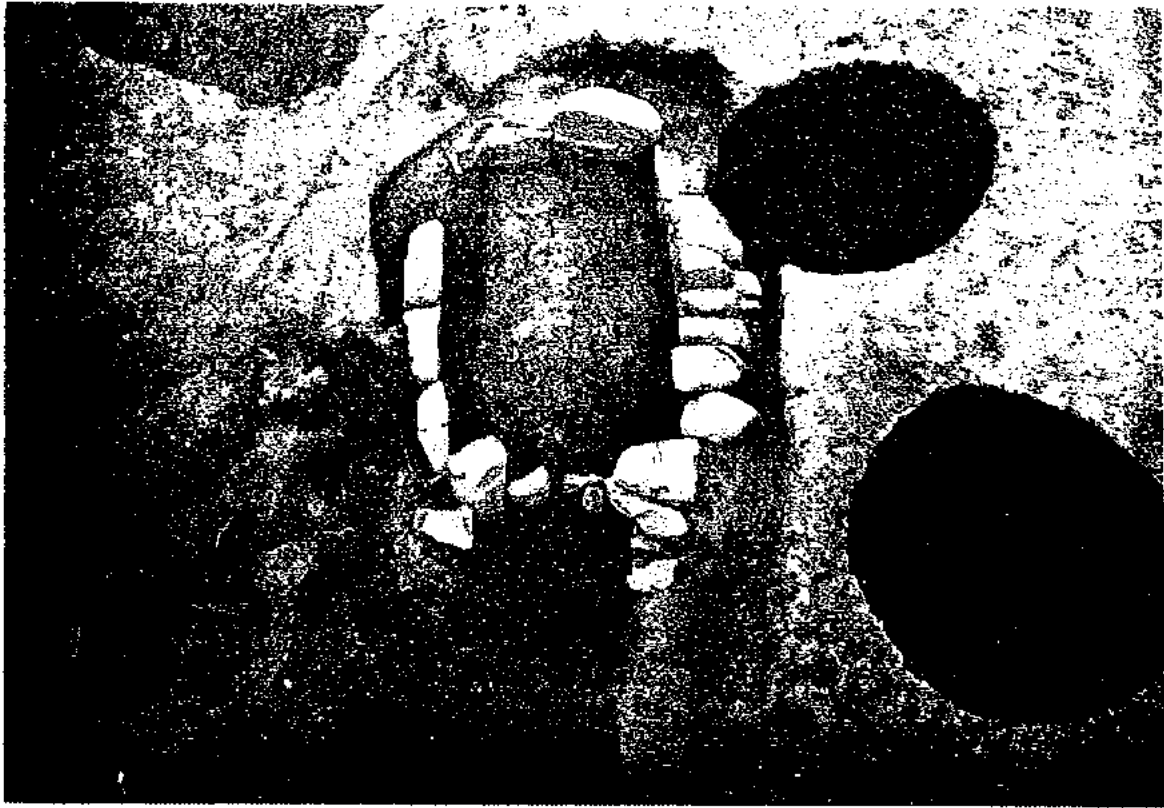
3. 1号壺棺墓（北より）



1. 19号墳主体部検出状態(東より)



2. 19号墳主体部(東より)



1. 20号墳主体部（南より）



2. 20・26号墳と貯蔵穴群（東より）



1. 21号墳主体部 (東より)



2. 23号墳主体部 (東より)



1. 24号墳周辺 (上空より)



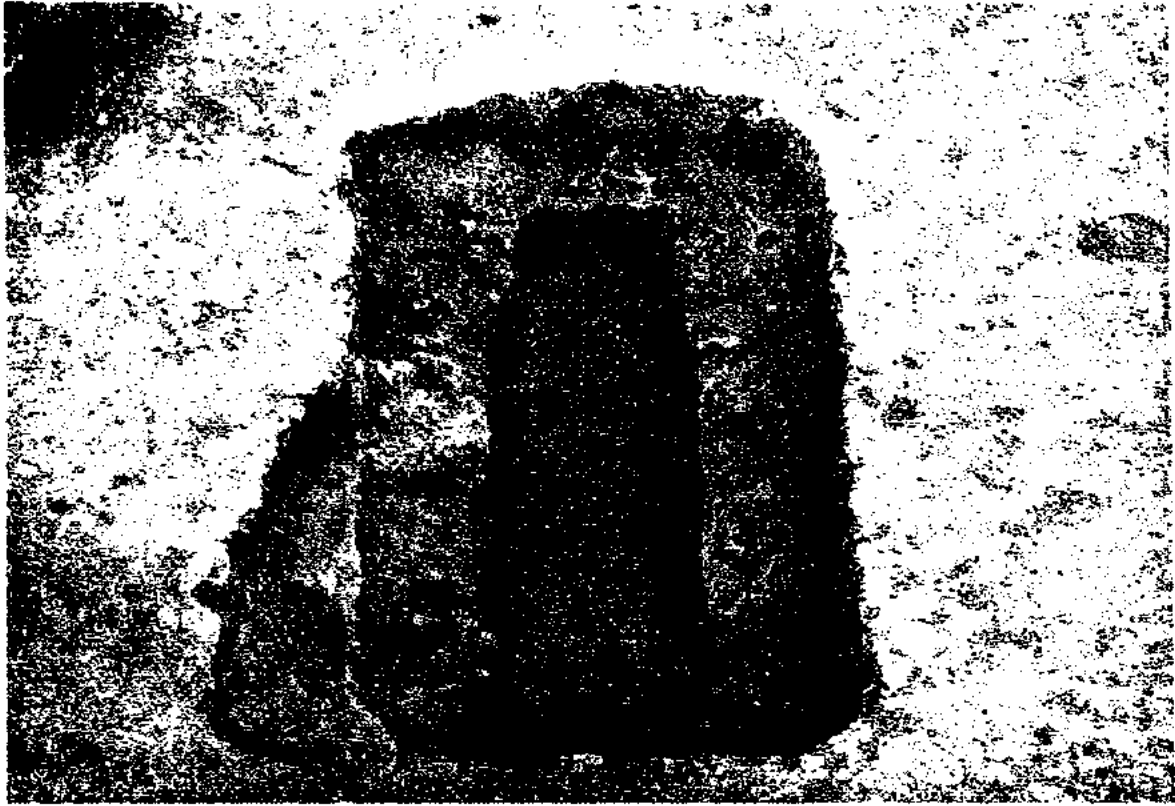
2. 24号墳主体部 (西より)



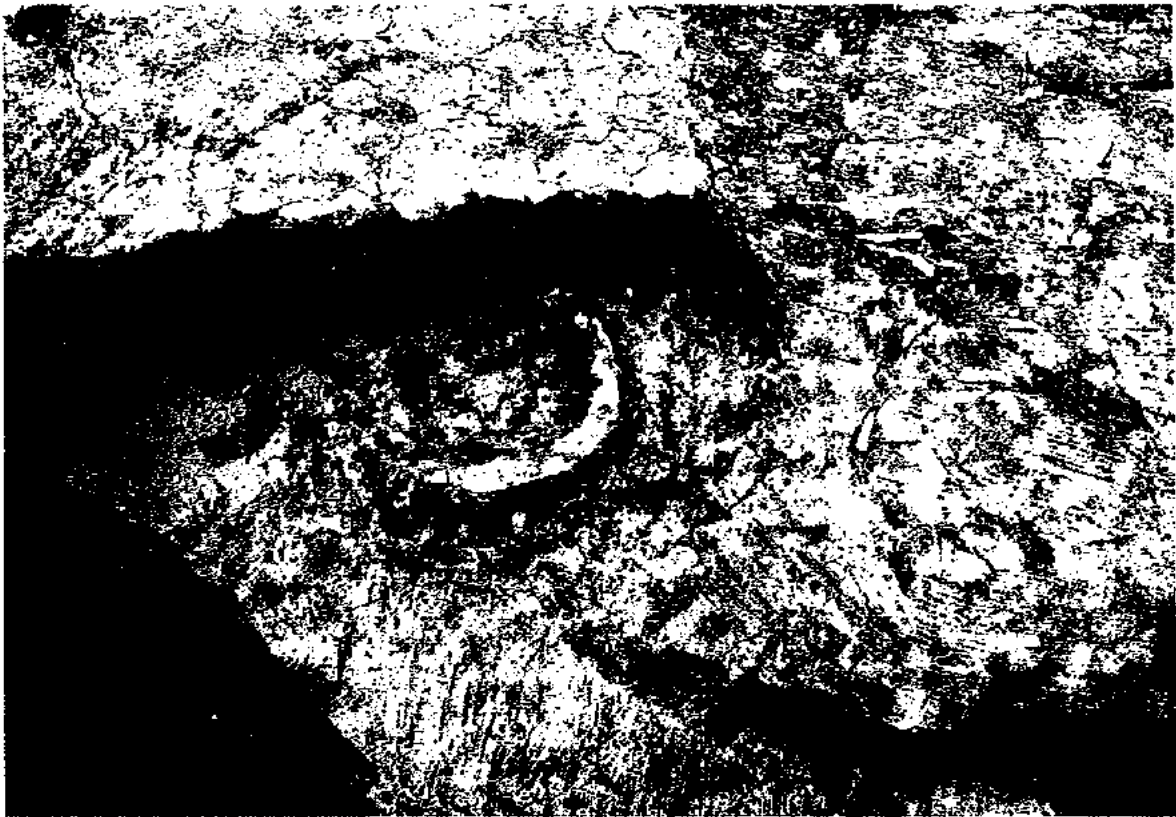
1. 2号壺棺墓（南より）



2. 25号墳全景（北より）



1. 25号墳主体部（北より）



2. SD9 鉄鎌出土状態（北より）



1号墳-1



1号墳-2



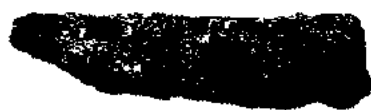
1号墳-3



1号墳-4



2号墳



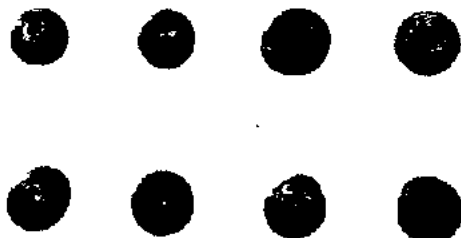
2号墳



5号墳



5号墳



6号墳



6号墳

出土遺物 1



6号墳-1



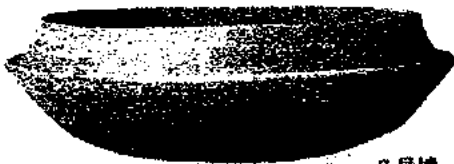
6号墳-4



6号墳-3



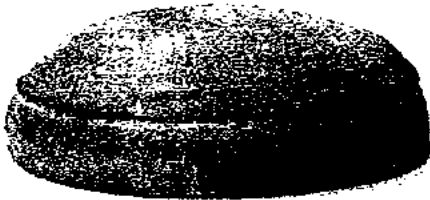
7号墳



7号墳-1・2



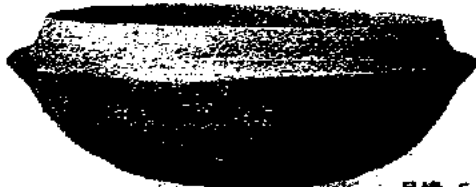
7号墳-7・8



7号墳-3・4



7号墳-9・10



7号墳-5・6



7号墳-11・12



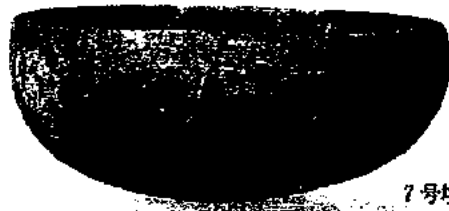
7号墳-13



7号墳-15



7号墳-16



7号墳-17



7号墳-18



7号墳-19



7号墳-20



7号墳-21



7号墳-22



7号墳-23

出土遺物 3



7号墳-24



7号墳-25



7号墳-26



7号墳-31



7号墳-27



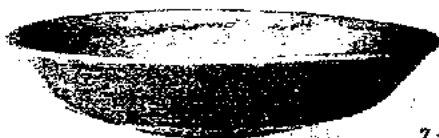
7号墳-32



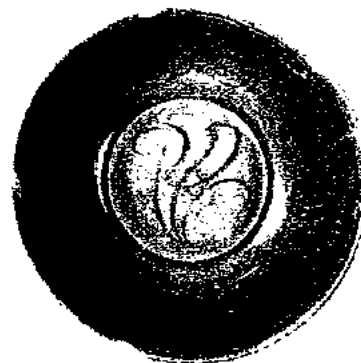
7号墳-33



7号墳-37



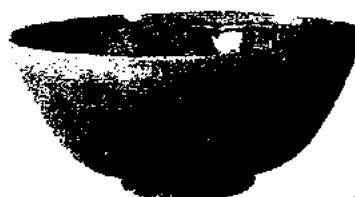
7号墳-34



7号墳-35



7号墳-36



7号墳-38



7号墳-43



7号墳-39



7号墳-40



8号墳-1



8号墳-2



8号墳-3



11号墳



11号墳



12号墳-1



12号墳-2



15号墳-1



15号墳-2

出土遺物 5



15号墳



18号墳



17号墳-1



17号墳-2



17号墳-3



17号墳-4



17号墳-5



17号墳-6



17号墳-7



17号墳-8



17号墳-9



17号墳-10

出土遺物 6

图版46



20号墳-1



25号墳



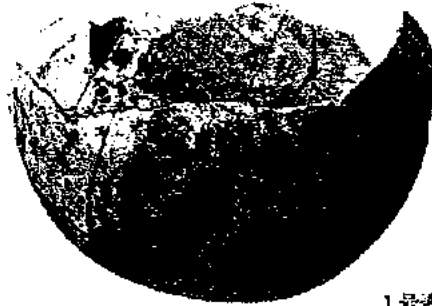
20号墳-2



26号墳



21号墳-2



1号壺棺閉蓋



1号壺棺



2号壺棺



道路状遺溝 SF 1



溝SD 9

出土遺物 7

名 残 III

— 福岡県宗像市所在遺跡の発掘調査報告 —

宗像市文化財調査報告書 第25集

平成 2 年 3 月 31 日

発 行 宗 像 市 教 育 委 員 会
福岡県宗像市東郷 995 番地

印 刷 隆 文 堂 印 刷 株 式 会 社
北九州市門司区畑田町 1-1